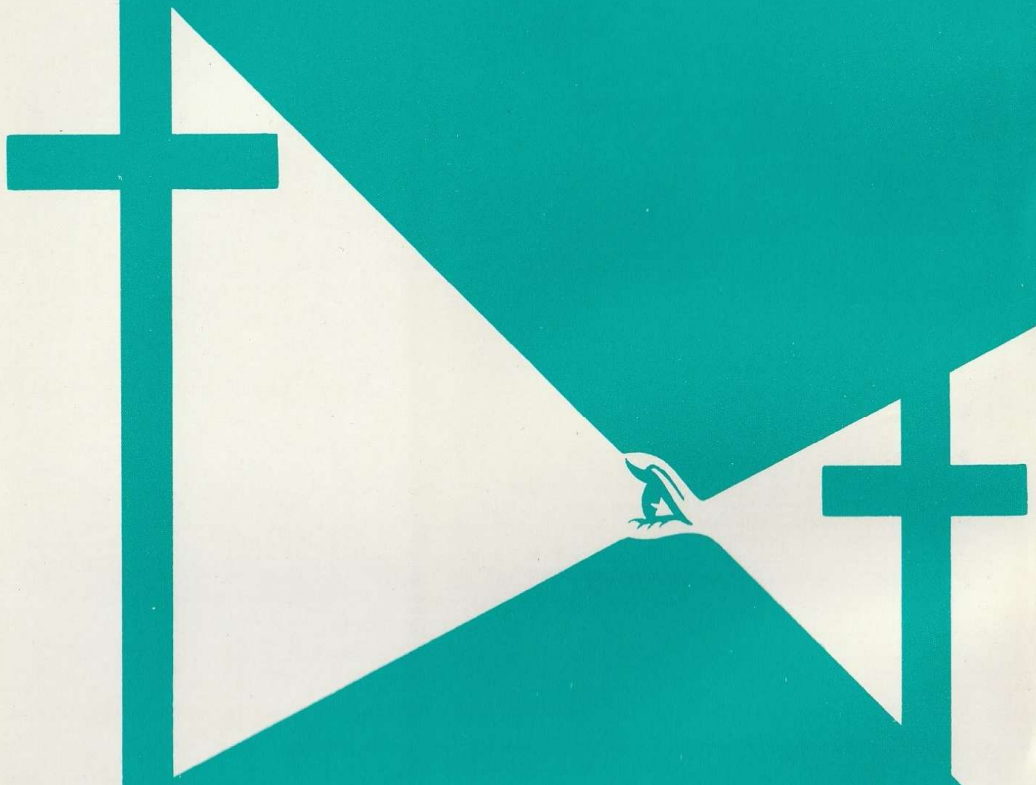
目はつかむ



—視覚教材使用法の秘訣—

マキシン・ウィリアムズ著

目はつかむ

—視覚教材使用法の秘訣—

マキシン・ウィリアムズ著

¥550

日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団
日曜学校部

目はつかむ

——キリスト教教育における視覚教材の使用法についてのハンドブック——

マキシン・ウィリアムズ著
伊藤顕栄訳

序文

授業における視覚教材の用法について書かれた書物は多くあるが、キリスト教教育という特定の分野に、これを適用して用いようとしたものは比較的少ないようである。

そこで、正式の訓練を受けずに、自分の発意から日曜学校の教師となった方々に、理解しやすく、有益な助けとなることを望みつゝ本書は記された。また本書では、これらの献身した教師たちのことを考えて、専門用語を避け、更に、場所や設備にもあまり自由でない教会にも、応用できることを含むように、極力努力した。

また、私たちが神と人との間の正しい関係の確立という、キリスト教教育最高の目的を忘れないように、常に努力した。そして、そうすることによって、目的を方法に優先させたのである。テクニックと原則は分離することができない。そこで原則こそ第一義的に重要であり、方法を支配するものであるとの観点から、テクニックを示すことにした。

この小さな本の中にある情報を、私は多くの方々から得ているが、いちいち名を挙げて感謝を表わせないことを残念に思う。事実これは、多くの読書と、聴視覚教授法の授業での体験と、永年の実際的体

THE EYES HAVE IT

by Maxine Williams

© Copyright 1962 by the Gospel Publishing House
Springfield, Missouri, U.S.A.

Translated by Akiei Ito
Published by Japan Assemblies of God
Sunday School Department
1971

験や観察から生まれてきたのである。私はまた、過去において、視覚教材を間違って用いたり、いろいろとためしていた頃に忍耐して下さった多くの人々や、このような書物の出現を信じて励まして下さった方々に対して、感謝をしているのである。

マキシン・ウィリアムズ

日本語版への序文

イエス・キリストの福音は全世界にあまねく行き渡ります。それは私たちが共に働く者となるからです。神が、私のさまざまな経験を、美しい日本の島々における、伝道と教育の働きを分担するために用いてくださるなどとは、初期の準備の頃には想像もいたしませんでした。けれども今、あなた方と共に一つの役割りを果たせることを、心から喜んでおります。

本書の学課を作り上げるには、多くの人々の貢献がありました。私たちの、キリスト者である両親はキリストを愛し、仕えるようにと教え、また私たちの努力をかたむけて、キリストをほめたたえることを身をもって示してくれました。ある人々は、私たちがいろいろな方法を練習し、技術をみがくのを、大きな忍耐をもって見守ってくれました。そして今や、あなたがたの同国人である伊藤顕栄兄弟が、これらの学課を日本語で提供するために、労してくれました。

願わくば、かの大いなる日に、私たちの結合された努力のすべてが、イエス・キリストの栄光を現わすものとなりますように、心から祈ります。彼こそ、すべての賛美を受けるにふさわしい方です。

ワシントン州　カークランドにて

マキシン・ウィリアムズ

一九七一年八月

目次

序文
日本語版への序文
第一部　予備的考察
第一章　視覚教材と教授……1
第二章　視覚教材の使用法に関する一般原則……23
第三章　視覚教材—その使用法、資料、手入れ……33
第二部　映写されない視覚教材
第四章　フランネル・ボードによる教授……43
第五章　黒板による教授……65
第六章　地図や図表による教授……77

第七章　実物学課による教授……93
第八章　平面画、透視画、礼拝の中心装飾による教授……115
第九章　劇による教授……141
第三部　映写される視覚教材
第十章　動画と静画の映写……159
訳者あとがき

第一部　予備的考察

第一章　視覚教材と教授

視覚教材の目的と位置

視覚教材を用いることは、それ自体が目的ではない。このような教材は、普通「視覚補助教材」(visual aids) と呼ばれている。この名称は、教材の目的をよく示している。視覚教材の目的は、生徒が教えられている真理を、一層はっきりとつかみ、覚えることができるように助けることである。視覚教材についてはよく覚えているが、それが伝えるメッセージは忘れてしまうという方法は、補助教材ではなく、むしろ主目的になってしまっている。

生徒は目の楽しみを味わうだけで、何も学ばないことがある。しかし、この視覚教材の考察において私たちは、これらの補助教材を**教える**ために用いるということを前提としている。視覚教材は学習の一部分だから、その使用法は教授法の原則にかなうものでなければならない。教えるということ一切を支配する法則が、視覚を通しての学びをもコントロールするのである。教えるということの目的は、そのまま視覚教育の目的にもなるのである。

学習の原則を幾つか考え、それを視覚教材の使用法に応用してみよう。

一、学習は、生徒の行動における変化によって測られる（行動とは肉体的活動に限定されない）。学習は生活と結びつくべきものである。それは新しい状況において、学習したことの一部又は全体を用いることのできる能力である。

二、生徒は自分の成長と体験の程度に応じて、教えを解釈する。クラスの中にいる者はみな同じように理解するのではない。

三、学習は知っているものから、知らないものへと前進する。理解する基礎となるものが無ければ、学習はほとんど、あるいは全くなされない。教えることにおいていつも重要なことは、意味であって、視覚教育においてもその通りである。

四、生徒に学ぶ「備え」ができている時に、学習は最も楽に、効果的に行なわれる。この備えには、生徒の成熟度、能力、興味などが含まれる。

五、単なる観察よりも、実際に参加することが、印象を一層強く与える。

六、私たちは満足を与えてくれるものを、最もよく学びとるし、しばしば繰り返してそれを行なう。

これは視覚教育の持つ、最も強力な長所の一つである。

視覚教材をただ単に使うというだけでは、学習の面では、何一つ保証することができない。教師はしばしば、見せるものが何かありさえすれば、自分の授業の問題は自動的に解決すると感じる。しかし、教授と学習を支配する法則は無情である。「教師は自分の教えようとしている事柄を知らねばならない」という、昔から確立している法則は、今も生きている。視覚教材を使えば、学課の準備をしなくてもよいことにはならない。また、このような教材を用いても、意味が理解されるという保証はない。教師は生徒が視覚教育の目的を知り、教材と現在学んでいる主題との関係を、理解するようにさせなければならない。もしそうしないならば、そこには混乱があるだけである。

そこで学習の法則を調べてみると、たとい私たちが、神の与えられた真理を提供することに大きな関心を持つとしても、同時に、いつも、その真理は生徒との関連性を持ち、生徒の状態に順応して提供されなければならないということがはっきりしてくる。しかしまた、私たちは、真理そのものは変わるものでも、順応するものでもないことを、しっかりと認識すべきである。変化するものは提供の方法である。この事実が、視覚教材の選択と使用法に大きな影響を与えるのである。

視覚方式の利用を決定する理由

私たちは視覚教材を用いるべきだろうか？　視覚教材が効果的であるといっても、それは他の方法をみな捨て去るべきだという意味ではない。

一、視覚方式は、それが授業の目的を最もよく達成する時にだけ、用いられるべきである。視覚教材は何によって「よい」教材になるのだろうか？　それは、色彩や変化に富んでいることとか、使用法が簡単だということではない（これらはみな、重要な要素ではあるが）。もちろん、ただ目に見えるから「よい」のでもない。与えられている目的を達成する時に、それは「よい」教材になるのである。だから、学課の目的を最初に設定しなくてはならない。「最もよい」補助教材などというものはない。生徒を望ましい方向に最もよく向けるものが、最もよい教材なのである。目的が第一であり、教材は第二義的なのである。

二、視覚方式は、教えられていることを一層はっきりさせる時に、用いられるべきである。教える事がらは、印刷されているだけでは充分ではない。教師になったばかりの人は、「でも、それは本に書いてあります」とか、「教案にはそうありました」とか言って抗議するだろう。学ぶということは、いつも個人的な事である。どんな本の著者も、教案の学課の執筆者も、あなたの受け持ちの生徒を特に考えに入れて、書いているのではない。こういう人々は、いつも、一般的成長度と、平均的円熟度という広い視野から、主題を取り扱わなければならないのである。しかし、そのようにして書かれた一般的材料が、ただ「出版された」というだけで、盲目的に受け入れられている。ところが、著者たち自身、それぞれの材料がおのおのの状況に、適応されなければならないことを、認めているのである。

批判せずに材料を用いる、という愚かさを示す一つの事件が、何年か前に、起こった。ある教案に、エリシャが神の導きによって、一皿の塩を用いてエリコの水をいやした学課が出ていた。この学課の中で提案されていた工作（視覚教育の一種）は、クレヨンでにじを書き、その下にハトの絵を書くことだった。ところがどう考えても、学課と視覚活動との間の関係を見いだすことができなかった。この事が出版社に報告されたとき、その教案の編集者はあわてふためいた。それは校正の間違いだった。何人かの人々が、この学課の活動や、さまざまな部分を分担して受け持ったのだが、それを一つにまとめる場合に、二つの学課の一部分ずつが誤って一つにされてしまったのである。工作は全然違う学課のものだった。このような間違いは、そう多くあるものではない。しかしその日曜日には、何百という日曜学校で、生徒たちは画用紙を与えられて、にじとハトの絵を書くようにと言われたのである。

三、一、二の規準を満たした場合、生徒の興味と成熟度に適切だと思われるなら、視覚方式を選ぶべきである。地図は、視覚教育の中の一つの大切な形である。しかし、どんな教師でも、六歳の子供に地図を使うことはできない。それは、まだ地図の見方を習っていないからである。子供たちは、小学校に行って大分たってから、この技術を身につけるのである。また、一年生に続け字で黒板に字を書くことはできないし、就学前の生徒に字を書いて示すこともできない。逆に、十代の生徒は、ぬり絵などにはほとんど興味をおぼえないだろう。

これと同じように、身体的に同じ年令の子供は、同じような理解力を持ち、共通の生活背景や、全く同じ興味を持っていると考えるのも間違いである。教師は、教材の内容、生徒の発達状態、学課の目的、教室の設備などを検討して、自分のクラスに最も良い方法や補助教材を決定しなければならないのである。

視覚方式の問題点と限界

視覚方式は決して新しいものではない。カインとアベルの昔から、視覚法は人々を教えるのに用いられていた。アベルは主の前に羊をささげることによって、自分と神との関係を描き出したのである。そのことにより、彼の頭の中には、創造主の前における被造物の立場、聖なる神の前における罪人ということが、明白に示されたのである。

一、概念は複雑で、徐々に形成されるものである。これは**形成される**ものであることを注意していただきたい。頭脳は、多くの経験から概念を組み立てていく。「自由」とか「デモクラシー」というような言葉は、文化の違った国々ではずい分違った意味を持っているし、同じ文化の中でも、人によって違うことさえある。それは、言葉の意味は、ただ経験を通して徐々に理解されていくものだからである。だから、ある人にとって「自由」とは放任主義を意味し、他の人にとっては、責任をも意味するのである。

二、概念は、真実であることもあり、また、間違いであることもある。経験が、正確な概念を形成することは大切なことである。神さまとは、年老いた、ひげをはやした人で、空中に浮いていると考えている人々がいる。それは大抵、絵（視覚教育の一種）から得た概念なのである。

ある国々においては、アメリカの生活についての間違った概念が、視覚に訴える方法で形成されてきている。そのような国の人々は多分、ハリウッド映画によって描かれた姿を見たり、あるいは彼らの政府が、特にアメリカの犯罪や暴力の場面を選び、他の面を示す場面を取り除いて複写した映画などを多く見ているのである。

オランダのある教師が、アメリカを初めて訪問した時、モンタナ州東部の、何キロにもわたる広大な、木のない地域を見てびっくりした。彼女は前に、モンタナでの材木の伐採の映画を見たことがあったので、モンタナは全部山地で、森林だと思っていたのである。

三、キリスト教教育の課題は、キリスト者生活における数多くの抽象的概念の、正確な概念を形成することである。人間は血のあがないによって救われるのである。だからその考えが、神のみことばのいたる所に形成されている。正確な姿を最初から形造ることが大切である。カインには、ただ単なるそなえものでなく、血のそなえものが、神との正しい関係を打ち立てるという、正しい概念を得ることが必

要であった。

ユダヤ教の過越しの祭りを考えてみよう。これは、実に生き生きとした視覚授業だった。神はそれを記念のものとし、また引き続いて用いる**教育**的方法ともしようとされたのである。なぜなら神は、ユダヤ人の親たちに、エジプトを出たあとでも、続けてそれを守るようにと教えられた。そして子供たちがそれを見守って、「後になってあなたの子があなたに尋ねて、『これは、どういうことですか。』と言うときは、」それを用いて、神の救いの御計画を教えるようにしなさい、と言われたのである。

このような視覚教育は、聖書全体を通じてひんぱんに現われている。幕屋に見られる細部にわたる記述は、神について、また、人間が神の臨在に近づく方法を示す、複雑な、視覚による説明だった。そしてそれらはみな、後になって、イエス・キリストにおいて成就を見たのである。

預言者たちは、神のメッセージを生き生きと宣言するために、しばしば、劇的な、しかも永続性のある視覚教材を用いた。キリストは一枚の銀貨を用いて、彼を批評する人々の口を封じられた。

問題は、**考えが抽象的であればあるほど**、その概念を形成するのに**時間がかかる**ということである。中には、何年もかからなければ、つかめない考えというものもある。これはごく初歩的真理であるが、聖書の教師たちはそのことによっても、働きを継続して行なうように努力すべきである。

経験が具体的であればあるほど、それを思い返したり、再現したりすることが容易である。クッキー

の作り方や、エンジンの修理の仕方を、目に見える方法で実際に説明することは、比較的簡単である。またそれには、一諸に行なうという、非常に大切な要素を組み入れることができるので、比較的やさしくなるのである。

たとい直接的経験が無くても、ある分野においては、正確な理解を持たせることが、さしてむずかしくない場合がある。たとえば、海から遠く離れた所に住んでいる子供たちに、たつのおとしごについて教えようとしていることにしよう。近所に水族館などが無くても、一枚の絵があれば、その形や棲息地について、知識を与えることができる。そして、よく知っているもの、たとえば人間などを、その絵に入れてみるなら、生徒はその大体の大きさを理解することもできるのである。

これよりむずかしいのは、算数において、数価値の概念を分け与えたり、慣用語の意味を知らせたりすることである。小さな子供は三本の棒をさして「十本」の棒と言うかもしれない。その子供に「十」という言葉、あるいは「10」という数字は、あるものの不変、特定の数を示すということを、完全に理解させるには、非常に多くの教えと、実際的応用とを必要とするのである。十個のりんごの絵を示すだけでは充分ではない。ほかのものが十個ある絵が、やはり無くてはならない。そうでないと、その子供は「10」という数字はりんごの意味だと思うかもしれない。「十」は、りんごにも、靴にも、家にも、指にも、そのほかのものにも、あてはめられることを、その子供は学ばなければならないのである。

「彼らは頭を寄せ集めた」とか、「彼女は机の上に目を落とした」というような慣用句の意味を教える場合のむずかしさを考えてみるとよい。ここでは、視覚教育は無用である。しかし、このような表現は、私たちが毎日使う、普通の言葉の一部分であり、正しい意味をもって用いられなければならないものである。

多くの宗教的な抽象的概念の意味をはっきりさせることは、更にむずかしいことである。抽象的であるということは、現実的でないということではない。しかし、理解することがもっとむずかしくなるのである。そのような言葉の意味は、多くの経験や、象徴化や、説明から引き出されなければならない。意志の伝達は、抽象的概念を用いなければ非常にむずかしく、不可能な場合もしばしばである。そして、言葉そのものが、抽象的なものなのである。このような概念は、子供たちの毎日の経験によって、徐々に形成されていくのだが、子供たちは、自分たちがそれを吸収していくことを全く意識してはいないのである。

四、宗教的概念が、何の準備も無い子供たちに押しつけられることがしばしばある。教師は、全くの最初から造り上げていく、困難な仕事に直面する。キリストと教会を中心にしている家庭の子供たちは、そうでない家庭の子供たちに比べて、神の概念が徐々にではあるが、形成されているので、宗教的な事をより多く理解することができる。また、宗教的な用語も知っているのである。

キリスト教の考えや、理想を、全然キリスト教の背景のない子供たちに教えることは、楽なことではない。ある夏期学校の教師が、「初めに、神が天と地を創造した。」という有名な言葉から話し始めた。すると七歳の子供が応答して、「神さまって、だあれ?」と言った。後ほどこの教師は、こんなに説明がむずかしかったことはないと証言していた。この場合視覚教材は役に立たない。この教師は、神さまは見えないのだと言った。すると子供は「じゃ、幽霊?」と尋ねた。教師は、神さまは天にいるのだということを示そうとした。応答は「神さまは飛べるの?」だった。この教師は、教会での教育の大部分は、生徒がすでにある程度の、神についての基本的概念を持っていることを仮定して行なわれていることに、はじめて気がついたのである。

ニコデモも問題にぶつかった。「新しく生まれなければ」ならないというイエスさまの言葉に、ニコデモは当惑したのである。「人は、老年になっていて、どのようにして生まれることができるのですか。もう一度、母の胎にはいって生まれることができましょうか。」

あるモシ王国（現在のオート・ヴォルタ）への宣教師は、この共通概念が欠けているために、新訳聖書の翻訳に際して体験した、困難な問題について話してくれた。彼らは「私たちのたましいのために、……錨（いかり）の役を果たし、」という言葉で表わされている、ヘブル人への手紙の考えに取り組んでいた。モシ族は内陸の民族で、錨というものを全然知らなかった。では「錨」という言葉をどのように翻訳すべき

だろうか？　錨という言葉を新しく作り出すべきだろうか？　その場合、モシ族はその意味がわかるだろうか？　錨の絵を見せても、意味が無いだろう。それは外人の使う、おかしな形をしたものとしてしか考えられないだろう。ここで神のメッセージを伝達するに当たって大切なのは、どのような概念なのだろう？　錨は、安定性、保持性、確実性などを意味しているに違いない。そこで、これと同じ考えを表わす言葉を、モシ族の体験の中から選ぶことにした。モシ族は、馬をつなぐのに使う、ある種の杭（くい）をよく知っていた。この杭は、馬がどんなに引いても、はねても、絶対にぐらぐらしないものである。そこで、モシ族の聖書には「私たちのたましいのために、……馬をつなぐ杭の役を果たし」と書いてある。馬をつなぐ杭の絵なら、彼らにこの意味を伝えることができたのである。

五、キリスト教の教えは、抽象的概念を使わずに取り扱うことが不可能である。もし「信じる」、「信仰」「救い」、「聖」、「奉仕」、「献身」、「祈り」というような言葉を使うことができなかったら、どうするだろうか？　これらの言葉は、どれも具体的名詞ではない。視覚方式で教えることはできないのである。

四歳のクライドは、ある日、「叔母ちゃん、死ぬってどういうこと？」と質問した。この叔母は、初め何と言ってよいかわからなかった。人生経験はわずかであるのに、死ぬという言葉をすでに覚えてしまった幼児に、どのようにしたら、このことについての健全な概念を与えることができるのだろう？　クライドはその日、九回も彼女に、「死ぬってどういうこと？」と聞いたのである。彼は死の**事実**でなく、**概念**をつかもうと、最善の努力をしていたのである。

あるものは、絶対に視覚を通して教えることができない。またあるものは、多くの努力と、長い時間をかければ視覚を通してでも教えることができる。

神御自身、御自分についての概念を打ち立てようと、忍耐深く、たゆまず求められた。神の民は神を見たことがなかった。神の住み家を訪ねて、神のことを説明できるような知人もいなかった。人々の罪深い状態は、完全な清さや聖を理解できないようにさせていた。そのような状態の中で、神は人々にどのようにして、御自分の威光、絶対的な正義、罪からの完全な分離などを、知らせることができるのだろう？

しかし神はそのことを、視覚に訴える多くの実例を通して、最善の形で実現されたのである。その中には、彼らの仲保者である祭司を聖別する、こみいった儀式があり、神の栄光と威光を示す、幕屋の中のすばらしく装飾したカーテンなどがあった。また彼らは、幕屋の上にとどまる神の栄光を見た。厚いカーテン、普通の人が至聖所にはいれないこと、至聖所は一年に一度しか開かれないことなどは、神が、人間とその罪深い道から離れている姿を描き出している。水の洗い、いけにえ、アザゼルのやぎ、時折見られる、反逆と不従順に対する迅速な審判などは、みな、神についての知識を人々に与えるための、視覚に訴える提示方法だったのである。

しかし、神の民は、視覚教育からいつも正しい理解を得たのではなかった。神は祝祭日、斎期、儀式などを制定されたのだが、一度ならず「あなた方のこれらの行ないは、私の忌みきらうものである。」と言われた。彼らは具体的な行為のみを取り扱って、その中にある**意味**、真実の概念をつかまなかったのである。神はみことばを、彼らのひたいに結びつけ、入口の柱に書きつけるようにと言われた。人々は文字通り、目に見えるようにそれを行なった。しかし神は悲しみながら、「その心はわたしから遠く離れている。」と言われたのである。

六、宗教的体験の多くは絵に描いたり、実演したりできないということにおいて、宗教的視覚教材は、やはり限定されている。世界というものを理解させようとする教師は、地球儀を使うことができる。植物の分布変化や地形を示すには絵を使うことができる。地図は川の流れや、住居地域の広がりを示す。更に映画を使えば、人々や場所について一層正確な概念を与えることができる。

けれども一人の子供に、祈ることを教えようとしている教師のことを、考えていただきたい。祈っている人の絵を持ってきて見せたら、その生徒は祈り方がわかるだろうか？　書いてある祈りの言葉を見て、読んだら、祈ることを学びとったことになるだろうか？　目を閉じることが祈りになるだろうか？　ひざまずくことは？　手を合わせることは？　ある特別な用語は？　頭をたれることは？　これらのことはみな、祈りに伴うことであり、祈りを助けることである。けれどもこれら一切の中心である、神

との交わりということは、目に見えないものであり、永遠にそうでなければならない。私たちは、さまざまな祈りの仕方を絵によって示すことができるし、多くの人々が祈っている姿を見て、感動することもできる。一人で礼拝をしている人を見て感激することもできるし、また祈りの言い表わし方について熟知することもできる。これはみな、視覚教材を通してなされるのである。これらの経験全部に加えて、自分自身でも実際に祈る時に、祈りとは何であるかが教えられるのである。

しかし、目で見る経験だけでは、絶対に充分でない。事実、祈りの絵は、祈る時の霊の条件というものを描き出すことができないために、祈りについてのゆがんだ概念を与えることさえあるのである。生徒はただ姿勢や、表情しか見ることができない。祈りについての理解は、多くのさまざまな経験を通して与えられるもので、生徒が成長するにつれて、徐々に形成されていくものにほかならない。

とするならば、これは視覚教育における最大の問題である。**生徒がもし具体的な材料しか見ないで、その意味を普遍的に考えないならば、視覚教育は失敗である。**

視覚方式の利点

この方式には問題点と限界があるにもかかわらず、更に多くの利点があるので、私たちはそれを使用するのである。

一、視覚教育を含む場合、学習が迅速に、より良く行なわれる。この事が真実であるということは、すぐれた学習能力がありながら視力を失った人々は、知識の修得に以前より長い時間がかかり、その学んだことも前より不正確であるということによって例証される。視覚が他の感覚と結びついた場合が、特に効果的なのである。

二、視覚教育はただに経験を補うだけでなく、それ自体、新しい経験を与えることができる。ある子供たちは一度も汽車に乗ったことがないかもしれない。けれども汽車のさまざまな体験を写した映画を見ることにより、かなりの事を知るようになる。切符の買い方がわかり、車掌の仕事を知り、汽車の中での人々のさまざまな過ごし方などを知るようになる。

自分の家から百キロと離れない所に行ったことのない人でも、映画を見ることによって、ラテン・アメリカの生活を理解できるようになる。この方法により、遠方の音も持ってくることができるので、視覚と音によって新しい体験をすることになる。

私たちの家庭でも、見るものを選択することが重要であるというのは、この事によるのであって、子供たちが見るものが、実際に彼らの体験の一部分になってしまうからである。

三、この方式は、言葉だけを使用する場合に起こる誤りを防ぐことができる。言語的表現（ある概念を表現する言葉）は以前の体験を通してなされる解釈に依存するものである。言語的表現は実際に精神

的映像を作り出すかもしれないが、それは前に体験したところの映像、あるいは前の幾つかの体験を合わせて作り出した新しい映像でしかない。

「真珠のような歯、星のような目、ばらのようなほお」と口頭で説明された人は、どんな人になるかを、ある漫画家が、かつて描いたことがある。

言葉だけで作り出した映像は正しい場合もあるし、正しくない場合もある。子供たちが時にこっけいな間違いを犯すのも、このような誤った想像によるのである。

同じ文章からでも、二人の人が同じ精神的映像を受けるとは限らない。私たちは、物語を読んでみて、その中の人物や、情景についての画家の考えが、私たちの心の目に映ったものと全く違うことに気付いて、がっかりすることがよくある。私たちは「あゝ、自分はそんな風には全然考えてもみなかった」と叫びたくさえなるのである。

四、幾つかの視覚教材を組み合わせた場合、一方的な視覚教材の使用によって与えた誤った印象を矯正することができる。外国から帰って来た宣教師たちが展示する物の多くは、明らかに「骨董品」の部類のものである。一連のこのような展示の結果、若い人たちは、外国について誤った考えを形成してしまっている。彼らが頭の中で考えるのはエキゾチックな姿であり、工芸品を作り出す能力ということに限定されてしまっている。そして宣教師の働きに対する関心を失ってしまうのである。ある人々は、外

国人は普通、遅れており、文化的に低く、劣っていると感じている。それは、各国の最も悲惨な部分だけが示されているからである。そういう国々の紹介映画で、近代的家屋や交通機関、その他のすぐれた文化水準の証拠を見て驚く人は少なくないのである。

五、視覚教材は共通の概念を与えることができる。これは特に、クラスでの話し合いのために有益である。一諸に映画や写真を見ることによって、クラス員は共通の理解を持つことができる。

六、視覚教育は、他の形態による教育よりも一層持続的である。これは、理解が記憶を向上させることからすれば、自然のことである。

七、視覚教育は、生徒から時間的にも、距離的にも遠く離れている事がらを、現在の体験の中にもたらすことができる。旅行という直接的経験によって、全世界のあらゆる部分のことを熟知するには、一生涯かけても時間が充分ではない。更に、そのような旅行の費用は莫大な額にのぼるだろう。しかし、私たちは皆、視覚教育のおかげで、全世界とその住民を自分の手中に収める、更に適切な言い方をすれば、自分の眼中に入れることができるのである。地図や、写真や、模型などがなければ、私たちの知識はどんなに限定されることであろう。しかし映画によって、比較的短時間のうちに、生徒は、草花が種から開花するまでの姿を見ることが可能である。実際生活では、成長を見守るだけの忍耐や、時間がないかもしれないし、非常にスピードが遅いので、複雑な成長の過程を理解することができない。

聖書の時代の衣服、住居、技術などについての理解は、展示品や、絵、又は模型などによって与えられる。子供たちは、この方法で、過去及び現在の、全世界の人々について、詳しく知ることができる。目を通しての学習の円周は、常に拡大されていくものである。それは環境を拡大する。視覚教育によって形成された概念は、次には広範囲にわたる読書を可能にし、現在の世界を一層豊かに楽しむことを可能にするのである。

八、視覚教材は、注意を引きつける中心を設定する。生徒の側に注意がなければ、ほんとうに教えることは不可能であるという、すべての教育に関する原則がある。視覚方式は、興味の共通の焦点を提供するのである。

九、視覚教材は、言葉によるシンボルよりも、一層面白い。自然な好奇心は、目に見えるものを調べ、探検し、楽しむように、私たちを導くものである。

各視覚教材の比較価値

もちろん、授業を全部、視覚によるものにすることはできない。教師は、できるだけ多くの種類の経験を利用すべきである。しかしながら、視覚教育においては、通常、経験が直接的であればあるほど、教える力が大きいのである。視覚教育では、直接的で目的に富んだ経験、模型や標本、劇、野外観察、

展示品、映画、写真、視覚的シンボル等を用いる。これらは皆、ある種の経験をもたらし、また、**教育的価値を持っている。**一般的に言って、今述べた方法は、最も直接的なものから始めて、最も直接的でないものに向かって配列したのである。

しかしながら、宗教教育における、これらのものの比較価値は、このリストの相対的位置によって決定されるものではない。価値は単に補助教材そのものによるのではなく、教えられる思想の性質によってきめられる。映画は、このリストではうしろの方に置かれている。それは、生徒が単なる傍観者だからである。しかし、聖地について学ぶ場合、映画は模型や展示品よりもすぐれている。けれども生徒がエンジンについて学ぶ場合、同じエンジンの、動いている姿や、各部分の姿を示す映画よりも、実際に動く模型の方が、多くのことを教えるであろう。

種々の視覚教材の組み合わせは、すべての中でも最も効果的である。聖地に関して教える場合、現地への旅行が最善であることは疑う余地がない。しかし、そのような学習経験を持てる者はごく限られている。けれども、縮尺立体模型や、地図、映画、写真などにより、多くの事を学ぶことは可能である。劇を行なう場合、聖地の生活の研究が必要となるし、そこでの生活を再現する努力によって、生徒は実際に聖地に住むこととなしに、それと全く同じことを経験するのである。考古学的発見の品や、現代のパレスチナの生活用品の展示もまた、貢献するところが大きい。

時に、価値は、生徒に、各部分との関係においての全体を理解させるようにする、その方法の能力によってきまるのである。映画は、実際生活の背景の中で、全体との関係の中で各部分を示すことができるので、非常に強力である。映画はまた、不必要な部分を削除し、必要な部分だけを示すという、編集した形で材料を示すことができる。また、全体の情景から不必要な、邪魔になる部分を取り除いて、ほかの方法では見られない部分に集中することができる。地図は、国や島の比較的大きさや、海岸線の不規則さなどを、映画よりもはるかによく示すことができる。

視覚教材の比較的価値は、生徒の成長度にもよる。地図は、その読みとり方を学んだある人々にとっては有益なものであるが、いろいろなしるしの意味を理解できない人々にとっては、何の役にも立たない。戦争によって破壊された地域の人々の苦痛と貧困を示そうとしている写真は、子供たちには「きたない、こわれた家」と言ってきらわれ、彼らを遠ざけるだけであるかもしれない。すでに語ったように、視覚教材は過去の経験によって解釈されるのである。

これらの視覚形態の比較的効力を、祈りの研究において考えてみよう。いつでも、最も生き生きとして、満足すべき方法は直接的経験である。祈りの場合、模型は除外されるが、劇は非常に多くの事を教えるだろう。劇の場合、種々の祈りの形態、聖書の祈りの言葉、突発的祈りの調査、研究が必要である。祈りについてのある事は、他の人が祈っているのを見守ることによって学ぶことができる。事実、

小さな子供たちは祈りについての最初の考えを、しばしばこの方法でつかむのである。映画は祈っている人の姿を描き出すこともできるし、祈りに導く礼拝の空気を作り出すこともできる。普通の写真も、今まで長いこと、礼拝の中心装飾、祈りのしおりなどに用いられてきた。聖地について教える場合、象徴的実物教材は実用的ではないが、祈りの理解を与えるためには、多くの実物教材が用いられてきたのである。

第二章　視覚教材の使用法に関する一般原則

この章では、どの視覚教材についても言える、使い方の原則について語ることにする。ある特定のものにしか適応できない原則については、その視覚教材について語る時に取り上げることにする。

はっきり見えるものであること

「視覚」という言葉は、それがはっきり見えるものであることを意味している。ところが、視覚教材であるはずのものが、実際にはよく見えない場合がしばしばある。この原則を守るために、次の事を記憶しなければならない。

一、展示するものは、全会衆に見える大きさでなければならない。ここで標準の大きさを示すことはできない。なぜなら教室とホールでは違うからである。教室では丁度よい大きさの図も、ホールでは不適当かも知れない。

ある青年が四十五人ほどの人の前で話をし、自分の郷里の町の美しさとすばらしさを示そうとしていた。彼は郷里の商工会議所が出版したパンフレットを用いて、人々の興味を引きつけようとしたがうま

くいかなかった。それには一ページに八つか十の写真がのっていたが、会衆にはどの写真も、詳しいことは何もわからない、ただの灰色の矩形としてしか目に映らなかったからである。

講演者や教師が「これは小さすぎると思いますが……」と言うのを聞くことがよくある。視覚教材はあらかじめためし、一番うしろの人も充分に見えることを確かめておかなければならない。

二、細部まで、はっきりと鮮明に、確実に見えなければならない。図、地図、ポスターなどには、人人の目を引きつける明るい色や黒を使うべきである。広告業者はかねてから、普通の人ははっきりしないデザインや言葉を、立ちどまってゆっくりと調べるようなことはしないものだ、ということに気付いている。会衆は実際にはゆきずりの人々ではないが、彼らの注意を引きつけ、保持しないなら、精神的にゆきずりの人と同じになってしまうことも考えられる。

三、教材は会衆に向けられるもので、半分講師に向けられるものではない。この原則が守られない理由は大抵、教師がその教材を完全に知らず、自分の方に少し向けなければ使えないからである。あるいは、その教材が持ちにくいからである。教材が講師の方に向いている場合、少なくとも会衆の三分の一はよく見ることができない。教材が小さい場合、教師はそれを横から、あるいはうしろから使えるようにしなければならない。もし持ちにくいものなら、三脚とか台や机を用いて、横から説明するようにすればよい。この場合、よく見えるかどうかのテストは、前二列の左右両端にすわっている人に見えるかどうかによってきめられる。

四、教師は視覚教材と会衆の間に立ってはならない。この点、黒板、フランネル・ボード、地図、図などを使用する場合、特に注意すべきである。使用法を充分に知らない教師は、教材と生徒の間に立ちはだかることがよくある。教材と生徒の間に立たないで書くことは不可能かも知れないが、**いつまでもそこに立ちはだからないように**、あるいは学課を進めながら、無思慮にその前を歩いたりしないように注意すべきである。地図や図の上のある部分を指摘する時は、横からすべきである。

五、教材は全員が見える高さに、持つべきである。教師は、会衆を全部見わたすことができるからと言って、教材が全員に見えると考えてはいけない。高さはうしろの席の人に見えるかどうかによってきまる。大きなグループの場合、大体の目安は、教材の下部が前列の人の目の高さにあるということである。

講師は教材を使用している**間中**、高さのことを頭に入れておかなければならない。なぜなら話をしている間に、無意識のうちに下げてしまうことがよくあるからである。大きなグループの場合、約一八センチメートルの高さの演壇（プラットホーム）があれば、講師はそれだけ高くなり、教材を無理な高さに持っている苦痛を取り除くことができる。この原理を応用し、教材を三脚や台にのせたり、壁に掛けることも考えられる。

六、座席はよく見えるように配置すべきである。これは部屋の横幅、邪魔になる柱、あるいは変わった形の部屋などを考えて言っているのである。教材を手に持って使用する場合、横幅の広い部屋でも、全員に見えるように横にしばしばまわして見せれば、障害を乗り越えることができるだろう。グループの大きさにもよるが、真直ぐに並ぶよりも扇型に並んだ方が見やすいだろう。

いやな感じを与えないこと

一、教材は丁寧に作ったものでなければならない。視覚教材は専門家が作ったものでなければ効果がないのではない。しかしながら注意深く作ったもので、指のあとや汚れ、しみなどの無いものでなければならない。

二、色彩感覚のよいものでなければならない。色の強いコントラスト（対照）は注意を引きつけるからよい。ただし、互いに反発するものでなく、調和する色でなくてはならない。

三、配列にバランス（均衡）のとれたものでなければならない。この点について不注意だと、図やフランネル・ボードの効力を失わせ、ポスターの価値や黒板書きの長所を破壊することになる。

市販されている教材は大抵、このことを考慮に入れて、適切な配置場所を図示してある。教師は自分の能力によほどの自信がない限り、その指示に従った方がよいだろう。

四、必要以上の細部描写を含んではならない。余りにも多くのものを含めると、見た目にもおかしなものになる。教師はしばしば、できるだけ多くのものを教えたいという願いにかられるものである。そして何でも含めようとして複雑な教材を作って、かえって全体を不鮮明にしてしまうのである。

モデル（模型）とモッカップ（木型模型）の違いは、モデルが原物を細部まで複製するのに対し、モッカップは特に強調すべき点以外は細部の複製をしていない点である。細部は拡大したり、必要ならその部分だけ再調整して、原物の複製としてでなく、その活動を示すために用いられる。宗教的視覚教材はモデルではなく、このモッカップになぞらえることができる。その目的は特定の部分を「指摘する」ことである。不必要な細部をごたごたとつけている図は、理解しにくいものとなってしまう。

学課と結合していること

一、会衆の受け入れ態勢が整っていなければならない。大抵の視覚教材には、それを理解するための背景が必要である。会衆は、(イ)なぜその教材が示されるのか、(ロ)何をそこに見いだすべきか、を知らなくてはならない。

二、視覚教材の中心点は、それが説明する重要思想と明白な意味関係を持っていなければならない。それはただ漠然とした関係ではいけない。教材の第二義的な、重要でない部分が学課の意義を伝えるの

ではいけない。もしその教材の重要な部分が学課と関係がないならば、別の方法を選ばなくてはならない。

三、会衆は意味を把握する責任を問われなければならない。これは特に教室での視覚教材の使用の場合に言えることである。意味の把握に責任を問わない視覚教育はたちどころに娯楽に転落してしまう。自分の学んだことを報告する必要がないと感じた生徒は、不注意になったり、無関心になったりして、適切な注意を払わないだろう。これは視覚教育のあとに筆記試験をすべきだということではない。むしろ討論や質問によって、生徒の意味の把握を調べるべきである。

意味が自明であること

一、教材は、余計な説明を加えなくても、意味を示すものでなければならない。これは、視覚教材の展示には説明を伴ってはならない、という意味ではない。むしろ、それを適用するために、曲げたり、引きのばしたり、こじつけたりすべきでないということである。

ある教材が選ばれ、真理がその教材に当てはまるように曲げられるということが、時々ある。いかなる環境のもとにおいても、私たちは補助教材から始めるべきではない。しかし、たとい手元にある真理から始めたとしても、意味がすぐに理解できないような、複雑な象徴を含む教材を、用いるべきではない。

主な思想はひとりでに**浮き出て**こなければならない。

二、それは既定の思考形式に従うものでなければならない。演説家たちは、彼らの講演が聴衆の中に既に確立しているある思考の機構、又は形式に一致する場合、聴衆が彼らの言うことをよくのみこむことができるということを学んでいる。

たとえば、赤という色がイエスさまの血と、その反対の罪の両方を表わすということから、子供たちの頭の中に混乱を生じさせている。ある実物教育では、薬品を使って水を赤くし、次に「黒い罪」を取り除くということで、別の薬品で黒くした水の中にそれを注ぎ入れたりする。ところがある人は、赤い水が罪を示す実物教育をしたりするのである。

子供たちは小学校で模型地図のいろいろな色の意味を理解するように訓練される。緑色は普通平地を意味し、茶色は山地を意味する、などである。ところが聖地のある地誌には、同じ色が別の特徴を表わすように用いられている。この違いを記号の説明の欄が説明してはくれるが、深く考えない生徒は記号の説明欄を注意深く調べずに、自分になじみの深い意味で地図を解釈する傾向がある。その場合、緑色がある種の土壌を意味して高さとは無関係であり、その土壌が平地ではなく高地に見つかるので、混乱が特に大きい。

もし視覚教材が既成の概念と異なる形式に従っている場合、教師は生徒がその変更を理解するようにさせなければならない。

教材がよくまとめられていること

一、注意深い立案が必要である。計画の中では、(イ)材料の選択は目的に従ってなされること、(ロ)全部の材料が入手可能であり、手元にあること、(ハ)教材が適切な場所で用いられることを、確かめなければならない。

二、教材は提示する場合に、すぐ手の届く所になくてはならない。教材は、(イ)手元に、(ロ)全部一つ所に、(ハ)使用する順序に従って配列されているべきである。

教師が教材の使用法に熟練していること

一、教師は教材付属の説明書をよく学ぶべきである。教材を準備するに当たり、著者、編集者、画家は明確な目的を持っていたはずである。教師はその目的をよく知らなくてはならない。絶対に「これはなんのためか、よくわからないのですが……」などと言う破目におち入ってはならない。

ある小学下級科では、教師たちが忙しくてできないので、一人の人がいつもフランネル・ボードの材料の準備をしていた。この方法は非常にうまくいっていたが、一つだけ欠点があった。それは材料が、使用される日の学課の数分前まで、教師の手に渡らないということだった。ある教師には、その教材が何を意味しているのかわからないことがあった。そこで時にはある部分をぬかして使ったり、ある時にはわからないまま、ボードにとにかくつけてしまったと告白している。

立案と準備によって、教師は使用する材料の全部を熟知するようになるべきである。

二、教師は視覚教材それぞれの難点と、使用法になれていなければならない。あとの章において、これらの問題や技術を教師たちに知ってもらうことにする。

三、教師は練習をすべきである。練習により、(イ)教師は教材を熟知することができる、(ロ)提示する際の難点がはっきりする、(ハ)材料全部が整えられていることが確かになる、(ニ)提示の際、気楽に行なうことができる。

四、教師は教材をマスターしなければならない。徹底した立案と練習によって、教師は教材とその用法を熟知して、自由に取り扱えるようになるべきである。教師は、教案や他の説明文書に目を向けたきりでなく、会衆を見て、はっきりと話さなくてはならない。

第三章　視覚教材――その使用法、資料、手入れ

視覚教材の使用法

視覚教育の一つの大きな利点は、融通性があるということである。ここにあげるもの以外にも、各教師がそれぞれ、多くの用法を見つけ出すことができる。しかし、一般的に言って、視覚教材は次のような活動を補助することができるだろう。

一、学課の背景を理解させるために用いることができる。映写するものでも、しないものでも、絵（写真）が、見なれない人や場所を理解させるために、長いこと用いられてきた。絵は変わった習慣を明らかにするし、昔の生活を示したりする。「ナアマンの話」の時にらい者の絵を示すなら、この将軍の悲惨な苦しみをリアルなものにするだろう。一枚の地図があれば、イスラエルと隣りのスリヤの戦争により、一少女がどのようにしてスリヤに来たのかを説明するのに役立つし、助けを求めてイスラエルへ行くナアマンの旅行を示すことができるだろう。

二、学課を紹介するのに用いることができる。ある教案は、「ハート人間」や「マッチ棒人間」を用い

る黒板書きを使って、一つの物語を説明し、その日の主な話へ導入するようになっている。黒板は、あるいは、その話の主要人物の名前を紹介するのに用いたり、アウトライン（概略）を緒言として示すために用いたりすることができる。

討論のできる年令のクラスには、問題を提起する、映写教材を準備し、解決は一同が討論を通して引き出すようにさせるとよい。小さな子供の場合、絵が学課の中に導入していく。野外観察は、ある種の討論（話し合い）の絶好のいとぐちとなる。

三、学課の説明や発展に用いることができる。これは、どの教材にとっても、一番普通の用法である。これについては、あとの章で述べる。

四、復習のために用いることができる。旅行には地図を、名前には黒板を、はっきり見分けるためには絵を、その他、劇、寸劇など、復習には、視覚教材を数限りなく使うことができる。

五、歌や暗唱聖句を教えるのに用いることができる。歌やコーラスの言葉は黒板や、大きな紙に書くことができる。コーラスの意味を説明する紙人形をフランネル・ボードにつけて示すこともできる。遊技は視覚教育の一つの型である。時には歌を、幻灯機や、映写機で投影することもできる。

六、礼拝に用いることができる。日曜学校の各科ごとに、又は各クラスごとに、礼拝の中心装飾を用いることがよくある。それは主イエスさまの絵や、開いた聖書や、その他のものをテーブルに置いて、

生徒の礼拝の気持ちを一つに集めるものである。

ある種の礼拝用教材は投影されると効果的である。山や野や小川を映したり、理想的な神中心の家庭や、神のみ手から与えられる他の祝福を描き出したりする。これらと共に、聖句や歌を示すなら、絵を通して礼拝に導かれた会衆は、これに和するようになるだろう。

七、レクリエーションに用いることができる。これは教えるための用法ではない。けれども、宗教的グループは、しばしば親睦活動に使っている。娯楽の中でフィルムをこのように用いる場合の標準は、そのグループの中にできている霊的標準にかなったものでなければならないことと、いかなる意味においても道徳的に低下させるものであってはならないということである。

八、真価を認める能力を培養するのに用いることができる。真価を認めるということは人物や行為、事物に対して価値を与えることである。キリスト教界は、神の言葉や、さまざまな人種の真価、あるいは他の社会的、経済的グループの人々の持っている必要を理解するということの価値を、正しく認める能力を培養することが必要である。神の働き、特に人間のための救いの行為に対して、最高の価値をつけることが必要である。聖書を印刷したり、製本したりしているところを示す映画、聖書の多くの飜訳に関する非常に興味をそそる話の映画、全世界にそれを配布する冒険的な物語の映画などがある。これらの映画は、多くの人々の活動を示し、人類が共通して持っている興味を強調している。種々の展示品

は、さまざまな技術を正しく評価する能力を成長させる。観察することにより、キリストに対する信仰によって変えられた生活の、真の価値を知ることができるようになる。

九、奉仕に対するチャレンジを与えるのに用いることができる。 視覚教育によって、宣教地の必要とか、宣教の機会とかを鋭く理解することができるようになる。このような認識が、愛他精神を呼び起こす。視覚教材は、口頭で言うよりも更に真実に近い、宣教状況を見せることができる。

社会の悪を是正しようとのチャレンジは、映画によって与えることができる。なぜなら、映画は、それを見ている人たちを、今まで全然知らなかった場所や状態に連れていくことになるからである。また、福音を伝えることが、いかに、社会的、霊的生活の両方に変革をもたらすかということを見ることができる。そして、自分もこれに貢献すべきだと刺激される。必要を見るという直接的体験の後に、心を動かされて、自分たちの生涯を、奉仕のためにささげる決意をした人々が、今日まで、多くいるのである。

献身的な人物の生涯を示す寸劇も、若い人々に感動を与え、自分たちの生涯を奉仕にささげるというチャレンジを、受けて立つようにさせることができる。

視覚教材の資料

ここでは個々の資料、拠り所のリストを作るための努力はしない。なぜなら、それは絶えず変化しており、提供物も変化しているからである。そのようなリストは、ほんの数週間で時代遅れのものになってしまう。この本は、ただ教材の一般的資料を指摘しようとしているのである。

教会用品販売所 こういう会社のカタログには次のような、多くの視覚教材がリストになって出ている。実物学課についての本、聖書の絵、大型掛け絵、フランネル・ボード用物語と学課、黒板、時には模型や透視画。

キリスト教雑誌 このような雑誌には、最近の、種々の視覚教材の出所を示す、多くの広告がのっている。これは最も新しい資料であり、新しい教材が市販されるたびに、教師たちに、知らせてくれるので、特に価値がある。広告主たちは、その製品についての質問を歓迎している。

このような雑誌はまた、しばしば、個々の視覚学課や、視覚教材の家庭での製作法に関する記事をのせている。

地方書店 宗教的材料を取り扱う、ほとんどすべてのキリスト教書店も、ある種の視覚教材を取り扱っている。このような店のよい所は、購入する前に、それが実際に求めていたものであるかどうかを手にとって注意深く調べることができる点である。また、普通店頭に置いていない教材でも、お客さんのためには喜んで取り寄せてくれるのが常である。

大都会では、宗教的フィルム専門の店もある。

公共図書館　ほとんどの公共図書館は、貸し出し用の写真を備えている。大きな図書館ではフィルム貸し出し部門があって、幻灯用フィルムや映画用フィルムを貸し出している。このような材料の多くは、彼らの教育的性格によって選ばれたものであるから、教師訓練の際に役立つものである。それは他の人々や国々をほんとうに理解し認めるようにさせるためのものや、児童や青年の成長発達に関するものである場合もある。レクリエーションに好適なフィルムもある。

商社・会社　航空会社、鉄道会社、生産的企業などはよく、旅行やスポーツ、あるいは面白く、楽しい、生産過程などの無料のフィルムを持っている。こういうものは、教会の標準に合致する内容を持っているかどうか、あるいは宣伝はできるだけ少なくしているかどうかを、使用前に注意深く見ておかなければならない。

広告　新しい雑誌の広告の絵は、特に子供たちに使う絵のよい出所である。カレンダーの絵も、大きくてよいものである。そういう絵は将来のために、切り抜いて、主題ごとに（「農村」、「赤ちゃん」「家庭生活」、「お手伝い」など）分けてファイルしておくべきである。

視覚教材選択の基準

視覚教材用器具や用品の選択や購入に当たっては、一つの基準を設定することが大切である。教材は相当額の投資を意味するから、できるだけ注意深く選ばなくてはならない。選択の基準は人により、また教会により、皆違う。ここに、選択の基準を作る場合の参考として、幾つかのことを提案しておきたい。

一、教会の霊的、道徳的標準から離れたものでないこと。映画は、他のどの視覚教材よりも問題を起こすことが多い。あなたの教会の標準から離れることは、反感と混乱を招くだけである。「いつも試写をする」という確固たる規則を守れば、ここでのどんな問題もあらかじめ取り除くことができる。

二、聖書に対して真実なものであること。プロデューサーや画家は、物語の**自分なり**の解釈によって映画や絵を作るのである。フィルムは皆、聖書の記事に忠実なわけではない。あるプロデューサーは自由主義的思想を持ち、ある人は保守的、または根本主義的グループに属している。プロデューサーたちは、時には話をうまくまとめるために、つけ加えるだけでなく、「もっと面白くするため」とか、聖書本文に示されているある教理的思想を信じないからという理由で、物語を**変え**てしまうのである。しかし視覚教育は、そのような勝手なことをしては危険すぎるほど強力なものである。不正確な映像は、どんなに口でそれを否定しようと努力しても、ずっと長く記憶されてしまうのである。

人形芝居に無中になっているあるグループが、人形たちの演じるノアの箱舟のフィルムの試写を見

た。彼らは人形だけを一生懸命に見て、物語が何か所も聖書の話からはずれているだけでなく、聖書の記事と矛盾しているという事実を見のがしてしまった。どのフィルムも写真も、皆、神のみことばの光によって評価されなければならない。私たちは、聖書の時代に事実であったある材料が加えられているものは受け入れる。けれども、その当時、事実であっても、物語の筋や、真理をそこなうものは拒否する。なぜなら、それは聖書の霊感の有効性と矛盾するからである。

三、演出、品質の標準が適当なものであること。私たちは宗教を教える働きにたずさわっているのだから、品質の劣ったものを受け入れる必要はない。特にフィルムの選択に当たって、演出が高い標準のものであることを確かめなければならない。私たちの求めるフィルムは、人間に与えられた人生の最高の道を示すもので、そのような生活を代表すべきものでなければならない。

四、代価が、受け取る価値に相当するものであること。もし教会が、多くのクラスが使用できるように視覚教材のライブラリーを持っているなら、教師が、自分のクラスで使用するために個人で教材を買うよりも、もっと多くの投資をすることが可能と思われる。もし一回しか使わないなら、多額の投資をすることは賢明でない。借りるか、高価でないものを選ぶようにする方がよい。宗教的視覚教材においては、多くの無駄使いがなされている。それは、総合的計画や、統制を行なっていない教会が多いからである。

五、教材の使用法が簡単なものであること。教材は、多くの訓練を受けていない人たちが使うものである。だから教材は、使用法の説明が簡単で使いやすいものでなければならない。それはもともと授業を助けるものであるから、教師の注意と努力を全部奪ってしまうほど複雑なものであってはならない。

六、教室の環境に適応できるものであること。ある教材は、小さな、混雑した教室では使えない。あるものは、大きな講堂に向かないのである。

視覚教材の手入れ

視覚教材の手入れについての合言葉は「**今行なう**」である。**教材は、たまるまで、わきに積んでおく**ものではない。放っておくと、こわれたり、よごれたり、裂けたり、**隅が折れたり**、さらにしばしば、部品が無くなったりする。授業の準備の際に、ファイルされるように整えておけば、後ほど使うためにしまうのも楽である。具体的な手入れと準備については、それぞれの教材の部分で話すことにしよう。

一、各部分を確かめる。教材がフランネル・ボードの学課で使う一連の絵なら、その絵を切り抜く時に、裏に、話の題と番号を書いておくべきである。幾つかの部分からなる実物学課なら、それも同様に確かめなければならない。

二、各部分を一緒に保存する。教材が絵であるなら、大きなマニラ封筒に入れておくことができる。

物語や学課の題をはっきりと封筒の上に書いておくべきである。教材の形が、実物学課のように、不揃いである場合には、内容を記入したラベルを貼った、布袋に入れておいたらよい。

三、後ほど使う時に、すぐ見つけられるようにファイルする。ファイル用カードと大きな箱か引き出しで、簡単なファイルができる。引き出しには、番号順に封筒か布袋を入れておくだけである。ファイルは、主題、聖句、学課や物語の題の三つの部分に分けたらよいだろう。視覚教材が一つずつ作られていくのに合わせて、必要な事がらを書いたカードを各部分にファイルしていくなら、あとで必要なものを見つけるのに楽である。もし封筒や袋を幾つかの場所に分散して保存する場合には、その学課がどこにあるかを、はっきり示しておくべきである。ファイルを使わないなら、多くの貴重な教材が失われてしまうであろう。

第二部　映写されない視覚教材

第四章　フランネル・ボードによる教授

この教育教材は、今では広く普及されている。これは簡単で、融通がきき、経済的で、効果的である。キリスト教教育では、黒板を除いて、他のどの方法よりも、最も多く用いられている。

この教材には、フランネル・グラフとか、フランネル・ボード、ピクチャーグラフ、又はフェルト・ボードなど、幾つもの名前がつけられている。この教材は、けば立った二つの表面は互いにくっつくという原則を利用しているのである。絵の裏側のけば立った面が、少し傾斜した板の上のけば立った背景につくように置かれるのである。

フランネル・ボードは生徒の注意力を引きつける中心となり、更に、いくらかの動きと変化をつけることにより、注意している時間を長くすることができる。動きというのは、フィギュアをつけたり、それを動かしたり、時には背景を変えたりすることに見られるのである。

教育の媒体としてのフランネル・ボードは、やはり教育の一般規則の支配を受ける、他の視覚方式と同じように、ボードの中に魔法があるのではない。それを用いたからといって、生徒の理解が保証されるのではないし、聴衆全部が興味を持つということを約束もしてくれない。

それは準備の代わりにならないし、真理を生き生きと示す能力の代わりにもならない。この方式の価値は、主として教師の技術によってきまるのである。準備なしに、それを効果的に使うことはできない。準備がなければ、この方法も単なる時間つぶしになってしまうだけである。

フランネル・ボードは便利で、効果的で、材料が入手しやすいので、しばしば過度に使用されている。どんな方式でも、絶えず用いながら、他の方法を全く除外して、なお効力を失わないということはあり得ない。この教材が、どの時間にもどの時間にも、いつも最も適切であるということは、考えられないのである。しかしながら、フランネル・ボードはこのような性質を持っているので、しばしば用いられながら、なお興味を保つことができるのである。

フランネル・ボードの話が、時には、日曜学校の時間に用いられ、すぐあとの子供の教会（訳注―おとなの礼拝の時間に別の部屋で行なわれる）でも用いられることがある。そして両方が類似している、すなわち、両方とも聖書の話である、ということが多い。もし続いてこの方式を用いるのなら、少なくとも違った種類の主題のものでなければならない。このようにするには、職員間の調整が必要であるが、それはするだけの価値のある大切なことである。

これは見世物的方法であって、クラスの生徒はただ見るということ以外、何の役割りも果たさない方法である。そこで教師は、その学課を理解し、ほんとうの価値を認識し、吸収、同化するように特別な

努力を払わねばならない。

この方法を用いる際に、通常、次の四つのものが必要とされる。

三脚（イーゼル）、フランネル・ボード本体、背景、背面のけばだったフィギュア。

三脚（イーゼル）

三脚は大低の場合、既製のものが購入されている。けれども自分で作ることもできる。もし三脚を、種々の活動に使われる部屋で用いるのであれば、折りたたんで片づけられるものを購入した方がよいだろう。しかし、部屋が教室にしか使われないならば、もっとがっしりしたものの方が、満足できるだろう。

もし三脚が手にはいらなければ、ほかの支えるもの、たとえば、テーブル（壁ぎわにぴったりつけて使う）とか、時には椅子（いす）でも役に立つ。普通、椅子はあまり好ましくない。なぜなら、高さが低すぎるからで、見る人が一列以上いる場合は、使うべきではない。

あるいは壁に棚を取りつけることも可能である。その場合、フィギュアがずり落ちないように、ボードを少し傾斜させて壁に立てかけることができるように、幅の広い板を使うべきである。棚の前に、細長い木をつけておけば、ボードがすべり落ちるのを防ぐことができる。

フランネル・ボード

形

(1) フランネルでおおった板で、折れるものと、折れないものとある。
(2) レイヨンの綿屑でおおった板で、折れるものと、折れないもの。
(3) 綿屑を防水キャンバスに吹きつけたもので、巻いてケースにしまえるもの。

寸法

標準寸法は、六〇センチ×九〇センチである。市販のフィギュアは大抵、この大きさのものを考えて作られている。もし大きな講堂でボードを用いるのなら、もっと大きな寸法のものが要求される。しかし、その時には、大きなボードのために作られたフィギュアを使わなくてはならない。児童伝道を屋外でするある人々は、少し小さな、ボール紙でできた、フランネル・ボードを使っている。

資料

教会や日曜学校用品を扱っている店で、ボードは売っている。あるボードは一枚であるが、二つ又は三つに折りたためるものもある。布バンドの蝶番(ちょうつがい)を使ったボードは、そこだけ、けば立っていないので、使いにくい点がある。けれどもこれは別のフランネルを背景として、ボードにかぶせることによって、補うことができる。

立派な、満足できるようなフランネル・ボードを自分で作ることも可能である。波形のボール紙(段ボール紙)を使って、臨時のフランネル・ボードを作ることなどは楽にできる。ボール紙を標準の寸法に切って、その上にフランネルを広げ、裏側で、ホッチキス又はピンでとめればよいのである。フランネルはいつでも、張りがあり、なめらかでなければならない。もしフランネルがたるんでいると、つけた絵はすぐに落ちてしまう。ボードは、折り目がないように、大きな箱から切り取ることができれば更によいだろう。使用する時には、三脚にのせるのである。

背景

フランネル・ボードに使われる背景は、普通三種類ある。

(イ) ボードに取りつけた、恒久的カバーで、黒又は無地のフランネル。
(ロ) 背景の絵を描いた、一枚のフランネル。
(ハ) 次々とはり合わせて、背景を作りあげていく、さまざまな形をしたフランネルかフェルト。

一枚でできている背景は最も一般的なもので、教師は大抵、何枚か持っていて、その中から選んで使うようである。

フィギュアのために特別な背景を持っていることは、必ずしも必要ではないし、また、得策でもない。未熟な教師が絶えず背景を変えてばかりいると、かえってわずらわしくなるし、背景がもともとほかの話のために作ったものであれば、細部の描写が不適当であるかもしれない。無地のフランネルでおおったボードの上にフィギュアをつけていっても、子供たちはすぐれた想像力を持っているので、充分に効果的な話をすることができる。正しい方法でフィギュアをつけることの方が、背景のあるなしよりも大切であることがしばしばである。

既製の背景を手に入れることができるが、品質も値段もさまざまである。しかし大抵は、一般的なもので、いろいろな話に使用でき、しかも細部が不適当なものにならないようになっている。**簡単な背景が最もよいのである。**背景のフランネルを選ぶ時には、いろいろな話に合うものを選ぶべきである。一つの背景が一つの話にしか使えないのでは、大抵の教師には手の出せない金額になってしまうだろう。日曜学校では、こういう背景を幾つか、視覚教材ライブラリーに保存してあると思われる。

一枚の無地のフランネルと、フランネルで作った、つけたり取ったりできる、木、草、石、道、家などで、融通のきく背景を作ることもできる。これは紙で作ってはいけない。なぜなら、話のフィギュア

がつかないからである。室内の情景も、この方法で変えることができる。取り除くことのできる梁(はり)や藁(わら)、紫色や赤のカーテン、王座や窓などがあれば、同じ背景を使って馬小屋を、宮殿に変えることもできるのである。

色のついた背景も人を引きつけるが、色が余りきついと、注意が背景にばかり向けられるようになる。話に使われる絵は、背景の色の濃さによってずい分違うから、背景の色がフィギュアよりも濃くならないようにすることが大切である。

第三の種類の背景は、店頭で手に入れることはできない。これにはいろいろな色の細長いフランネルが必要である。水色の布は空のために使うが、ボードの約半分（三〇センチ）をおおうだけの幅がいる。そうすれば地平線の深さをいろいろに変えることができる。ねずみ色又は薄紫色の布は、遠くの山の形に切って使う。濃い青は水に、いろいろな形の幾つかの緑の布は前景に使うのである。

フランネル・ボードのフィギュア

フランネル・ボードのために準備できる材料は際限なくある。そこで問題になるのは入手性でなく、選択、適合性、品質などにある。フィギュアは、聖書物語、実例、教理的教え、海外宣教、聖句暗唱、その他いろいろな形の教えに使われてきた。

購入の際に注意する点

一、いつも使う**ボードの寸法に合うもの**を買うこと。この寸法はまた、部屋の大きさや、クラスの人数に関係している。

二、色に注意。大抵のフィギュアはすでに色がついている。相当の技術と充分な時間があるのでなければ、色つきのものが最高である。しかし色について、比較されたい。なぜなら、他のものに比べてずっと美しい色のものがあるからである。

三、裏に注意。あるものには綿屑がついており、あるものには、スウェードのけば立ちがついている。けれどもあるものは、購入者が裏をつけなくてはならない。

四、値段に注意。予算の限られている教師は、大抵の話は、復習に用いるのでない限り、同じグループにはしばらく使えないことを知るべきである。他のクラスと交換して使う計画がなければ、ある種の市販の物語は、結果と比べて非常に高いものになってしまう。

五、使用する**年令**に注意。実際にはこの方法が使えない年令層はない。けれども選ばれた教材の性質が、生徒の成長度に適切なものでなければならない。

六、すでに手元にあるものに注意。フランネル・ボードの材料を自分で集めている場合、教会のライブラリーですでに手にはいるものや、日曜学校の教案についてくるものと重複しないように、かえってそこにないものを集めるようにすべきである。多くの出版社が、毎日曜の学課のために、フランネル・ボードの絵を出している。こういう場合、教師は、聖書物語でないフィギュアを買うようにした方がよいだろう。変化に富み、面白い、海外宣教、教理、道徳などに関する、よい学課があるようである。

フィギュアの準備

一、注意深く切りぬくこと。子供たちは絵が正しく切りぬかれていることを期待する。そして不注意な仕事には、想像以上に、我慢できないのである。ある生徒は「ぼくの先生の切り方はほんとうにだらしがないんだから」と言ったことがある。時には、切り取り線に従わずに、大まかに切ったり、細かな部分には注意せずに切りぬいた絵が使われている。絵が注意深く準備されていない場合、子供たちはあまりよく見なくなる。なぜなら、大抵の子供がじょうずに切りぬくことができるからである。

大きなフィギュアを必要としていたある教師は、大きな掛け絵（ピクチャー・ロール）から切りぬいた。掛け絵は色がきれいで、はっきりしており、大勢のグループに見せるのには特によい。ところが掛け絵から、フィギュアのセットを作るには制限がある。それは一つの物語のために適切な絵を充分に確保しようとすれば、多くの絵を切らなくてはならないということである。しばしばフィギュアは、他の

フィギュアと部分的に重なっているので、ある部分はじょうずに書き込み、色を塗らなくてはならない。更にフィギュアは、幾つかの絵から取った場合、大きさが不揃いになる。それは絵がもともと一つの物語の部分として揃えて描かれたものでないからである。芸術的才能と偉大な忍耐を持ち、更に多くの掛け絵を手に入れることのできる人々が、このような良いセットを幾つも作りあげているが、普通の教師はこのような計画を実行すべきではない。

二、正しく見わけること。絵を準備する際に大切なことは、切りぬく時に、絵の番号を裏に書きつけることである。大抵の話し方の指導書は、絵を番号で呼ぶので、それぞれの絵をすぐに、間違いなく見分けられるようにしておくべきである。もしあとで使うものならば、その物語の題も絵に書いておくべきである。これは、教師が一つの学課に、多くの物語からフィギュアを集めてきて使う場合、特に必要である。

三、裏側にけば立った面があること。あるフィギュアはスウェードの裏をつけて市販されている。これは忙しい教師にとって大変便利であり、有難いことである。しかし裏がついていなくても、そのように準備することは簡単である。フランネルの切れ端をフィギュアの裏にのりづけすればよいのである。裏側全部につける必要はない。フランネルの小片は、フィギュアをボードにつけた時に、しっかりついて、しかも頭や手がカールしてボードから離れないように、つけなければならない。フィギュアが細長

い場合、真中に一つ貼るよりも、小さなフランネルを頭と足に一つずつ貼る方がよい。もし両手を広げている場合には、小さなフランネルを腕の先につけたらよい。つける場合、ゴムのりを使うとよい。にかわや普通ののりは、しわを作ることがあるからである。

もしフィギュアが教会学校の教案と一緒に来て、一度しか使わないものならば、フランネルをつけなくてもよい。その代わりにワイヤー・ブラッシ（訳注―紙ヤスリでもよい）を使って、絵の裏を軽くこするのである。そうすれば、フランネルの背景に短時間ならついている。この場合、何か所かをこすっておくべきである。それは、この種の絵は、綿屑や、フランネルの裏をつけたものほど、よくつかないからである。もし絵をいつまでも使う考えであるなら、この方法は使うべきでない。

宣教師たちはフランネル・ボードの絵を必要としているから、そして余暇がほとんど無いから、もし教師たちが一度使ったフランネル・ボードで、フランネルを裏に貼り（こすっただけでなく）、注意深く番号をつけたものを、その物語の説明指導書と一緒に送ってあげれば、大きな祝福となるだろう。正しくフィギュアを使うには、説明書が特に大切である。ごちゃごちゃにつめこんだフィギュアを一箱もらっても、それだけでは、何の役にも立たないのである。

四、あとで使うなら、大きな封筒を準備してフィギュアを入れ、他の物語のフィギュアとまじったり、なくなったりしないようにすべきである。

フランネル・ボードで教える技術

背景の置き方

授業を始める前に、三脚とボードが所定の位置に置かれていなければならない。教師がボードを組み立てている間、子供たちはじっとすわっているものではない。物語用の特別な背景は、物語が始まるまでしまっておくべきである。そうしないと、物語の前に行なう活動から生徒の注意をそらすことになってしまう。背景が幾つかの布でできているなら、教師はそれをつけていく間中、クラスの注意をひきつけていくように熟練しなくてはならない。一枚の背景は物語の初めに、簡単につけることができる。

どんな時にも、子供たちにボードの組み立て方や、背景の変化などに、何か不思議なものが働いているように、感じさせてはいけない。そういう風に思わせると、生徒の注意力は教えられる思想にではなく、ボード自体に向けられてしまうのである。この方法を初めて見る子供たちは、あらかじめ注意していても、ボード自体に興味を持ってしまうのである。

ある一団の子供たちが、フランネル・ボードの学課を見守っていた。ある子供たちは、特に興味を持っているわけではなかったが、前の方にいた小さな子供は一心不乱に見ていた。この興味を示している態度に教師は励まされて、「ほかの子がつかまなくても、この子だけはしっかり話をつかんでくれるだ

ろう」と思った。ところが話の三分の二頃まで来た時、あの少年は好奇心をおさえきれずに、「どうやって、それ、くっつけるの」と言ってしまった。その場合、すぐにフィギュアを裏返して、裏についているフランネルを示し、フランネルとフランネルがつくということを、簡単に説明するよりほか、なかった。それ以外の事をしたら、彼は授業の終わりまで、どうしてくっつくのだろうと一生懸命考え続けたに違いない。

フィギュアの使い方

一、話をしながら、次に使うフィギュアを捜しまわるというようなことがないように、授業の始まる前に、フィギュアを使う順序に並べておくべきである。もう一度使うフィギュアがあるならば、ボードから取りはずした時に、別に置いておくべきである。そうすれば、またすぐに使うことができる。

二、フィギュアをボードにつけながら、ほかのフィギュアを全部片手に持って、ふりまわすようなことをしてはいけない。子供たちはボードの上のものと同じように、ふりまわしている方のものにも注意するだろう。使わないフィギュアは近くのテーブルか台の上に置いておくべきである。そうすれば、すぐに手が届くし、話をしている時に、そっちに注意が向けられることもなくなるだろう。

三、たまたま、話をしている際中に、フィギュアがボードから落ちることがある。その時は静かにひ

ろって、元の場所へもう一度つけるのである。もし教師があわてると、子供たちも、何か大変な事が起こったように感じてしまう。けれども簡単にひろいあげるなら、子供たちも、それは大した事でないと受け入れていくのである。時には、背景もろとも、フィギュアが全部、落ちてしまうことがある。フィギュアを元に戻したり、あるいは変えたりする際に、手品を使っているかのように見せかけてはならない。

四、物語のためにできているフィギュアは普通、その物語の主な活動だけを強調しているのだから、フィギュアを全部の動きに合わせていちいち動かそうとしてはいけない。そうすることは、ただ混乱を招くだけである。フィギュアがすわっている状態であるのに、話ではひざまずいている場合、製作者はひざまずかせなかったのだから、すわっているフィギュアをさかさにしたり、横に向けたり、そのほかの形に向けて、ひざまずいた形にしてはいけない。フィギュアはそのままで、物語の中にある祈りについて話せばよいのである。フィギュアが主な行為を示しているなら、子供たちは細かい部分を自分たちの想像力の中で、うまくこなしてしまうのである。

遠近法の重要性

画家はフィギュアを書いた時、完成した絵を頭の中で描いていて、適当な配置を考えながら、フィ

ギュアを描いたのである。ところが教師は、ただ無造作に「ボードの上に」つけることがある。

遠近を出す配置をするには、遠くにあると思われるフィギュアを、近くにあると思われるものよりも、ボードの上で少し上方に置けばよい。フィギュアが近くのものか、遠くのものかを見分けるのはむずかしくない。なぜなら、遠くのものは、近くのものよりも小さいからである。大抵のフィギュアのセットには、置く場所を示すために、スケッチがついているようである。

フィギュアはまた、前面に置かれたフィギュアに従い、また、目の自然の動きに従って、ボードの上に置くべきである。たとえば、放蕩むすこの父親が、遠くから、むすこの近づいてくるのを見ている場合、むすこのフィギュアは父親のよりも遠い所に、しかも父親の見ている方向に置かれることになる。これは言わなくてもよいほど初歩的なことであるが、経験によると、教師たちは不注意にフィギュアを置き、この方式の効力を破壊してしまうことが多いのである。色のついた背景を用いない場合には、正しい遠近法を使うために、地平線を想像して設定すべきである。

ある教師たちは、幾つかの話のフィギュアをまぜて、一つの話をいっそう完全なものにしようとする。もしこういうことをしたいなら、特に注意をしなくてはならない。なぜならフィギュアは皆、同じ大きさに縮小されていないからである。

ある教案では、ギデオンの話から三つの学課ができていた。ある教師は、ミデアン人の夢をぬすみ聞

きする話のフィギュアが少ないと感じ、他の二つの学課のフィギュアを幾つか使おうと思った。ミデアン人のテントが遠くに見えるという話から、テントのフィギュアを持ってきたが、それはかなり小さいものだった。ところがこの学課では、テントは前景に使われ、ギデオンがその外で聞き耳を立てているのである。そのように用いた結果、大きなギデオンが、自分よりもはるかに小さなテントの外で、地面に横たわっている形になってしまった。ギデオンは、テントの三倍位大きくなっているので、それは滑稽に見えた。ただ「テント」と「ギデオン」があればよいというものではないのである。

練　習

練習は、フランネル・ボードを使って効果的な話をする技術の中でも、根本的な部分である。たとい長年この方法を使ってきた教師であっても、それぞれの話について熟知することが大切である。一番よい置き方、すなわち、生徒の注意を引きつけながら、ボードの上にフィギュアをうまくつけていくことは、練習によってのみ得られるのである。練習によって、どの部分は話し、どの部分は話さないでおくかということがわかる。また、話をするのに必要な時間がどの位であるかも見当がつき、全時間の適切な計画を立てることができる。教師たちは今までにも、しばしば、練習の必要なことを注意されてきたが、練習の代わりになるようなよい方法は全くないのである。

フランネル・ボードの用法

フランネル・ボードは、もともと年少のクラスのための方法であると考えられたことがある。けれどもそれは、年長のグループにも同じように使用できるものである。その場合もちろん、使用される教材や、提示様式には違いがあるのである。

物　語

これはフランネル・ボードを用いる、最も一般的な方法である。物語の主な動作をする人物たちが、物語の展開と共に、順序正しく用いられていく。そして聖書物語が、話の材料の大部分を占めるのである。

ところが教師は、フランネル・ボードで海外宣教や、道徳の話をすることを見過ごしてしまうと、変化をもたせる機会を失ってしまうことになる。特に道徳の話は有意義である。というのは、そこで取り扱われる例話は現代のものであり、子供たちにとって理解しやすいものだからである。

海外宣教の話を選ぶ場合、回心したその土地の人の話にだけ限定しないで、自分の生涯をささげて海外宣教に奉仕した人々の話を、見つけるように努力すべきである。外国人の回心の話は、奉仕への情熱

を少しもかき立てないことがしばしばある。それは幼ない子供たちは、他の民族のだれかと自分とを結びつけて考えることができないからである。けれども今日、自分自身を全く神の奉仕にささげた宣教師の生涯を知ることによって、献身に導かれた人々が、大勢宣教地において働いているのである。

フランネル・ボードでする、物語の復習は、いつも子供たちにとっては興味深いものである。頼めば子供たちは、フィギュアを手にとって、話をもう一度してくれる。その間、ほかの子供たちは注意してよく聞き、話し手が「うまくやる」かどうか、しっかりと見守っているのである。

歌やコーラス

あるコーラスはこのような形の教え方に、全く適している。「主の御用をする二つの手」のような歌は、ボードで説明できる。そういう絵は、歌を教えながら、ボードにつけたり、あとで歌う時につけたりすることができる。これはほとんど全部、小さな子供たちに向かって使用されるものである。

地図を示すためにフランネル・ボードを使う最善の方法は、フランネルの裏打ちをした地図をボードにただつけることではない。もっと面白く、変わった地図を作ることができるのである。ボード全体の大きさの薄水色のフランネルを使い、その上に、陸地の形に切った茶や緑のフランネルをつける。水の部分は切りぬいて、その穴から下の「水」のフランネルが顔を出すようにしておく。このフランネルの

地図は、紙やフランネルの木や、町を示す絵、旅行の順路を示すひもや、戦場を示す旗などをつけるのに、すぐれた背景となる。このような地図の利点は、使うたびに作り直す必要がなく、必要な時にいつでもボードの上にすぐに、つけることができるということである。町や川を黒のクレヨンでフランネルに書いて、永続的にその位置を示すこともできる。けれども、フランネルで裏打ちした紙に町の名を書いてはりつけるようにし、地図自体は変化に富む形でとっておく方がもっとよい。ひも（毛糸）を使って川を示すこともできる。幾つかのフランネルの地図を手元に持っているようにするとよい。その場合でも、青い背景は一つあれば、全部の役に立つ。これは小学上級科での、フランネル・ボードのすぐれた使い方である。

概要や、重要な事がらの説明

中高生や成人には、細長い紙に言葉を書いて、フランネルで裏打ちして、ボードにはりつけて、学課の概要や、重要な事がらの説明にすることができる。これは授業中に全部書くよりも、ずっと速くできる方法である。

これはコーラスを教えるのとよく似た方法で行なわれる。どの聖句もみな、この方法に適しているわけではない。「わたしは……心のうちにみ言葉をたくわえました」とか、「あなたのみ言葉はわが足のともしび、わが道の光です」というような聖句に使うことができる。

フランネル・ボードは暗唱聖句の復習にも使うことができる。絵は、聖句を繰り返している間、繰り返してつけることができるし、子供たちが覚えていくにつれ、ひとつずつ取りはずしていくこともできる。また、聖句を細長い紙にはっきりと書き、幾つかの部分に切っておき、ひとつずつ取り除いて、生徒が完全に聖句を暗記できるようにしてあげることも可能である。この方法の目的は、どの部分もボードにつけずに、子供たちが聖句を言えるようにさせるということにある。

実物学課

実物を教室に持ってくるかわりに、そのものの絵をフランネル・ボードにつけることができる。

他の用法

フランネル・ボードは、ただ宣教師の話や、外国人の回心の話にだけ限定されるものではない。それは生徒に、他の民族や、違った生活様式などを知らせるために使うこともできる。ほかの国々の家庭

や、社会活動を理解させるのに役立つのである。

プログラム（計画表）

今までに挙げた方法はみな、全体的なプログラムにも適応することができる。夏期聖書学校の日程表には、進み具合を示すために、イエスさまあるいはパウロの旅行を示す、フランネルの地図が使われるかもしれない。あるいは出エジプト記のあとをたどって、旅行の順路を赤のひもで示し、学課の進み方に合わせてフランネルで裏打ちした、メラの泉や、エリムのオアシス、シナイ山での律法の授与などのフィギュアをつけていくこともできる。

フランネル・ボードは計画表の中で、小さな子供たちに、暗唱聖句を思い出させるのに使うこともできる。それぞれの聖句の中心思想を示す、紙のフィギュアを使うのである。たとえば、開いた聖書の絵は、「わたしは……心のうちにみ言葉をたくわえました」という聖句を思い出させ、羊の絵は「見よ、神の小羊」を思い出させ、魚の絵は「あなたがたを、人間をとる漁師にしてあげよう」を思い出させる」かもしれない。絵が口の代わりに、忘れていたものをさそい出す役をするのである。

生徒自身も、フランネル・ボードの上に、話や歌をつけて示すことも可能である。

第五章　黒板による教授

黒板は今日まで長い間、授業に使われているので、その価値が時々見過ごされている。私たちは何か「新式」で、「面白いもの」を求めたがる。けれども、どんな学校でも黒板なしに活動することは考えられない。それと同様に、教会学校教育においても、黒板は必要なものであると見なければならない。

黒板は今では必ずしも黒と限らないので、しばしば「チョークボード」という言葉が使われているが、ここでは引き続き、よく知られている「黒板」という言葉を使うことにする。

ある教師たちは、黒板を使うには、絵の才能がなくてはならない、という誤った考えを持っており、そのために黒板を使わないようにしている。ところが絵の才能は、黒板を使って教えるのに、さして重要な技術ではない。黒板を使うのは、私たちが絵を書けるからではなく、考えを明白にし、しっかり記憶させることができるからである。

黒板は幾つかの点で価値がある。

(イ)　それは生徒の**注意を集中する中心**となる。

(ロ)　それは**絶えず、簡単に変更できる**視覚方式である。

(ハ) 経済的である。

ある教師は、生徒の注意力が集中せずに、脇へそれていった時に、白墨を一本手にとっただけで、もう一度注意力を確保することができたと言っている。

黒板の使用法

黒板の使用法は、それを使う教師の考えに応じて、幾らでもある。

概略（アウトライン）

概略は簡潔でなければならない。概略の目的は、中心思想を整理することである。だから長い文章よりも、二言、三言で示す方が目的にかなう。簡潔な概略は、貴重な授業時間を有効に使うことができる。そればかりでなく、書き写すのに時間がかかるのでは、生徒の興味を保つことができなくなる。その思想がつかみやすいものであれば、特にそうなる。教師は黒板に書きながら、話をし続ける方法を身につけなければならない。そして、黒板の概略を用い、その学課の鍵の言葉を強調し、記憶させるようにすべきである。

概略はあらかじめ準備しておくこともできるし、また討論の中から生まれてくることもある。黒板の

利点の一つは、一度黒板に書いたものを、討論の中で変更することができるということである。たとえば、主題を展開させるための一つの思想が提案されるとする。それは適当と思われるので、一同に見えるように黒板に書き記す。ところがしばらくするとだれかが、もっとよい言葉でそのことを表現するとか、討論にもっとよく合致した考えに、それを変えることになるかもしれない。そこで、最初に書かれた考えを消して、新しい考えをその代わりに書く、あるいは両方を並べて書いて比較する、ということができる。だから、黒板の働きを説明するのに、**流動性教材**という言葉を使うことができるかもしれない。

名前や、鍵の言葉

聖書に出てくる名前は大抵、生徒にはなじみのないもので、覚えにくいものである。人間は耳よりも目の方がよく覚えるので、名前を紹介する際に教師がそれを黒板に書くならば、覚えるのが楽になる。それはなじみのない、聖書の名前に限る必要はない。どんな名前でも、書けば助かるのである。

ところが、名前を書くにはまず、一つの条件がある。それは、教師が正しく書けるということである。けれども名前を書かねばならないという予測が立てられる時に、教師自身それを覚えるようにし、また、正しく発音するために努力するようになるかとも思われる。ある教師は確信がないので、はっき

りと発音しないかもしれない。生徒は、はっきりと耳で聞くことができなければ、それを覚えるのに、二重の困難を感じるわけである。だから黒板に書くということは、特別な価値をもっているのである。

黒板を用いて鍵の言葉を示す場合も、これと同様である。

スケッチ（略画）

ある教案には「マッチ棒人間」（訳注—胴や手足をマッチ棒のように直線で示すもの）や「ハート人間」（訳注—顔をハート型にしてそれに手足をつけたもの）の黒板書きが示されている。こういう略画は簡単だから、ほとんどだれでも、まねをして書くことができる。教師が教えながら、これを書いていくことができなければ、授業の始まる前に書いておいてもよい。けれども、時には、学課を教えながら書いていく方がずっと効果的なのである。教師に恐れが生じるのは多分、自分は画家でないと思いながら、ある程度、完全な絵を書きたいと考えるからに違いない。絵はいつでも注意深く書かなければならない。けれども正確さは絶対条件ではない。漫画家や風刺画家の作品をよく見ると、そういう絵は実物の模写ではなく、そのものの特徴になっている、ある部分を強調したものであることに気付くであろう。彼らは**一つの考えを伝え**ようとしているのであって、これこそ、教会学校の教師全員が行なおうとしていることでもある。

「ハート人間」は大抵、教案に出ているから、それをそのまま複製すればよいのである。色チョークを使うと興味を増大し、理解力を増すことができる。小さな子供は、こういう略画では、二人の人物を混同することがあるかもしれない。けれども一人を赤のチョークで書き、もう一人を青のチョークで書くようにしたり、あるいは衣服に色チョークを使うようにすれば、楽に区別ができるようになる。こういう人形は色で塗りつぶすのでなく、ただ形だけを描くのである。

「マッチ棒人間」の絵は、教師の頭から生まれてこなければならない場合が多い。そこで教師は、それを書くための原則を頭に入れておかなければならない。

㈠、だ円形の頭をまず書き、それに体の線を書く。これは背骨を示すのであって、必要に応じて曲げることもできる。

㈡、腕と脚をつける。ひざは腰と足の中間に示し、ひじは肩と手の中間で折り曲げる。

㈢、手と足（訳注—靴をはく部分）の長さは、頭（あごから脳天まで）の長さにする。必ず首の部分を残して、腕をつけるようにすべきである。

㈣、足はひざの曲げ具合に応じて、正しい方向に向けるようにする。体が動いている時、たとえば前に歩いてくる時には、一つの足をもう一つの足より上に、そして少しうしろに書くようにする。

地図

黒板に書いた地図は、普通の掛け地図よりも、更に効果的な教材である。黒板の地図は、討論に関係のない細かい部分を省略できるのと、物語の進展に伴って地図を書くことにより、ある意味での行動を描いていくことができるので、効果的である。既製の地図は、何回も書き込んだりすれば使えなくなってしまう。けれども黒板には、いつでも、いくらでも、しるしを書き入れていくことが可能である。

書き方がわからないとか、正確さに欠けるからというので、すらすらと自由に（フリー・ハンドで）書いた地図を使いたがらない教師がいるかもしれない。輪郭だけの地図を書くのは、むずかしいことではない。地図の章（訳注—第六章）に出ている二つの地図の書き方を覚えるならば、どの教師も、聖書（パウロの旅行を除く）を教えるのに必要な地図をマスターしたことになる。

それでもなお、地図を書きたがらず、しかも黒板を用いたいという教師のためには、特殊な地図用黒板が役に立つだろう。反射幻灯機（訳注—本の中の絵などを壁面に映し出す機械　第十章参照）で地図を黒板に投影して輪郭をなぞり、更に白絵の具で輪郭をはっきりと書くのである。（訳注—白絵の具でなく、普通のチョークを使えば、普通の黒板でもできる）このような地図用黒板は何回でも繰り返して使うことができるし、大した時間をかけずに地図を書くことができる。黒板の両面が使えるならば、両面に地図を書いておくことも可能である。

黒板の地図を使用する場合、順路を線や矢印で示すことができる。征服、敵の敗走、旅行、人々の遠

近、更には神への信仰まで、このような地図には書き入れて示すことができる。

その国の大体の輪郭を書かなくても、黒板は効果的に地図を示すことができる。たとえばパウロの第一次旅行を教える場合、町の名前と旅行の順路を示しただけの簡単な地図でも、場所と、活動をある程度示すのに役立つ。その場合、確かに生徒は、地中海の海岸線については何もつかめないかもしれない。けれども、パウロの大体の道順については、生き生きした印象を受けることができるのである。ただ口先で、アンテオケ、クプロ、イコニオム、ルステラ、デルベなどと言うよりも、略図のような簡単な地図でも、使った方が、はるかに具体的になるのである。

ドリル（練習）

黒板は聖句暗唱のドリルに使うことができる。この例を二つあげよう。

㈠　暗唱聖句を完全な形で黒板に書く。その句を完全に覚える段階で、中心になる言葉を一つずつ、消して言わせるようにし、最後には全部消しても、言えるようにするのである。一語ずつでなく、一句ずつ消してもよいだろう。

㈡　暗唱聖句を黒板に書く。その場合、強調すべき部分を、種々の色チョークで書いておく。

聖書の話の復習のために、「はしご登り」のようなゲームによるドリルを黒板ですることもできる。

どの生徒も黒板に、自分のはしごを持っている。そしてそれには幾つもの段が書いてある。復習問題が出されて、最初に答えられた生徒は一段上がるようにさせる。この目的は、だれが一番先に、上まで上がるかを見るという点にある。そのほかのゲームによるドリルは、聖書ドリルの本に出ている。

黒板書きによる話（チョーク・トーク）

種々の色チョークを使って、美しい絵を黒板に書きながら話をしていくのには、特別な技術が必要とされる。しかし、これについて書かれた多くの書物が、細かな部分まで説明をしてくれるだろう。

黒板を使って教える技術

一、黒板はよく見える場所に置かなければならない。それは聴衆の正面ということであって、横ではない。それは、どの列の生徒も楽に見られる高さになければならないが、首が疲れるほどの高さではいけない。

二、黒板に書いたものは、見やすくなければならない。それが字であれば、だれもが読めるように、濃く、はっきりと書かなければならない。続け字や、くずし字ではなく、楷書（かいしょ）で書いた方がよい。見やすいということは、それを読む生徒の年令とも関係してくる。小学校では、ほとんど行書体を習

わない。生徒は印刷の活字のような楷書体しか読めない。もし教師がきちんと書かずに続け字で書くなら、その年令の生徒には、黒板は役に立たないことになる。

三、ごちゃごちゃと書かないこと。今、現在行なわれている討論と関係のないものは消すべきである。記憶を引き出すようなことは黒板に書いておくべきであるが、不必要な細かなものは取り除いてしまう方がよい。

四、秩序正しく書くべきである。人間の頭脳は上から下へ、左から右へと見るように訓練されている。もしきちんと順を追って書いていくのでなければ、矢印を書いて、ある点を指摘しようとしても、あまり役に立たない。黒板にななめに書いたりしてはいけない。

五、黒板は、教師が楽に使え、なお、書いたものの正面に立つことのないような位置に、置かれなければならない。

六、色チョークや傍線を、強調をするために使うことができる。

七、黒板書き（チョーク・トーク）のように、書くこと自体が授業の一部分になっているのでなければ、複雑な絵や、長い概略などは、時間前に書いておくべきである。

八、チョークの種類に注意すること。あるチョークは粉ばかり出し、特に、黒板にチョーク受けがついていない場合、床や教師の衣服に落ちてくる。けれども今は、「ダストレス」というチョークがあ

る（訳注—市販のほとんどはこれである）。これは普通のチョークのように太い線を書くことはできないが、普通の教室で書くのには充分であるし、よごし方も少ない。ダストレス・チョークは、黒板消しをよごすことも少ない。

普通のものを書くには、白と黄色のチョークが使われる。ある人々は、黄色は目のためによいと考えている。黄色も白と同じくらい見やすい。どちらも普通のもの、ダストレスのもの、と区別して購入することができる。

九、黒板はきれいにしておかなくてはならない。新しい学課が始まる前に、それ以前に書いたものは消しておかなければならない。授業の始まる前の、明るい、きれいな黒板は、その授業の効果を大いにあげるだろう。

十、手の届く所に黒板消しを置いておくこと。

黒板の購入

黒板にはいろいろな寸法といろいろな材質、いろいろな値段のものがあり、学校用具専門店、文房具店、デパートなどで購入することができる。伝統的な黒のものもあれば、新しい、緑や茶色のものもある。スレート加工した布や、塗料をぬった木製のもの、あるいはスレート製のものなどがある。けれど

もスレート製のものは教会ではほとんど使われていない。

黒板は全部、購入する前に、書いたものがよく読めるか、ためしてみるべきである。時には青みがかった緑や、薄青緑のものがあるが、これは遠くからは見にくいものである。ある黒板は光って見にくい。

教師は自分で黒板を作ることも可能である。黒板用のペンキは、ほとんど、どのペンキ屋にでも売っている。もし器具のための予算が限られているなら、フランネル・ボードと黒板を一緒に作ったらよい。片面にフランネルを貼り、もう一面に黒板用ペンキを塗るのである。この兼用ボードは三脚にのせて使うのである。

黒板が必要であるが手にはいらないという危急の場合には、大きな包袋紙や、新聞紙でも臨時の代用品として使うことができる（訳注—模造紙などが最適）。油のある色鉛筆か、黒いクレヨンなどを用いて書く。これは消すことができないから、何枚かを重ねて画鋲（がびょう）で壁にとめ、使ったら順に一枚ずつ、取り除いていけばよい。

第六章　地図や図表による教授

地図は、古くからある視覚教材の仲間の一つである。けれども、あまり広く使われていないようである。私たちは、地図はただ場所を示す方法としか考えていないので、その教育的価値の多くが失われてしまっている。

私たちは土地の地勢、民族の接近状況、旅行の順路、国の大きさなどを知ることによって出てくる、地図の持っている他の価値を考えてみるべきである。私たちはこのことについて、充分に時間をかけて調査してみよう。というのも実は、地図があまりにもないがしろにされているからである。

地図は、信仰を教えることができる。イスラエル民族の出エジプトの地図は、モーセが約束の地に向かって直接、内陸の道をとることができたことを示している。それはシナイ山回りの道よりもずっと真直ぐだったし、普通、商人や軍隊が通っている道であった。地図は更に、彼らが雲の柱、火の柱に従ってとった道は、陸路ではなく、海に向かっていたことを示す。

このような事を知る時に、何もかもが逆に動いている最中にも、モーセが神の確実な指導性を全く信じきっていたということを知り、救いを見いだすのである。全く信仰による以外、このような大群衆と

共に逃げていく人が、その地域の地理を無視するということはあり得ない。地図を知らない人は、モーセはこの旅行ではほかにとるべき道が無かった、紅海を渡ることは避けられなかったのだと考えてきたのである。私たちに選択権があり、しかも実現性の少ない方の道を神の導きのもとに選んでいくところに、信仰が最も顕著に表われるのである。

地図は、不従順の範囲を指摘し、従順に戻ることについて教えることもできる。ヨナがヨッパから船出したということは、彼が派遣された場所と正反対の方向に行くことである、ということがわかれば、彼の不従順が一層明らかになる。ニネベはずっと東の方にある。ヨッパから出帆することは、西の方へ行くことになる。当時のいかなる状態においても、彼は船でニネベに到達することはできなかった。これは完全な不従順だった。

この話を教えていたある教師が、魚がヨナを岸に吐き出した時、ニネベの近くに吐き出したのであるが、これは神がいかにヨナにあわれみ深かったかを示すものであると言ったことがある。けれどもこれは、魚がジブラルタル海峡を通り、アフリカの南端を回り、アフリカの東岸のインド洋をさか上り、ペルシャ湾を通り、ティグリス川を上ったのでない限り、地理的に不可能である。旧約地理の知識を持てば、ヨナは、魚が吐き出した所（たといそれがどこであっても）でふりだしに戻り、やり直しを始め、従順にニネベまでの長い旅行をしていったことがわかるのである。

地図は牧師の心を示すことができる。パウロの旅行のあとをたどってみる時に、彼の行った所がわかるだけでなく、更に、新しい回心者たちが彼の伝えた信仰のうちに確立するように、という彼の気持ちが示されるのである。彼がピシデヤのアンテオケからイコニオム、ルステラ、そして最終的にはデルベまで行った時、彼は自分の家、すなわち、シリヤのアンテオケに戻る途上にあったということが地図によって示される。ところがその最も近い道を歩み続けないで、彼はデルベから戻り、彼を排斥した町々を通って、来た道を戻り、再びルステラ、イコニオム、アンテオケへ来たのである。

地図はまた、神の選民の家としての、パレスチナの位置が重要であることを示している。アラビアの砂漠が東にあるため、エジプトとペルシャ、バビロン、メディヤ、その他東の国との間の隊商たちは、約束の地を横切っていた。同様に、小アジヤからエジプトへの陸上の旅行路も、パレスチナを通らねばならなかった。それは神の民が、神の知識を全世界に広げるための戦略的位置にあったのである。ただそれも、彼らが自分たちに与えられた機会と責任に気がつけばの話である。

聖書の歴史には、地図の知識なしに、完全につかむことのできない事が多くある。ヨルダン川東部の台地は、ヨルダン川西部の山脈よりも高いということを知る時に、モーセがその台地よりも高くなっている、ネボ山の頂上に登って、この地を西まで見わたすことができたということを理解することができるのである。ユダヤ人を殺せというハマンの出した勅令と、それの実行との間に、どうしてあんなに時

間的空白があったのだろう？　アハシュエロス時代のペルシャ帝国の地図は、この国がエジプトの地域から東はインダス川までを支配していたことを示している。この勅令をこのように多くの地方に伝えるには相当の時間がかかるのである。

場所を示すために地図を用いる場合にも、そこで行なわれたそれぞれの事件を含めて示すことになるが、地図はその場所をさし示すだけでなく、更に多くのことを理解させることができるのである。

授業では、生徒それぞれに、聖書のうしろにある地図を使わせるよりも、クラスの正面に一つの地図をおいて使う方が効果的である。それぞれの地図は、正面の大きな地図と一緒に使うことも可能である。聖書についている地図は、それぞれの地図製作者によって、境界線が違っていたり、強調点が違っているので、一致点が見つからないと生徒は混乱してしまうことになる。

授業で地図を用いる場合、いつでも、他の方法と結びつけて使用すべきであって、それ自体が目的になってはならない。

地図はきれいで明瞭でなければならない

地図にはずい分いろいろなものがある。あるものは個人用にできていて、グループ用ではない。教室で使うものは、輪郭がはっきりしているもので、色を使って区別がはっきり見分けられるものでなけれ

ばならない。

どの聖書学課にでも使えるように、一つの地図にあらゆる細かな部分を書き込むよりも、同じ地域の地図を幾つも持っている方がよい。たとえば、イスラエルとユダ両王国を示すパレスチナの地図は、イエスさまの旅行を教えるのに使うべきではない。境界線、都市、政治的区分などが違うからである。士師の時代のイスラエルについては、それ専用の地図を使って教えるのが一番よい。

地図は地図として理解しなければならない

生徒の年令と経験

前に述べたように、小学校の下級生は、地図の読み方を習っていない。四年生の勉強も主として、彼らの地域のことに限定されている。地図は非常に象徴的であるから、この読み方を**学びとる**ことが必要である。**地図は絵ではない**。地図に出てくるものは皆象徴であるから、生徒は全体的に、また細部にわたって読みとる方法を身につけるべきである。

地図の寸法

地図はいろいろな縮尺に書かれていることが、一目瞭然である。教師は、本のページのように全部同

じ大きさの地図を一揃い持っているかもしれない。その一つはパレスチナの地図で、北はヘルモン山から、南は死海の少し南まで、約三〇〇キロの範囲を示しているかもしれない。同じ大きさのもう一つのページには、一つの町の地図がのっているかもしれないし、あるいは全世界の地図が書いてあるかもしれない。教師は、生徒がこれらの違いを理解していることを、確かめなければならない。大きな地図の隅に違った縮尺で入れられている部分地図を使う時には、特に注意をしなくてはならない。

欄外の縮尺スケール（訳注―大抵は記号の説明と一緒に出ている、寸法の例）は、距離を知るのに役に立つ。距離を早く割り出すもう一つの簡単な方法は、経度と緯度の線を読むことである。赤道上で、経度あるいは緯度の一度は約一〇〇キロである。この距離は緯度の線の場合、等しく保たれて記入されているが、経度の線は両極に近くなるにつれ、幅が狭くなっている。しかしながら、教室で聖書の地図の距離を調べる時には、この地域は緯度、経度ともに一度が約一〇〇キロの地域である、と見なして構わない。示されている度数を数え（分が示されている場合には、分と混同しないように注意）それを百倍すれば、距離が出てくるのである。

境界線ではなく、地図の囲いが、問題を起こす時がある。生徒には、この地域の周囲に「垣根（かきね）」が四角に張りめぐらされているのではなく、地図の製作者がこの地図に入れる範囲を、自分で勝手にきめて書いたのだ、ということをわからせなければならない。だから旧約のある地図は東の方に延びて、カスピ海の少し東まで含んでいるのに、別の地図製作者は、東の限界をカスピ海までとして、カスピ海の東半分を除外しているのである。パレスチナの地図もシナイ半島を含んでいたり、ネゲブで終わったりしているのである。

観点

最近の多くの地図は、立体的に見えるようにできている。あるものは空中から見たようにできているが、あるものは展望台から見たようにできている。ある時、一人の教師が、大きさがつり合わないと言って、一つの地図を使用することを拒否した。それは死海がとても大きく、「地図の他の部分と比べてつり合いがとれない」のだった。その教師は、この地図が遠近法によってできていることに、気がつかなかったのだ。だから見ている人に近いと思われる土地は大きく、見ている人から遠くになるにつれ、その地域は小さくなっている。これは展望台から「見渡すように」なっているので、かの教師もその観点がわかった時に、価値のある地図であることがはっきりしたのである。

「空中」から見たような地図は、地勢を理解させる上で、特にすぐれている。昔からのありふれた地図では、とうていわからないようなことを、この種の地図はほんの数分間で理解させることができるのである。

地図の製作

自分で地図を作る方法を知っておくことは大切である。手元にある地図には、必要以上に細かな事が沢山のっているかもしれないし、自分が考えている事を強調していないかもしれないし、あるいは小さすぎたり、はっきりしていないかもしれない。また、手元に地図が全然ないこともしばしばである。

投影による拡大

反射幻灯機の利用は地図製作の早くて簡単な方法である。この方法によれば、本や雑誌の中の小さな地図を適当な大きさに拡大することができる。もし地図がそのままで、満足のいくものであったり、いつまでも保存しておくものでないなら、映写するだけで充分である。けれども保存用の地図を作るには、自分の好む大きさの紙を壁にはりつけるのである。地図を幻灯機で、紙に合うように拡大して投影し、輪郭を軽くなぞっておく。あとで紙を取りはずして、地名、川、輪郭などをはっきりと書き入れるのである。ポスター・カラーを使うとよいだろう。

碁盤目による拡大

この方法は第一の方法よりも遅いが、正確な地図を作ることができる。もとになる地図の上に、一定の間隔で軽く碁盤目に線を引く。縦線の上に左から順に番号をつけ、横線には上から順にイロハの記号をつけておく。大きな紙に、同じように碁盤目を書く。この場合、線の間隔を広げなくてはならない。もとの地図より大きくする場合、たとえば、原本には一センチの碁盤目を書き、紙には二センチの碁盤目を書くようにするのである。この原則は、どんな比率にもあてはめることができる。この碁盤目の中に、原本と同じように書き入れていくことによって、地図はできあがっていくのである。

どちらの方法で作る場合にも、鉛筆の線を消すのは、インキが完全にかわいてからにしなくてはならない。紙にしみをつけてしまった場合には、しみを消そうとしないで、修正用の白絵の具を塗ってかくすようにすべきである。

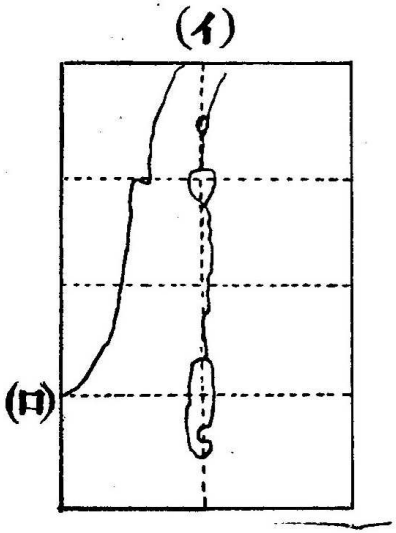
地図を自由に書く方法

この方法はいつも黒板で使われる方法である。教師たちは、地図を自由に（フリー・ハンドで）書くという考えに、最初恐怖を感じるが、これは簡単であり、非常に効果的なのである。この目的は完全な地図を作ることにあるのでなく、授業の基盤として地図を示すという点にある。そういう理由から、正確さは重要でない。海岸線のカーブを全部複写したりしないのである。けれどもまた、これは「相当程度

の複写」でなければならない。

もし教師がパレスチナと旧約聖書世界の二つの地図の書き方をものにすれば、聖書を教える場合に（パウロの旅行を除いて）必要な、どの地図も自由に書けることになる。パウロの旅行地図は、非常に複雑なので、大抵の教師には、すらすらと自由に書くことは無理である。

簡単な分割方式を使えば、前述の二つの地図の書き方を覚えることができる。次の説明は練習のための説明である。教室では、教師は目分量で、適切な配分をするようにすべきである。



パレスチナの地図

(一)、縦、横が三対二ぐらいの矩形を書くことから始める。

(二)、横に三本の点線を書き、北から南へ四等分する。それから縦に半分に割る。

(三)、地中海沿岸の海岸線を書き入れる。地図の上部、中心線から少し西寄りの点から始める。カルメル山の海への突出部が上から四分の一の線上にあり、海岸線は下から四分の一の線のところで終わっていることに注意。

(四)、ガリラヤ湖をカルメル山の東、中心線の上に書き入れる。ガリラヤ湖の形は、ある夏期聖書学校の子供によれば「ひっくり返った西洋なし」ということである。

(五)、メロム湖（フーレ湖）を書く。これはガリラヤ湖より少し北にある、小さな湖である。

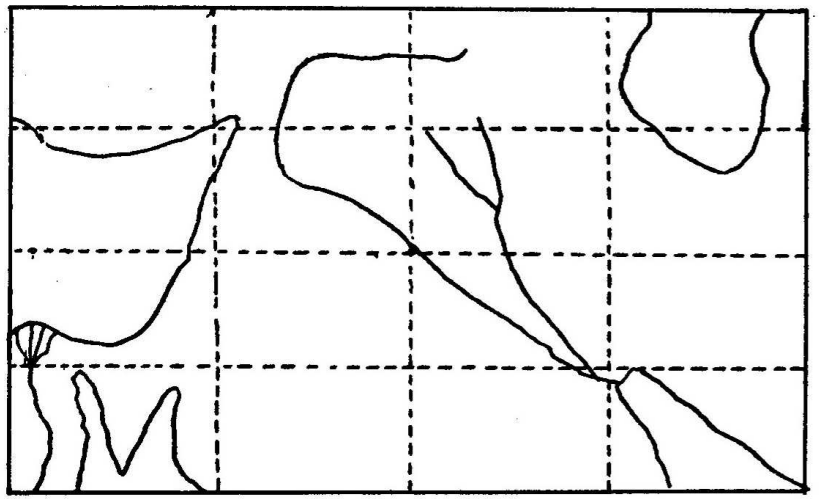
(六)、死海を書く。大体において、死海の南北の中心は、下から四分の一の線の上にある。この湖は不規則な形をしているが、普通はその一番広いところで、ガリラヤ湖と同じ幅であるとされている。長さは幅の約四・五倍である。

(七)、ヨルダン川は、この三つの湖を全部つなぐのである。ヘルモン山から流れ出て、メロム湖にはいり、ガリラヤ湖に進み、死海で終わる。

この基本的な地図は、カナン征服、士師の時代、イスラエルとユダ王国、族長時代の大部分、更にキリストの生涯を教えるのに使うことができる。

旧約聖書世界の地図

最初一目見ただけで、これは、すらすらと自由に書くなどとは、とんでもない地図だと思うかもしれない。けれどもそうではない。夏期聖書学校に出席した小学生も、じょうずに作ることができたのである。



(一)、基本になる矩形は大体、南北三に対し、東西五の割合のものにすべきである。この矩形のつり合いがとれていなければ、地図全体がゆがんだものになってしまうだろう。

(二)、点線で、地図を縦、横ともに四等分する。

(三)、カスピ海は大体において、右上の部分に当てはまる。

(四)、この地図に出てくるペルシャ湾の一部は、右下の部分に当てはまる。

(五)、地中海は、左側の、真中の二つの部分のほとんどを占領する。

(六)、紅海は左下の部分に当てはまり、この部分の東側の半分を占める。

(七)、ユーフラテス川は、地図の北の真中から始まり、西の方、地中海へ向けて流れ、それから地図の中心部を下降してペルシャ湾にはいる。ユーフラテス川を書いてしまえば東にティグリス川を書くのはむずかしくない。ヨルダン

溪谷(けいこく)は紅海の東側の腕のすぐ北にあり、ナイル川は紅海の西にある。

この地図はほんの二、三回の練習で覚えることができるもので、族長や出エジプト、虜囚やバビロン、アッスリヤ、ペルシャ帝国などの話を教えるのに役立つであろう。

地図の使用における変化

動かせる記号の使用

地図を掲示板に貼れば、特別な記号をその上に画鋲でとめていくことができる。都市の名前を小さな紙に書き、画鋲、あるいは頭に色のついたとめ針でとめれば、町の場所を示すことができる。小さな町や、やしの木、石でできた井戸などをつけると、地図は一層現実的になる。（これは手で作った地図よりも市販の地図に適していると思われる）。あるいはもし、その学課が、人々の移動を示すものであるなら、紙の人形を使い、話の進展に合わせて動き回らせることができる。

フランネルボードの地図

（第四章　フランネル・ボードの章を参照）

工作における地図の使用法

子供たちは紙の上に地図を書くことはあまり好まないが、立体（レリーフ）地図を作ることは好むようである。工作用の粘土の代わりに、小麦粉二に塩一の割合で混ぜたものを、使うことができる。水を少しずつ入れて、こねながら、粘土のようにやわらかくなるようにする。土台にはボール紙か、薄い板を使うとよい。地図は二〇センチ×三〇センチぐらいのかなり小さいものがよい。なぜなら、大きな地図にはそれだけ「粘土」を多く使うし、重くて扱いにくくなるからである。もしクラス全体が共同製作として一つの地図を作るのであれば、大きくすることもできる。「粘土」が水を含みすぎていると、ボール紙の土台が水分を吸って、曲がるようになる。

まずボール紙の土台に地図の輪郭を書く。水の部分にはクレヨンか絵の具で色をつける。それから陸地の部分に粘土をつけて、指先で、山や谷や台地などを作るようにさせる。

このような地図に色をつける方法は二つある。㈠粘土をかわかし（二、三日はかかる）、絵の具で色をつける。㈡粘土を土台につける前に、色チョークをけずって、しめっている粘土にまぜて、練ることによって、美しい色ができる。色が全体にゆきわたるまで、粘土を手の中で練ることが大切である。いろいろな色がほしければ、粘土を適当な量に分けて、それぞれに違った色を入れて作るとよい。この第二の方法の利点は、粘土がかわくのを待つ必要がなく、地図が直ちに完成する点である。更に、色が平均している点もそうである。このような色つけの方法は、子供にやりやすいように思える。

海外宣教を教えるための地図の使用法

地図を用いて、宣教師の根拠地を示すことが可能である。地図はまた、宣教地のさまざまな違い、たとえばアンデス山脈での飛行機の利用、ジャングル地帯での住居の形などを示すことができる。

また、宣教活動の分布を説明するのに、用いることもできる。たとえば、ある教師は、世界には宣教活動がほとんどされていない、三つの広大な地域があることに気がついた。それは中央アジヤ、南アメリカ中央、アフリカ北中央である。この教師は、これらの地域がないがしろにされている、ということについてのメッセージを準備している最中に、突然、これらの地域は、ほとんど人口のない、砂漠か、ジャングル地帯であることに気がついたのである。地理的に宣教師を配分することは非常に不公平である。けれども人口に応じて配分することは、公平なことであると思われる。

ある地域では、宣教献金を自動車ではなく、ろばを買うために使った方がよいのであるが、その理由を、子供たちに理解させるためにも、地図は役に立つのである。

図　表

教会における授業で用いられる図表は、大抵、講師によって考え出された、時間や思想の関係を表わ

すものである。それは、人類の救いに対する神の御計画の啓示の解明とか、世の終わりの時代における一連の事件についての、講師の見解というような、一連の事件を示すものであるかもしれない。

主題がたとい何であれ、授業における図表の正しい使用法にも、規則が幾つかあるのである。

一、図表は、混同しやすい細かなものをたくみにまとめたものではいけない。ある図表は助けにならず、かえって困惑させるものとなる。それは、内容の整理の仕方がわかりにくいからであったり、細かなものがびっしりとつまっていて、中心思想が少しも目立たないからである。図表はすっきりしていなくてはならない。

二、図表は聴衆に合った寸法のものでなければならない。

三、図表を使用する者は、生徒に語るように注意しなくてはならない。図表の片側に立ち、大きな図表であれば、教師用のむちを使って各部分を指摘すべきである。

四、図表を聖書研究会のように、夜使う場合には、適切な照明をすべきである。影があったり、反射して光るのでは、効力を失ってしまう。

五、字は聴衆が読めるように、充分な大きさのものでなければならない。

第七章　実物学課による教授

教会学校における実物教育は、公立学校における実物教育と全く異なっている。公立学校では、教師は多くの実物を用いるが、教師はいつでも、実物そのものに関心を持っているのである。実物は、討論中の思考のサンプルなのである。子猫を示した場合、彼らの目的は子猫を理解することである。植物もそれ自体を代表するもので、植物を学んでいる者たちに提示されるのである。

教会学校での教育では、**実物は第二の思考を象徴化する**ものである。実物は霊的学課を伝達するために用いられるもので、霊的学課と、示されている実物との間には、実質的関係がないのである。それはただ例として説明するだけである。

教会教育においても、実物学課は広く用いられているが、これは視覚方式の中でも最もむずかしいものである。宗教教育においては象徴的教育を完全に避ける方法がないのである。なぜなら抽象的思考の本来の概念を形成しなくてはならないからである。けれども象徴的教育にたずさわる教師は皆、実物のもつ本質的問題と価値を、注意深く、はかりにかけてみなくてはならない。

それは純粋に象徴であるから、目に見える実物との関係において提示された思考は、教えられている

霊的真理に**転換**されなければならない。聴・観衆は実物の特徴あるいは品質を理解し、抽象的概念とそれを関係づけ、その抽象的概念をよりよく理解するようにならなくてはならない。目に見える実物は抽象的思考と同一ではない。そこで教師は特に、両者の類似性を実際に表示し、しかも実物の可視的性質よりも、新しい概念を強力に植えつけることにたくみでなくてはならない。これはやさしいことではない。生徒が実物による授業から、どれだけのものを引き出したかということを測定するのは、最もむずかしいことである。

しかしながら、ここでキリスト教の教師が見のがしてならない、一つの利点がある。それは、聖霊御自身が、人類が霊的真理を理解するようにと切に願っており、私たちがたとい失敗しても、彼御自身が人間の知覚力を強めて、理解へと導いて下さるということである。

象徴を使用することの問題点

神の救いの御計画についての概念は、どのようにして形成されるのだろうか？ 例をもって説明しよう。贖罪(しょくざい)についての最もよく知られている象徴は、イエスさまが神の小羊であるというものだろう。教師は小羊のフィギュアを教室に持って来て、キリストのこの働きを説明する。そして旧約時代には小羊を犠牲として用いたことから説明を始めるだろう。ところが犠牲という概念そのものが、子供たちには

無関係なことなのである。犠牲をささげる儀式に参加した子供は一人もいないし、そのような式を見た子供さえ、一人もいないのである。犠牲の概念は、観察によっても徐々にしかでき上がらないものである。子供にとって犠牲とは、ただ、何か自分の好きなものをやめるということかもしれない。

イスラエルの子供たちは、ものごころがついた時から犠牲を体験していた。けれども彼らは両親に、その意味を尋ねたのである。血の犠牲をささげる習慣をもっている異教部族の子供たちは、私たちの国やヨーロッパの子供たちよりもよく、血の身代わりという原則を理解できるに違いない。身代わりの犠牲ということについて、キリスト教化された国（訳注-日本はキリスト教化されていないが、一緒に考えることができよう）の子供が知っている事は皆、うわさや象徴から得たものなのである。そこで、小羊についての実物学課を打ち立てる、最初の前提そのものが、子供たちが、この教えに長期間ふれていない限り、危うげな理解でしかないということになる。

更に、イエスさまはどのように小羊に似ているのだろうか？ 形や大きさでないことは確かである。彼の生活用式や行動、その他、子供たちの目に見えるものでもない。イエスさまは、はるか過ぎ去った時代における小羊の**用法**において、小羊のような方だったのである。小羊は犠牲という思考を象徴し、犠牲は神との関係を象徴しているのである。これは象徴の象徴である。

この学課には、ただ一つの類似性しかない。すなわち、彼は罪の犠牲としての私たちの身代わりであ

るということである。子供たちが小羊を見る時、この概念を得ることができるだろうか？　実物を通して、身代わりという思考をつかむことができるだろうか？　犠牲という思考がメッセージを伝達するだろうか？　この小羊という象徴が自分の罪と関係があることに、生徒は気がつくだろうか？

これは、イエスさまは神の小羊であるという例話は使えないという意味ではない。イエスさまは、犠牲の任務において理解されなくてはならないのである。しかしながら、このような教えは、プラスチックでできた小羊のおもちゃが、あらゆる意味を充分に伝達できないのと同じように、軽々と口先で、無造作に、簡単にできるものではない。思考を配布するだけでなく、配布された思考が、生徒に**意味あるもの**となったかどうかを、注意深く見定めていくのも、教師の仕事なのである。

教師が注意をしているにもかかわらず、間違った意味が学びとられることも、しばしばある。七歳になるカールが、小学校で学んだ、人間は動物であるという考えについて、母親と話し合っていた。彼は自分の知恵を誇らしげにこう言った。「でも僕の日曜学校の先生は、僕たちは神さまの羊ですって言ったもの。」日曜学校の教師によって、どんな思考が伝達されたのだろうか？　羊飼いが羊を見守るように、神さまが私たちを愛をもって見守り、導き、必要を満たして下さるという考えだろうか？　ところがそうではなく、むしろ、私たちは動物であるという考えだったのである。

ある聖書大学の学生が、子供の時に、黒板にハート型の人間が書かれるので、非常に悩んだという話

をしてくれた。彼女に伝達されたのは、神さまは彼女をこのようなものとして見ておられるという思考だった。この象徴は彼女に問題となったのである。彼女は神さまに、自分はほかの女の子たちと同じような小さな女の子で、あんなハート型をしていないということを、どうしたら知らせることができるかと、考え悩んだのである。けれども神さまに伝える方法は見つからなかったというのである。

聖書は象徴で満ちている。東洋の人々は日常生活の中で象徴を用い、それになれているのである。私たちもそれを使う必要がある。けれども、むやみに、不注意に使わないように気をつけなくてはならない。**大切なことは、生徒が真理を理解し、それを自分の生活に結びつけていくことである。**

カナダのある公立学校で、アグネスは混乱してしまった。それは日曜学校の教師が、いつも黒いハート型の紙を使って罪深い心を示し、いつも「私たちの心（ハート）は黒いのです」と言っていたからである。学校の人体の勉強で、教師は、みんなの心臓（ハート）は、どんな人間のでも、黒い色はしていないと教えた。アグネスが日曜学校の教師が言ったことを言うと、そんな教師はばかだとけなされてしまったのである。一体だれの話を信じたらよいのだろう？　アグネスは自分の教師を両方共信じたかった。けれども、どちらかが間違っているはずだった。彼女は、強力なキリスト教教育の背景を持っていたので、ついに日曜学校の教師が言ったと**思われる**ことを信じようと決心した。そして彼女はそれからも数年間、人間の心臓は文字通り、黒いと思い続けたのである。（訳注―英語では心も心臓も共にハートで

区別できない。日本語では問題にはならない。）

あるキリスト教のグループの中には、必要なことはメッセージを与えることで、与えたあとは責任がないという考えが強力である。こういう態度は、「いや、少なくとも私たちは、彼らに真理を伝えたのだから、彼らも、自分たちは聞かなかったなどとは言えないだろう」という言葉で表現される。こうして教師は、聴衆の魂については責任がないという信仰に御満悦で、自分の道を歩み去ってしまうのである。このような考え方は、もしそれが真実であるなら、確かにキリスト教の働き人や教師は多くの責任から解放されるであろう。しかしながら私たちは、**生徒が理解して聞くまで**、開放されることはないのである。

ある宣教師がインドの婦人たちに、何時間もかけて、注意深く、キリストの受肉について説明をした。あとでこの宣教師は、熱心に聞いていた聴衆に、本当に理解したかどうかを確かめるために、質問をしてみた。「イエスさまとはだれですか」と宣教師は質問をした。「ラム」という自信に満ちた答えが返ってきた。どうだろう！　ラムというのは、ある神が受肉したものと思われている、インドの神の一人だったのである。

話しただけで私たちは満足してよいだろうか？　私たちはキリストを受け入れることを強制したり、キリストのために生きるように強要したり、することはできない。けれども私たちは、真理をできるだけはっきりとするように努力しなくてはならない。**もし象徴がメッセージを伝達しないなら、他の教授方式を採用すべきである。**子供たちが幼なければ幼ないほど、象徴的教育はつかむことができない。私たちは「目に見えるもの」はいつでも教えるのに効果的であると思っていたので、過去においては、この方式を主として子供たちに使ってきた。けれども、象徴的授業は小さな子供向きではないのである。

実物でなく、授業に専念すること

雑誌や書物の中に出ている実物学課には、一つの実物を選び、それから関連性のないキリスト教的応用を引き出していることが多いようである。たとえば、柱時計が使われる。教師は時計を持ちながら、次のように言う。

「まず、この時計は、ぐるぐる回る忙しい手が二本あるので、キリスト者のようです。私たちもこの時計のように、キリストのために私たちの手を忙しくさせなくてはなりません。それから、この時計は、はっきりした顔をしているので、キリスト者のようです。私たちの顔も隠し立てのない、はっきりしたものでなければなりません。そうして、私たちがキリストを代表しているということが、だれにでもわかるようにならなくてはなりません。第三に、時計は、正確に時間を示すために、油を充分さしておかなければなりません。油は聖霊を意味します。私たちの生活を助ける聖霊を持たないなら、私たち

は神さまのために立派な生活ができなくなります。」

ある実物学課はこれ以上に進展して、その実物とキリスト者の体験との比較を六つも八つも、あるいは十も見つけるのである。

私たちが実物をこのような方法で使うとしたら、どうなるのだろう？　私たちは教える事よりも、**実物自体に専念することになる**。私たちは真理から真理へと進まず、たえず時計に戻ってくるのである。霊的属性を持たない実物にのみ係わりを持っているなら、真理を継続させる方法はなくなる。そこにはばらばらな思考のごった煮があるだけで、そこにある統一的要素は時計一つである。時計を使う教師には、時計について教える考えはない。けれども時計が、とにかく主役になってしまうのである。そして人間の頭脳にとっても、ばらばらの、数多くの、無関係な思考を思い出すことは、容易なことではないのである。

イエスさまの用いた実物学課を考えてみよう。イエスさまは必ずしも、いつも御自分の手元に実物を持っていたのではなかった。けれども、しばしば、人々が頭の中で描き出せるように、実物について語ったのである。

彼は天の御国という、非常に抽象的な思考、そして聴衆になじみのない思考について語られた。聴衆が見たことのない、そして見ることのできないものの概念、彼らが全然理解できないものを、彼はどのようにして与えることができたのだろうか？　彼は、人々の経験の中にあるものと、それを比較させなくてはならなかったのである。それ以外に方法はなかった。けれども彼らの経験の中には、一つで、この思考を正確に示すことのできるものがなかった。天の御国にそっくりだというものは、一つもなかったのである。彼はどうしたのだろう？　彼は一連の実物を選び、それぞれから、天の御国に似ている特徴を一つ選び出したのである。彼は一つの実物に繰り返して戻らずに、天の御国という考えに、繰り返し繰り返し戻ったのである。

「天の御国は……地引き網のようなものです。」それはどうして、地引き網のようなのだろう？　それはあらゆる種類のものを集めるからである。もしこの実物学課が現代的様式に従っていたら、彼は次のように言われたかもしれない。

「第一に、この網はあらゆる種類のものを集めます。第二に、この網は堅く結ばれた網でできています。私たちも魂を得るには、一つになって立ち上がらなければなりません。第三に、この網はたえず、洗って修理をしなくてはなりません。清く保つ方法は、キリストの清める血と、赦しを求めて罪を告白することです。第四に、網にはいろいろな寸法があります。ある人は他の人に比べて、多くの魂を導くことができます。」という具合である。

けれどもイエスさまは、天の御国は地引き網のようなものだ、と言うだけでやめられなかった。なぜ

なら、御国が網のようであるというのは、御国のほんの一面だけだからである。人々はまだ、天の御国についての正確な概念をつかんでいないのである。

そこで御国は畑に隠された宝のようだと言うのである。どうしてそれは隠された宝のようなのだろう？ それはただ、それを望む人は、持ち物を全部売り払ってもそれを得るようにするという、一面においてである。それは真珠を捜している商人のようである。粉の中に入れたパン種のようである。良い種と毒麦のようである。からし種のようである。

これらは皆、人々の経験の中にあった実物や思考である。けれども、どの場合にも、実物は教えられている真理とただ一つの類似点を持っているだけだった。この方法は、一つの実物を目的の中心に持ってくるよりも、はるかにむずかしい方法である。けれどもキリスト教教育の時間は短いのであるから、効果のない教授法で時間の浪費をすることは、とうてい許されないのである。

イエスさまのたとえ話との関連において、この原則に気がつかなかったために、聖書解釈に多くの混乱が生じてきた。そして、イエスさまが物語の要点を用いて、御自分の考えを強調されたのに、私たちは物語のどの言葉にも、霊的意味があるように考えてしまったのである。

いつも多くの実物を使う必要はない。けれども一つの実物を選んだなら、一つの思考、あるいは少なくとも、それと関連した思考だけを、そこから展開させるべきである。

私たちはメッセージでなく、実物から始めようとするので、困難に直面する。一つの実物を見つける。私たちはすわって、それについて考え、子供たちがするのと全く同じことをする。私たちは実物を見る。どのような霊的真理を私たちはその中に見るのだろうか？ その実物がこの真理を意味しようが、あの真理を意味しようが、大した違いはない。けれども私たちは「よい実物」から始めるべきではないのだ。**真理から始めるべきである**。そして神があなたに、教えさせようとしている事を説明する実物を捜すべきである。実物から始める教師は、大抵、生徒が最も必要としている事ではなく、その実物にそなわっている思考を選ぶようになってしまうのである。

私たちは必要でないなら、多くの実物を使う必要はない。けれどもその実物の実際の教授能力を越えてまで、話を伸展させるべきではない。もし一つの真理にしか適合しない実物に、何もかも結びつけようとするなら、こじつけになる。一つの実物から多くの真理を見つけようとするなら、実物に専念することになる。

実物の中に、比較できる何かがある時にのみ、その実物は有効なのである。そういう理由から、私たちの魂を意味するものとして、靴の底のような実物を使うことは拒否するのである。そこには名前の発音が似ている（訳注―魂は英語でソール、靴の底もソール）ということ以外、類似性は何一つないのである。それは何の意味も伝達することができない。

ここで、イザヤ書四三・七にある、神が人間を御自分の栄光のために創造された、ということを教えることにしよう。そのために、初めに製作者が意図した働きを行なうことができなくなった実物、たとえば、動かない時計、ばらばらに離れてしまったプライヤー（訳注―ペンチの一種）、芯の出てこないシャープ・ペンシルなど、幾つかを集めることができる。これらを一体どうするのだろうか？　こんなものが役に立つのだろうか？　人々はどうだろう？　神は人々が、神の栄光を現わすように創造された。けれども人々が神に注意を向けないならば、神にとって人々は何の益になるだろう？

これらの実物のあるものを、すぐに修理して使えるような状態にしておけば、今は無用で何の役にも立たない人間も、神に受け入れられるように造り変えられることができる、ということを意味することができる。そこで人間は、神の栄光を現わすという本来の目的を果たすことができるようになるのである。

なじみのある実物を選ぶこと

実物は、教えられる真理よりも、よく知られたものでなければならない。実物の目的そのものが、真理を明らかに、はっきりさせるということである。実物が真理と同じように理解されていないなら、何も得るところがない。イエスさまが平易な、日常生活の例話を用いた方法がしばしば引き合いに出され

る。けれども、もしイエスさまが、聴衆が何も知らない天の経験を話したとしても、彼らはそれを理解できただろうか？　生徒は知らないものを見せてもらえば興味を覚え、楽しむかもしれないが、必ずしも真理を学びとるわけではない。目的が、生徒を静かに保つとか、授業にさそい込むとか、最初に好奇心を捕えるということであるなら、よく知られていない実物の使用も許されるであろう。

神御自身も、みことばの中では、人間の経験に制限されたのである。だれも自分の理解できない言葉でメッセージを伝えることはできない。

ダニエルは一匹の獣の幻を見た。彼はどのようにして、神が示された事を人々に伝えることができるのだろう？　どうして新しい名前を考案してつけないのだろう？　それは人々の経験の中のどれとも結びつかないものであるから、名前などは無意味であり、何一つ伝達することができないのである。ダニエルは、それをただ獣と呼び、人々の知っている動物と比較する以外なかった。

「この後、見ていると、また突然、ひょうのようなほかの獣が現われた。その背には四つの鳥の翼があり、その獣には四つの頭があった。」

彼のこれを描写しようとする努力にもかかわらず、この獣については、なおさまざまな見解がもたれており、いろいろな預言の図表が創作されている状態である。エゼキエルも幻を見た。彼は実際に、一つの輪が、他の輪の中にあるのを見たのではない。けれどもそう言う以外、どうやって描写することが

できたのだろう？　このような幻について種々雑多な意見があるという理由は、それらを完全に比較する方法はないし、その思考を正確に伝達する方法もないということにあるのである。

私たちの授業は、神のみことばを通して、私たちに啓示されたある事がらについて、明白な思考を示すという努力である。生徒たちはどのようにして、見たことのないものを、理解するようになるのだろう？　**それは、彼らがすでになじんでいる物との比較によってである。**

たとえば、私たちが、科学から例話をとってみても、科学を理解できない生徒を受け持っているのでは、学習を伝達する方法がないのである。年令、過去の経験、成熟度などがみな、実物学課の選択に影響を与えるのである。実物学課はそれ自体、よいとか悪いとかいうものではない。むしろ生徒、学課、状況などによって判断されるべきである。

注意深く実物を選ぶこと

実物が「人目をひく」ものであっても、それによって真理があいまいになってはならない。何か不思議な、あるいは考えさせるような要素を持っている実物は、注意深く取り扱わなければならない。このような性質の実物について、ここで示しておく。

教師が二つの水さしを持ってきた。一つには真水、もう一つには塩水がはいっている。卵をそれぞれ

に入れる。真水の方では、卵が沈んでしまうが、もう一つの方は上に浮いている。それから塩水の方に、キリストを示す赤いガソリンをかける。

この学課の意味は「私たちは地の塩である」ということなのである。卵は罪人を示す。そして罪人をキリストのところに行かせるには、世の中に大勢の信者（塩）がいなくてはならない、という意味である。けれども子供たちの意見は、「あれはどうやったのだろう？」「ぼくもできるぞ」というものだった。だれ一人、私たちの責任について語った者はなく、他の人々をキリストに連れてくることに関心を持った者もなかった。興味は全部、浮いた卵に集中してしまったのである。

この学課の概念は、生徒の年令で理解できるものだった。学課は興味深く示された。教材はたくみに取り扱われた。問題は、その教材があまりにも魅力的で、学課そのものよりも強烈に示されてしまった事実にある。生徒は実物とメッセージとの間に、何の関係づけもしなかったのである。

ある児童伝道者たちは、手品師のトリックを学んで、それを霊的に応用しようとしている。キリストに奉仕しようとする他人の努力を批判することは賢明でない。そこで私たちは価値判断の基盤を持たなくてはならない。このような集会に出席した子供たちの声を聞いてみるがよい。彼らは全く魅了されてしまうのである。しかしそれは、しばしば、真理によってではなく、トリックによってなのである。

ある講師が、ペテロが獄舎から救われたという学課を教えていた。彼はペテロの代わりに卵を用い、

手品でその卵を片手（獄舎）から移動させ、後に反対側のポケット（獄舎の外）から見つけ出すということをした。その結果彼は、その学課をほとんど教えることができなくなってしまった。それは二人の男の子が「どこにあるか、知っているよ！　先生の脇のところにあるよ！　ほら、もう一つの手にはいっていくよ！」と邪魔をし続けたからである。彼のあわてぶりから、この子供たちの言っている事が正しいことがはっきりしたのである。

ここでも、このような努力自体、正しいとか、悪いとか言う権利はない。私たちには前にも示した「私たちの目的は何だろう」という質問に立ち戻るのである。これは果たして**教授**活動であろうか？

神秘性をただよわせながらも、学課を教えていく実物学課はよい学課である。もし目的が、子供たちを集めることにあるなら、そして彼らが手品師のトリックを見に集まってくるなら、目的が達成されているのであって、すべてはうまくいっているのである。あるいは、私たちの目的が単に興味を引くことならば、それもよい。けれども、もし**教える**ために使うのであれば、その使用法に対する反応を徹底的に調べた方がよいだろう。

化学変化を用いて教える学課についても、同じ考慮が必要である。子供たちは大抵、教材の持つ神秘性に完全に心を奪われてしまうのである。もしそうだとしたら、私たちの目的はつぶれてしまうのである。簡単な調査によって、おとなの方が子供よりも、手品や化学変化の示す象徴を、よりよく理解する

ということがわかるのである。

生徒の理解度は、彼らの示す興味だけで測ることはできない。なぜなら、ほとんどいつも、彼らは強い好奇心を持っているからである。私たちは「**何に**興味を持っているのか」という質問をしなくてはならない。彼らは教師が逆立ちをすることや、早口言葉を言うことや、くだらない言葉をリズミカルに歌うことにも興味を示すのである。ここでの私たちの目的は、このような学課の使用をやめることではなく、目的や反応を調査し、分析するように勧めることなのである。

実物教材の提示

視覚教育のすべてに関する原則は、ここにも適応されるのである。実物全体がよく見えるだけでなく、比較を示す部分も、よく見えなくてはならない。私たちは「あなた方には見えないでしょうが、この横に小さなバネがあります。みんなには見えなくても、とにかく、それはあるのです。私はこのバネについてお話したいと思うのです」などと話すべきではない。もし何か小さなものを使う時には、何かの形の略図か、それをはっきりさせる、何か別の視覚教材で補わなくてはならない。もし別の実物が使えれば、それに越したことはない。

実物はあらかじめ、目に見えない所にしまっておくべきで、提示する前から生徒の好奇心をかき立て

るようにしてはいけない。

化学変化の実物教育には、更に注意が必要である。

一、多くの教材は劇薬を使用する。市販される場合には、そのように明記した袋に入れてあるが、決して子供たちの手が届かないように注意していなければならない。子供たちは、貼ってある使用法を読んだり、注意を払うことさえないのである。化学薬品を使った水も、使用後できるだけ早く、捨てるべきである。そしてもちろん、いつも子供たちの手の届かない所に置いておくべきである。

二、こういう学課は特に、あらかじめ練習して、うまくいくかどうかを見ておくべきである。うまく変化を起こさない化学教材ほど、効果のあがらないものはない。ある都市の水道には、浄化用の薬品がはいっていて、学課の薬品の働きを中和してしまうことがある。その際は雨水または蒸留水を使うとよい。これについても使用法をよく読むべきである。

三、化学薬品は日時がたつと、効力を失っていく。いつも、効力の保証期限を注意して使用すべきである。

実物学課を見つける場所

本と雑誌

実物学課の本は多く出ており、どれにもよい学課が幾つものっている。各教師は、自分の教える生徒に応じて、その中から選ぶべきである。ある子供は霊的に進んでいて、キリスト者の生活を始めたばかりの子供よりもよく、象徴を理解することができる。小さな子供たちは、どんな象徴でもほとんど理解することができない。

学課の選択はまた、それに必要な教材によっても決定される。あるものは値段が高く、あるものは手にはいりにくく、あるものはよい実物教育の条件に合致しない。ここでも教師は、選択をする能力を開発する必要がある。学課は、出版されて本になっているからといって、必ずしもよいのではないことを、覚えておくべきである。あるものは高度すぎたり、比較して示す真理があいまいだったり、こじつけだったり、一つの実物から多くの学課を教えるものであるかもしれない。選択は大切なことである。どのグループにも完全に使用できる、という本を作り出せる人はいないだろう。

聖書

聖書の中には多くのよい実物学課があり、その真理が一緒に示されている。教師はすぐに、どれが使用可能な実物学課であるかが、わかるだろう。三つの例を次にあげておく。

ヤコブ三・五「あのように小さい火があのように大きい森を燃やします。」

マッチを実物にすることができる。この学課では、マッチの小さな火が、大火の原因になった多くの例を示すことができる。そこで、広範囲に及ぶ、舌の影響と比較することができるようになる。

マタイ二三・二五「あなたがたは、杯や皿の外側はきよめるが、その中は強奪と放縦でいっぱいです。」

実物は、外側を念を入れてきれいにしてあるが、内側がきたない、茶椀や皿である。この学課は、たとい外側の美しさにどんなに引かれても、きたない内側から何か食べるようなことは、だれもしないということである。そのように、外見だけに注意を払い、きたない、不潔な内側に神の臨在を求めるような人々を神は決して喜ばないのである。

エレミヤ五・二六「それは、わたしの民のうちに、悪者たちがいるからだ。彼らは、待ち伏せして鳥を取る者のように、わなをしかけて人々を捕える。」

実物はねずみ取りである。わなにえさをつける人は獲物をつかまえようとしているのだが、ねずみは何かおいしいものが得られるとしか思っていない。人々を捕えるために設けられた巧妙なわなについて話し合いをし、どの場合にもそれは、わなにかかる瞬間まで、楽しいもののように見えることを指摘することができる。

観察

日常生活の中に起こる事件によって、私たちは神と、その教えを思い出すことがある。もしそのような事件が、扱いやすい、よく知られている実物と関係があるなら、それは潜在的実物教材である。

切りぬき

視覚教育において実物教材を使用したい教師は、切りぬきの習慣を身につけるべきである。短い逸話や簡単な教えが、例として実物を使っている場合がある（それは単なる言葉による実物の説明であっても）もしそれがなじみのあるもので適切であり、すぐに応用できるものであれば、切りぬいて、その実物が説明する霊的真理や分野を記入して、取っておくべきである。逸話などを読んでいて浮かんできた考えは、それと一緒に書きとめておいて、逃がさないようにすべきである。その実物学課はすぐに使うものでなくても、切りぬきをしておくべきである。なぜなら、そのような材料を、後になってまた見つけることは、容易なことではないからである。

第八章　平面画、透視画、礼拝の中心装飾による教授

平面画

「平面画」という言葉は、映写されない、平面の絵を意味するために用いられる。授業に使われる平面画は、写真、画家の作品、生徒の書いたものなどである。

絵はすぐれた補助教材である。視覚による作像は、常に明白な理解をもたらす刺激である。絵は、言葉が提供できない、身代わり体験をさせることができる。絵、特に写真は、ものごとの写しである。未就学の子供たちでも、絵を通して思考をはっきり理解することができる。この方法はまた、瞬間的に思考を伝達するので、貴重である。更にこれは、困窮している人々の写真を見ることによって引き起こされるような、「気分」や「感情」を作り出すことができる。平面画は他の視覚教育法と同じように、一つのグループが同時に共通の体験をするようにできるという利点を持っている。

平面画はすぐに手にはいる。それは教案と一緒に購入したり、公共図書館から借りたり、雑誌から切りぬいたり、絵画店から購入したり、生徒が創作したりできるものである。

それはほかの器具を必要としないので、使うのに便利である。また、小さな部屋で、そのまま使えるようになっている。教師は自分で、絵のファイルを整えることが可能であり、教会のファイルに頼る必要がない。

平面画は視覚方式の中でも、最も経済的なものの一つである。教会教育で使われる絵は普通、石版刷りで複製されたものであるから、値段も比較的安いのである。これは一般に使われている大型掛け絵の場合、特にそうである。

平面画は何回でも使用できる。大抵は賃貸しではないから、教師の願い次第で、何回でも自由に使うことができる。

ところが絵は、自動的に理解できるものではない。私たちの国の子供たちは、小さな時から絵を使用することになれているので、造作なく絵を使うことができる。ところが、世界の未開発地域の子供たちは、まず絵を解釈する方法を教えられなくてはならない。問題は、絵には、ものごとを**完全に**理解させる力が何もないということである。ある子供たちは、タイプライターを初めて見て、その大きさに驚いたのである。彼らはタイプライターがどんな形をしているかは知っていた。けれども彼らは通信販売のカタログで写真を見ただけなので、ほかの物と大きさを比較してみることができなかったのである。彼らは、もっとずっと小さな機械だと思っていたのだった。

ある宣教地で、伝道者が大型掛け絵（ピクチャー・ロール）を使っていた。この絵はもちろん、全部一人の画家の作品ではないから、ある絵ではペテロは、黒いひげをつけて描かれており、別の絵では茶色の髪の毛をして描かれていた。これは問題となった。ところが一人の原地人の伝道者は、質問者に対してまじめに、「私もほんとうのところ説明ができません。けれども、どちらも事実なのでしょう。なぜなら、皆さん方もアメリカ人がどのようにして写真をとるか、よく知っているでしょうから」と言ったのである。

絵の選択の基準

一、その絵は一つの中心思考に焦点を合わせているか？ 絵の構成は、一つの思考を顕著に示しているものでなくてはならない。子供たちはその絵の中で、いろいろなことを見つけるかもしれない。けれども、一つだけ、きわ立っていなくてはならない。それを見る人の目が中心人物、または中心思想に引きつけられるべきである。

二、その中心思考は、自分が言おうとしているものだろうか？ 絵は学課の目的を強化するものであるとされている。もし学課で打ち込もうとしている点とは違うものを、絵が語っているなら、それは目的を弱めてしまう。

ある時、サウル王のねたみを受けるダビデの経験に関する、日曜学校の学課が教えられていた。暗唱聖句もねたみということを繰り返していた。ところが大型掛け絵の絵は不適当だった。その学課は、ねたむサウル王の前でダビデが立琴をひいたと言っているので、教師はダビデが立琴をひいている絵を選んだのである。

しかしその背景は、全く平穏なもので、サウル王など、どこにも見当たらないのである。ダビデは野原で立琴をひき、羊たちが満足して彼の周囲に、静かに横たわっていた。天気のよい日で、羊は満ち足りており、ダビデの顔も静かな表情をしていた。中心思想は、一つも、ねたみということを示していなかった。ただ単に、ダビデと立琴の絵であるというだけでは、学課の**思想**との関係ができないのである。

三、その絵は正確だろうか？ 絵が正確でないことがあるのだろうかと、いぶかしがる人もあるが、事実そういうこともあるのである。たとえば、画家がゆがんだ考えを持っているために、子供たちが巨人ゴリヤテの大きさについて、とりとめのない考えを持つことがある。この巨人の背の高さは、実際には、二メートル八五センチほどだった。これは、大きな人である。けれども時々、絵に書いてあるような、人間の数倍も大きい人ではなかった。ある子供は、自分はゴリヤテは、あの草原にあるサイロと同じくらい大きい（約二〇メートル）と思っていたと、おとなになってから告白している。

海外宣教について教える場合、絵が正確であることは、特に大切である。これはほんとうに人々を示す写真だろうか、それともある小さな部分の、珍しい、醜い写真ではないだろうか？ 生活全体の姿を示せないというのは事実である。思想宣伝員は、この種の不正確さを大いに利用するのである。私たちは、最もひどい町の貧民街の写真を「アメリカの生活」という題で見せることに憤慨を感じる。

私たちは、外国の写真を見せる際に、変わっている点だけを見せるだろうか？ 掘っ建て小屋だけを見せて、立派な家は見せないだろうか？ こじきばかり見せて、実業家を見せないだろうか？ 「暗黒のいなか」ばかり見せて、都市は見せないだろうか？ それともこれらを逆にして、最も心地よいものばかり見せるだろうか？ 一方に偏して視覚提示を行なうことは、その国と人々の両方に対して、不公平なことなのである。

四、それは知識と理解力を増し加えるだろうか？ 私たちの授業は、生徒の経験を、豊かにすべきである。

五、細部の描写は適当であろうか？ 実際に、細かなことが描かれすぎていることがある。これは特に小さな子供たちを惑わすものである。絵はぎっしりつまったり、混雑しているように見えてはならない。これは特に、子供たちに塗らせる、ぬり絵の場合、そうである。時々子供たちは、一つの衣服のすそをぬるのに、二つも、三つも色を使うことがある。聖書の衣服そのものが、子供たちの経験では未知

のものであるから、折り目などの線が多くあると、それは一枚の衣服かそれとも何枚かの衣服であるか、わからなくなってしまうのである。

六、子供たちは活動感のある絵に、最もよく反応を示す。それは荒々しい活動でなくてもよい。ただその絵が、何かが起こりつつあるという感じを、伝えるものでなければならない。

授業における平面画の使用法

学課の紹介をし、学ぶ気持ちを引き起こすため

学習を刺激する絵は、普通、疑問を起こし、調査する気持ちを引き起こすものである。たとえば学課が、神のさまざまな創造に関するものであるとしよう。その場合、生徒に考えさせるために、馬と、らくだの絵を比較して見せることができるだろう。らくだの鼻の穴は狭くて、裂け目のようで、吹きすさぶ砂でふさがれることがない。足は広く、平らで、砂の上をめりこまずに歩くことができるようになっている。馬の鼻の穴は広くあいており、走る時に大量の空気を吸えるようになっている。この事により、創造物に対する神のあらかじめなされた配慮ということを、考えるようにさせられるのである。

あるいは、鳥類に対する神の御配慮という学課だとする。木の枝にとまっている小鳥や、とまり木の上の、にわとりの絵を見せれば、どうして神は、鳥が眠っていても落ちないように、しっかりつかまることができるように造られたのだろうか、と考えるように仕向けることができる。あるいは鳥が木の枝にうずくまる時、足を曲げると自動的に指がしまるようになる方法を書いた、略画を見せることもできる。こうすれば鳥はすわっている間中、指がしまっていて、たとい眠っていても落ちないのであるということを、説明することができる。

幼稚科では、大型掛け絵を、学課の紹介（緒言）にも、物語をする時にも使うことができる。子供たちは、話しが始まる**前に**、絵の中にどんな物や、どんな人がいるか調べるのを許されると、その絵にとても興味を持つようになる。子供たちは、大切な事を見つけるとは限らないが、少なくてもその絵をよく知るようになる。一人は「人間がいる」と言うだろう。もう一人は「ひげがある」と言うかもしれない。そしてほかの子供は岩や草を見るかもしれない。それから物語が語られていくにつれ、彼らが見つけたものが話に出てくると、彼らはその絵に興味を持ち、それが何であるか、わかってくるのである。

海外宣教や、未知の習慣などについての学課の場合、絵は紹介の役を果たす。らい病人の絵は、ナアマンの話の緒言になるし、石の祭壇の絵は、犠牲と身代わりについての学課のいとぐちとなる。

緒言としての絵の使い方は非常に多くあり、ここに全部挙げることは不可能である。

要点を強調するため

これは絵の最もよく知られている使用法で、一般的に非常によく理解されているので、ここではほとんど討論する必要がないように思われる。次に挙げるのは、学課の中心部を絵を使いながら教える時に、覚えておくべき事がらである。

㈠、教師は大型掛け絵でも、どの絵でも、それを使いながら話す練習をすべきである。そうすれば学課のどの部分で、その絵を見せたらよいかがわかってくる。

㈡、大抵は、一つの絵を学課の初めと終わりにだけ見せるのでなく、学課の中でも、何回も見せるものである。

㈢、教会教育においては、絵はほとんどの場合、物語を示している。私たちは物語を、道徳的応用や質問で中断したくないので、絵を使うのは教師の活動とする。物語を終えてから、応用をし、子供たちが絵のところに行って、あれこれとさしたり、質問をするようにさせるのである。絵や物語についての話し合いはあとでするのである。

㈣、絵は補充の一方式である。ここでの目的は、芸術の授業のように、その絵と親しませたり、その絵を説明することではない。その絵が物語を説明するのである。これが、物語の前に絵と親しませておくことが小さな子供に役立つ理由である。子供たちはすでに絵の中の人物について知っているので、物語が展開していくにつれ、それらの動きを理解することができるのである。大きな子供たちは、先に見

てしまうことを好まないようである。

㈤、授業では、小さな絵を持ってきて全員に回覧して見せるよりも、全員が同時に見られる大きな絵を一つ準備した方がよい。小さな絵では、子供たちがお互いに絵について話し合ったり、あとの子供たちが順番を待ちきれなくなったりして、注意力が失われることになる。

㈥、平面画はいつも、聖書物語の絵でなくてもよい。中心思想を強調しているものならば、雑誌の絵でも絵画店から買ってきた絵でも使うことができる。

㈦、時には物語のあとで、ぬり絵をぬらせることにより、その学課の中心思想を再び強調することができる。

復習のために

平面画のこの使用法は、教師の活動である場合も、生徒の活動である場合もある。「大型掛け絵」（ピクチャー・ロール）と言われている一連の絵の利点は、一連の学課の絵が、全部まとまって手元にあるということである。教師は復習の時に、楽に一つでも二つでも絵を見せることができる。

生徒もそれを復習に使うことができる。また、教師は生徒の一人に、ある絵の話をするようにと言うことができる。あるいは絵の中のいろいろな人物が、だれであるかを言うようにと頼むこともできる。

生徒は自分の特に好きな物語の絵の中から選んで、クラスに話すことも可能である。

子供たちは暗唱聖句と絵を結びつけて覚えていて、絵を見ては幾つもの聖句を復習することができる。

ある教案には、大型掛け絵と同じ、小さな個人用の絵が子供たちのためについている。ある教師はこれらの絵の上に小さな穴をあけ、一学期分のカードを金属かプラスチックの輪でとめて、復習に使った。どの生徒も毎日曜日、その日のカードのところを出していた。彼らはそれを授業の間使ったり、前の学課の復習に使ったりできたのである。そのカードは一学期間、教室に保存しておき、学期の終わりに生徒に配布された。カードは輪でとめてあったので、普通のカードのようになくなったりせず、家庭でも、習った学課を思い出すのに役立っていた。時には、こういう個人用の教案の絵が、日曜学校新聞の第一面にのることがある。その場合には、その絵を一学期間保存しておくべきでない。なぜなら生徒はそれを家に持って帰りたいからである。けれどもある学校では、ルーズ・リーフのバインダーにこれをとじておいてある。どちらにしても、子供たちが、自分はその絵については何も知らないと感じるような方法で、絵をただ「手渡す」のではいけない。

物語の中で進展する活動を描写するため

視覚カード（フラッシュ・カード）

教会学校においての視覚カードの授業は、公立学校の授業における使用法とは違うのである。公立学校では、それを生徒にぱっと見せて、掛け算、足し算、引き算などを瞬間的に見分ける能力の開発や、単語を教えるのに使っている。

教会学校の授業では、「フラッシュ（閃光）」という名前は不適当である。実際はかえってそれとは縁遠いものである。なぜなら、物語の発展に応じ、しばらくその絵を見せ続けるからである。そして絵は順に一つずつ見せて、見せた絵は隠してしまうのである。このような一連の絵は、物語の主な動きを示すのである。

視覚カードの物語は普通、聖書物語でなく、例話によって教理を教えたり、海外宣教の結果を教えたり、人格を形成したりするために用いられる、特別な話である。普通は、教案の一部として販売されることはない。器用な教師は、雑誌の絵を使ったり、自分で絵を書いたりして、自分で視覚カードの話を作ることができる。

視覚カードの話の準備　これは小冊子の形でくることが多い。物語は初めのところに書いてある。

㈠、絵を切りぬく。あまり細かくて、きちんと切れない場合は、定規で適当な大きさの正方形や矩形を絵の周囲に書き、それを切るとよい。

㈡、同じ大きさのラシャ紙に、切りぬいた絵を貼る。ラシャ紙は厚いもので、教師が手に持った時に巻いてしまわないものがよい。色ラシャ紙にも幾種類かの厚さがあるが、一番薄いものは不適当である。絵を貼る台紙は、同じ色のものでも、いろいろな色のものでも構わない。もしその物語の中に、何か強調されている形があるなら、台紙をその形に切ることによって、興味を更に増大することができる。たとえば「ウサちゃんのたる」という話の場合、台紙をたるの形に切ることができるのである。これはもちろん、話をする際の絶対条件ではない。

㈢、ラシャ紙の裏に、その部分の話をのりづけする。この作業には、特別な注意が必要である。教師は視覚カードを一つにまとめて手に持つ。生徒は最初のカードの表の絵を見ているが、教師の方には最後のカードの裏が向いている。大抵は表紙のページがあって、それに物語の題が書いてある。表紙を一番最後に持ってくると、物語がいよいよ始まるのだが、第一景が生徒の方に向いており、表紙の裏側が教師の方を向いている。そこで物語の第一景に関係のある話は、表紙の裏にのりづけすることになる。第二景の説明は第一景の裏に貼る。このようにして、第三景の説明は第二景の裏、第四景のは第三景の裏というように、最後までやっていくのである。

㈣カードがはいる大きさのマニラ封筒を手に入れる。封筒に物語の名前と、カードの数を書き記し、カードを保存する。

視覚カードの物語の話し方　視覚カードの話は、実物教育のところで見た問題にもぶつかるのである。これは市販されている物語が象徴的である場合が多いからである。子供向きの、専門の話し家たちは、物語を娯楽以外のことに使うという考えに対し疑問を持つのであるが、教会では純粋に娯楽のために使うことはまれである。それは楽しいものでなくてはならないが、その機能の目的は楽しみだけで終わらないのである。

人格形成を目的としている物語は、象徴という問題にぶつかることはないが、教理を説明する物語はぶつかるのである。物語の中の象徴は実物という形の中の象徴と全く同じである。物語が、その物語以外の思考を示している場合、いつでも「生徒はあの理解を教理的思考に移行しただろうか」という疑問が生じるのである。

どの話し方の時でもそうであるが、物語を道徳的説明や、霊的応用で中断してはいけない。たといこれが必要でも、物語が終わるまで待つべきである。それはあるいは、全然必要でないかもしれない。なぜなら、しばしばよい物語は、それ自体のメッセージを伝達するからである。けれども象徴的な話は、いつでも説明をしなくてはならない。

自分で視覚カードの話を作る場合、絵がじょうずであると同時に、じょうずな話し方の原則をも守らなければならない。話には緒言と、クライマックスに至る一連の活動、そして結論がなくてはならない。

物語を書いたり、視覚カードを作る前に、話し方の技術を向上させる書物を何冊か読むべきである。

紙芝居（話箱）

平面画のこの使い方は、話の進展に伴う描写、復習、創作画の結合したものである。紙芝居は、公立学校では「映画」とか「テレビ」とも呼ばれている。こういう名称には、非キリスト教的な関連があるので、教会教育では紙芝居、または話箱と呼んだ方がよいだろう。更に、絵は手で回したり、引っぱったりして、少しずつ動くのだから、「映画」という表現は当たっていない。

この方法の原則は、子供たちの書いた物語の説明の絵を、細長い紙にのりづけするのである。これは話が語られるにつれ、箱の窓を通って、片側に巻き上げられたり、引き出されたりするのである。

紙芝居を用いて教える技術　絵の製作とその提示は共に、教育過程の一部である。この方式は生徒が物語を充分に知ったあとで、初めて使うことができるものである。物語は、子供たちの好きな、しかも絵に書くことのできる情景が多くあるものを選ぶべきである。

物語がきまったら、クラス全体とよく話し合って、話の中のどの場面を書くかをきめるべきである。たとえば、あるグループは、らい病人ナアマンのいやしの話を選んだ。そして、次の絵を書くことにきめた。

(1)、自分が、らい病であることに気付いたナアマン。
(2)、預言者エリシャのことを女主人に話す少女。
(3)、ナアマンからの手紙を受けとったイスラエルの王。
(4)、イスラエル王の所に旅をするナアマン。
(5)、エリシャの所に行くナアマン。
(6)、預言者の言葉を行なうようにナアマンに勧めるしもべ。
(7)、らい病のままヨルダン川にはいるナアマン。
(8)、いやされたナアマン。

クラスが小さければ、一人の生徒に一つの絵を書かせるようにしたらよい。そうでなければ、クラス全体で同じものを二組作るようにさせてもよい。もし復習のためならば、クラス全体で二つの話を作ることもできる。時間があれば、子供たち一人一人が、自分の紙芝居を作ることもできる。けれども想像力の豊かな子供はこれを好むだろうが、ある子供には大変むずかしく、一つの情景を書くのがやっとであるかもしれない。

もし、クラス全体の共同作業で、一つの物語しか作らないなら、絵を書く前に、ある協定を作ってお

くことが必要である。ナアマンの髪の毛は、何色にするか？　ひげをはやしているか？　彼の衣服の色は？　繰り返し出てくる人物についても、同じように話し合っておく必要がある。一度しか出てこない人物（たとえば奴隷の少女）については、子供の想像力にまかせるべきである。もしそれが個人用の紙芝居なら、全部生徒自身の決断にまかせた方がよい。

絵は、細長い紙に直接書かせるよりも、適当な大きさの別々の紙に書かせて、あとで細長い紙にのりづけした方がよい。子供たちは書くのを間違えるし、自分の書いたものに満足をしなかったり、協定を忘れて違った色を使ったりして、やり直しをしたいと言い出すのである。もし直接、細長い紙に絵を書いて、一人の子供が失敗をすれば、ほかの絵も全部だめになってしまう。別々の紙に書いていれば、満足のいくまで書き直すことが可能である。絵が完成したら、細長い紙に、正しい順序でのりづけをするのである。

のりづけをする時、**間隔を注意深くきめる**べきである。絵と絵の間は充分に離して、次の絵が出ている時に、前の絵が見えないようにしなくてはならない。また、あまり離れすぎて、絵と絵の間隔が長くてもいけない。

教師は、この作品が生徒の作ったものであることを記憶すべきである。教師はよく、生徒が満足している作品を「直し」たり、「もっとよく」したり、不満の意を示したりする。教師は、桃色と紫色とだ

いだい色を一緒に使うのはいやかもしれない。けれども子供にとっては丁度よい色であり、特に自分の作品である場合、気に入っているのである。

前述したナアマンの話で、何人かの子供が自分の紙芝居を作った。ある子供はナアマンのらい病のはん点を、ひょうのはん点のように書いた。そして最後の絵で彼がヨルダン川から出てくる時に、目のくらむような笑顔を書いたが、それはまるで酔払いのように見えた。けれどもこの子供は、この話の精神を捕え、それを絵の中に充分に表現したのである。ナアマンの体は明るい桃色であるし（もちろん生まれたばかりの赤ちゃんのように）、全体の絵の中で初めて、空に、神のナアマンに対するいつくしみを示すかのように、太陽がさんさんと輝いていたのである。

紙芝居の教育的価値は、箱と物語ができたところで完成するのではない。それを生徒の前に見せなくてはならない。一人の子供が物語を話し、別の一人か二人の子供が物語を進めるために巻き棒を巻くようにさせる。あるいは何人かの子供たちに、順番に、自分の書いた絵が出てきた時に、その話をさせることもできる。子供たちは自分たちの作品を見ているのだから、注意力が散漫になることがない。

この物語は、作っている時と、最初に見せた時に、復習の役割りを果たすだけでなく、保存しておいて、時々更に、復習するために見せることができる。個人個人の箱があるなら、子供たちはそれを家に持って帰って、話をしたいと思うだろう。これはまた、特別な行事の時に使うこともできる。

子供たちが紙芝居方式を楽しんでいるのに、教室でそれを完成する時間が充分にない場合、子供たちに、各家庭で作ってきて、教室で見せるようにさせることも可能である。また、教師が授業のために自分で物語を作ることもできる。時には、フランネル・ボードの人形（フィギュア）を利用することも可能である。何回も出てくる人形は、写して複製するとよいだろう。

発表の方法として

平面画のこのような使い方に対する興味は、クラスにより、また教師によりずい分違うのである。創作画の使用は紙芝居に限定されるものではない。子供たちが家庭や学校で書く絵は、彼らがこの方法に興味を持っていることの充分な証拠である。彼らは自分だけで楽しんでおれずに、それを壁に貼って、みんなにも楽しんでもらおうと思うのである。

授業に使う場合、絵は子供たちが聞いたことに関する、彼ら自身の考えを示したものでなければならない。主題の選択においては、子供たちにある程度の幅を持たせるべきである。

たとえば、ある小学上級科のクラスが、各書巻を絵で示すものを編集していた。ある話はモーセと燃える柴（しば）の話だった。チャールズは燃えている柴の絵を書いて提出した。けれどもその柴の真中に、何か黒い、形のないものが書いてあった。聞いてみると彼は、それは神さまだと言った。それは最初思ったほど、おかしいものではなかった。形がないということは、神は人間でないというこの少年の理解を表わしていた。それが目に見えるということは、神が単なるむなしいものではなく、一つの存在であると彼が理解していることを示していた。そして黒という色自体、彼が神とはどのような方であるか、はっきり知らないということを示していた。彼は自分の絵に完全に満足していた。教師もそのまま、その絵を受け入れた。

中には、恥ずかしがり屋や、だれかの助けがなくては進められない、想像力のない生徒がいるから、ある種のヒントを書き出しておくことが必要である。そしてクラス全体で、このリストを作るべきである。想像力の強い子供たちは、ほかの子供たちが作らない、何か違ったものを作ろうとするに、違いない。

恒久的壁掛け

これは壁に掛けるように仕上げた絵のことである。

(一)、子供たちが特に喜ぶと思われる物語の絵を選ぶ。

(二)、何回も使いたいならば、台紙に貼るべきである。台紙の種類は、その絵の使用法によってきまる。短期間展示するだけならば、ラシャ紙で充分である。あるいはテーブルの上に立つ額ぶちに、一定

の間隔をおいて、順にさし込んで見せればよい。子供たちがさわってもよいように保存しておくのなら、調和した色のケント紙に、しわにならないようにゴムのりで貼るべきである。半練りワックス（液体ワックスはだめ）をぬり、軽くこすってつやを出す。こうしておけば、指のあとがついても拭きとることができる。

㈢、絵は**子供の目の高さ**に展示すべきである。子供たちは、さわったり、指さしたりすることによっても楽しみを得るのである。このように展示をすれば、絵は単なる装飾でなく、引き続き、教育の一方式として効力を表わすのである。

㈣、絵は時々、変えるべきである。

透視画（ジオラマ）

これは大きな立体画で、光の操作でその効果が変化するものである。普通、教会で使用されている透視画は、箱のわくの中に入れた立体画で、うしろか、上から光を当てたものである。

透視画の作製

一般的な二つの形のものを、ここであげておこう。一つは、大きなボール紙または木の箱で、横にして、開口面が聴衆の方を向くようにする。紙人形（フィギュア）や背景を箱の中に、立体感を出すような位置につける。上か、うしろを切り開いて、電球を入れ（色をつけてもよい）、情景が後方から照らされるようにする。

第二のものは「のぞき箱」と呼ばれているものである。大抵、これは、靴の箱のような、小さな箱の中に作られる。ある教案は時々、その視覚教材の中に、靴の箱の寸法の「のぞき箱」に丁度よい寸法のフィギュアを入れてある。

これを作るには、箱のふたを取り除き、箱の片側（長い方の）に直径三センチぐらいの小さな穴をあける。フィギュアは、のぞき穴から見た時に全部見えるように、互い違いの場所につけなくてはならない。あるいは、背景もフィギュアも自分で書いて、のりしろをつけて、所定の場所につけるようにしてもよい。フィギュアを所定の場所につけたら、白い薄紙を箱の上にぴんと張って、四隅をのりづけする。この紙は箱のふたになるだけでなく、拡散した光線がはいるようにしているのである。子供は片目を閉じ、もう一方の目をのぞき穴に近づけて情景を見るのである。

どちらの形においても、遠くのものよりも前景にあるフィギュアを明るい色でぬることにより、遠近法の効果を高めることが可能である。

透視画による授業

教室では、教師は透視画をあらかじめ準備しておき、子供たちは一人ずつ、絵を見るのと同じように見るのである。のぞき箱には、幾つかの教育的問題がある。

㈠、一度に一人しか見ることができないので、他の子供たちが順番の来るのが待ちきれず、待っている間に騒がしくなること。

㈡、子供たちが順番の来るのに関心を持ち、注意力をのぞき箱にばかり向けるので、教師が学課の残りの部分に進んで行けないこと。

㈢、一人ずつ見る方法は、ただでさえ短い授業時間の中で、時間をとりすぎること。しかものぞき箱に興味を持つ年令の子供たちは、急ぐことに関心がないのである。

このような理由から、のぞき箱は補充的教材として適しているのである。のぞき箱は学課の中でなく、工作の時間に順に見るとよいのである。なぜならほかの子供たちも、順番を待っている間に、楽しい作業をすることができるからである。見たものに興味を感じれば、意見が出るようになる。そこで教師とクラス全体が、こういう事について、くだけた形で話し合いをすることができる。このようなのぞき箱の用法は、授業時間の中で受けとった影像や概念を強化するのに役立つであろう。

透視画の最大の価値は、時間が許すならクラスの全員がそれを作ることにあると言える。また、計画

を立てる際の討論という価値がある。いつでも、ただ見るより作る方が楽しいのである。これは日曜学校の時間内では、やりきれないものであるから、夏期学校のような、もっと時間のある時にした方がよいだろう。

のぞき箱は出張授業において、特に効果的である。（訳注―アメリカの日曜学校には出張科という組織がある。）このために、教師はのぞき箱を作って、病院や家庭にいる子供にあげるのである。子供はお話を聞きながら、箱をのぞいている。のぞき箱には平面画よりも神秘性があるので、話を聞いている子供は完全にとりことなってしまう。これは教育方式として時々使われるだけであるが、面白い変化である。

礼拝の中心装飾

礼拝の中心装飾は、視覚教育の中の、消極的な形の一つである。それは礼拝をするようにと絶えず語りかける、クラスの前においた設備（聖書とか、キリストの絵）である。このような中心装飾の教育的価値を理解するためには、礼拝の性質そのものについて語る必要がある。

礼拝とは、憧憬（しょうけい）をもって心の中からぬけ出し、ある人、またはあるものに価値を定めることである。金銭や物質的財産を「礼拝する」人がいるとよく言うが、キリスト教会においては、「礼拝」の意味を神の礼拝に限定している。

礼拝の中心装飾を教育手段として使用する場合、私たちの礼拝は、台や、そこに置かれているものに直接向けられるのだと考えさせないようにすることが、非常に大切である。礼拝の中心装飾は部屋の装飾の一部でしかない場合が多いのである。

これが本来の目的を達成するためには、それを見る人々が、神に心の礼拝をするようになるような性質のものとし、使用しなくてはならない。この事を頭に入れながら、教師は、(イ)注意力を神に向けるようなものを選び、(ロ)中心装飾をさして、これは神のすぐれていることを絶えず思い出させるものである、と説明すべきである。このどちらが一つでも欠けてはならない。私たちは多くの宗教的象徴にかこまれているので、ただそこに「ある」だけでは、私たちに何の意味も語りかけてこないのである。

私たちはどのようにして、礼拝の中心装飾で教えることができるのだろうか？　ほとんどの場合、それは学課の教材と関係のない、補足的方式である。礼拝の中心装飾を使用する方法が少なくとも二つはある。

(一)、最初に礼拝の中心装飾を作った時、特別な注意をそれに払う方法。

(二)、特別な時にその重要性と意味を強調する方法、たとえば、私たちが神のみことばをどのようにして持つようになったかを教える場合に、開いた聖書をそこに置いて指摘するような方法。

礼拝の中心装飾が、単なる装飾にならないようにする唯一の方法は、時々それを変えるということで

ある。時には授業中に、生徒が、神を礼拝する理由を幾つもあげたり、礼拝の方法を提案したりすることがある。そのような考えを用いて、新しい礼拝の中心装飾を作るとよい。子供たちは、自分の意見による中心装飾が出てきたのを見る時に、特別に興味を覚えるものである。

たとえば、話し合いの時に、ささげものは神を礼拝する一つの形であるということが発見された。そして、十分の一（什一献金）は、神が天と地の所有者である、という原則の上に立っているのであり、十分の一を納めることにより、私たちは神にふさわしい認識と礼拝をささげるのである、ということを生徒は学びとった。この話し合いの結果、しばらくの間、献金皿が礼拝の中心装飾の中心的位置を占め、献金袋や封筒を生徒の間に回さずに、全員が礼拝の行為として、前の献金皿のところに献金を持ってくることになった。

別の学校では、子供たちが海外宣教に興味を持った。彼らは、神の偉大さとすぐれていることを認める一つの方法は、みことばに従って、全世界に福音を伝えることである、ということを発見したのである。福音を分け与えることが、神の栄光を現わし、神をあがめる一つの方法であることを、思い出させるために、彼らは礼拝の中心装飾に、いろいろな国を代表する小さな人形を置いたのである。

また別の学校では、小学下級科のクラスで、教会出席は神をあがめることだと習ったので、礼拝の中心装飾に、小さな、白い教会の模型を使ったのである。

第九章　劇による教授

劇にするということは、物語または思考を行動によって語るということである。これは人類の歴史と同じくらい古くからある方法で、どの時代にも興味を感じさせたものである。それは観客にとっても、演技者にとっても面白いのである。それは正式に振り付けをしたバレーという劇から、四歳の子供がする「カウボーイごっこ」という、何が飛び出すか予測のできない、くだけた形のものまで、広範囲にわたる方式で表現されている。さらに「パントマイム（無言劇）」と言われる、声を出さない劇、「活人画」と呼ばれる絵の形をした劇、ものまね、「芝居」という劇、いろいろな形の人形劇、そのほかの格式ばらない劇などが考えられる。

旧約聖書の預言者たちは劇を効果的に使用した。ある時には、自分たちの思考を明らかにするために用い、またある時には、聴衆を集めるために用いた。エゼキエルが最初、メッセージを公けに語った時、人々は彼の話を聞くことを拒否した。そこで神は彼に、それを劇にするように、けれども黙ってするようにと教えられた。この事は人々の好奇心をかき立て、人々は、話なら聞こうとしなかったのに、彼のところに見に来、神のメッセージの重要さをつかんだのである。

本書は教育の問題を取り扱っているのであるから、私たちは教室に適した形の劇について、考えることに限定していきたい。時間と場所の問題から、教会学校では公立学校よりも、劇の使用が制限されている。本書ではまた、クリスマスやイースターなどの特別行事での劇の使用法も除外しておく。

ここでの記述は多分、「正式」とか「略式（くだけた形の）」と言われるものの区別をしておいた方が、はっきりすると思われる。

正式の劇は、独自の舞台道具や衣装を必要とし、何らかの形の台本をもとにしているのである。略式の劇とは、間に合わせに作った道具しかいらないし、衣装も全然、またはほとんどいらないし、役割りも簡単な計画できまったもののことである。正式の劇は、観客、正確さ、適切な演出法を必要とする。略式の劇は観客よりも演技者に強調点を置く。それはこの活動が、物語の事実と意味の両方を教える管であると考えるからである。これはまた、充分に楽しみながら行なわれるのであるが、娯楽のために用いられるのではない。

私たちは劇の教師を作りあげようとしているのではない。私たちは劇を媒介者として用いる、聖書真理の教師を作りあげようとしているのである。このような理由から私たちは略式の劇と、ある種の人形劇だけを取り扱うことにする。この形は小学上級科まで使えるが、主として幼稚科と小学下級科で使用するものである。

劇によって教える利点

一、劇は自己表現をさせる。観衆よりも演技者の方が多く学ぶということは、すでに古くから確立している事実である。略式の劇は、立案の時にも、演技の時にも、自己表現を可能にしている。これは特に子供たちには大切である。「おうちごっこ」をしている場合、みんながやりたがる。「ただ見ている」という子供は一人もいない。観客などいなくても、その中にはいっているということが、楽しいのである。

私たちが教会学校の劇で求めるのは、この感じ（フィーリング）である。観客などいなくても構わない。事実、観客などいなくて、全員が何かの役をする方が最も好まれるのである。私たちは学んだ事について、感じたり、理解したことを表現するのである。

二、劇は模倣という生まれつきの傾向を利用する。子供たちは、だれかほかの人になるのが好きである。一足のハイ・ヒールの靴と、足首まであるようなドレスがあれば、六歳のペギーがすました貴婦人に、直ちに変わってしまうのである。事実、道具は一つもいらないのである。

五歳のビルは部屋の中をあばれ回りながらやって来て、母親のひざに突然ぽんと乗ったと思うと、床に倒れてしまった。「一体何をやっているの？」「僕はカウボーイなんだ。馬の上ではねていたんだけ

ど、振り落とされちゃったんだよ。」馬も、カウボーイの服も、ピストルも何もない。全部想像なのである。

三、劇は、その人物と状況とに同化させる。子供たちが、自分で扮装(ふんそう)している人物の精神を、正確につかんでいるのを知る時に、おとなは驚くであろう。

何人かの子供たちが「汽車ごっこ」をしていた。椅子を一列に並べて、先頭の椅子にはフードチョッパー（訳注一野菜などをきざむ、ひき肉のグラインダーの形をした機械）をつけてあった。「機関士」は気違いのようにチョッパーを回して汽車を走らせており、乗客は椅子にすわって安全に乗っていた。突然トミーは飛び上がると、見ていた母親を押しのけた。そして大声で言った。「わぁー、間に合った。僕、お母さんを助けてあげたんだよ。汽車がもう少しでひくところだったんだよ。」

「聖書物語ごっこ」をする時にも、子供たちはその物語の精神を感じとることができる。五歳のダンはある日、一人で部屋の隅で遊んでいた。突然、何の前ぶれもなしに、彼は立ち上がり、大声で「僕はこわくない。神さまが僕を守ってくれる」と叫び出した。母親が何をして遊んでいたのかと聞くと、彼は答えた。「僕はダニエルだ。あんなライオンなど少しもこわくない。」それから彼はまた、静かに遊び出した。彼は別に劇をしていたのではないから、明らかに彼の頭の中で、この話が展開していたのである。そして自分とダニエルを頭の中で同化してしまったので、突然自分の気持ちを行動に表わした

のである。

四、劇は面白いし、強い印象を与える。それが面白いのは、行動を含み、模倣を許し、想像力を養うからである。学習の法則の一つに、私たちは興味を感じるものを、最もよく覚えるというのがある。それが好きであればあるほど、よく覚えているのである。この教室で行なう略式の劇において私たちが覚えるのは、背景や演技の完全さでなく、自分の演技した思考、その劇の精神なのである。

子供の教会（ジュニア・チャーチ）で未就学児たちが、ある話の劇をすることになった。子供たちは「一匹の失われた羊」をやりたいと言った。教師は、これには行動があまりないので、適切な話だとは思わなかった。ところが子供たちはそれを要求し続け、その結果、今までのどの劇よりも評判のよいものとなった。彼らはその日、何回もそれを繰り返して行ない、次の日曜日にも繰り返した。その劇の何が、そんなに気に入ったのだろうか？

最初その劇をした時、何の理由からか、「羊飼い」になった子供が、「羊」がおりにはいってくるのを数える時に、一人一人の頭に手を置いて数えたのである。彼らは何か、仲間意識を感じたのだろうか、そのあと、「羊飼い」が、おりにはいってくる羊にさわるのを忘れるたびに、大声で文句を言っていた。（このような物語の展開の技術については後に出てくる。）

夏期聖書学校のあるクラスが、よいサマリヤ人の話を劇にしていた。配役をきめる時、セシルは「強

盗」になりたがった。セシルはびっこだった。片方の足が五センチほど短かったので、歩く時にはひどく、びっこをひいた。しかしながら彼は、この役に興味を感じた。彼はここに何か、挑戦を感じる、危険なもの（しかし教室という庇護の中にあるもの）を、行なうことができるのである。ほかの子供たちも、まだ小学下級科の年令だったが、それが彼に意味することを感じとった。そして「強盗」がエリコへ行く人を襲った時、他の強盗たちは奇妙に行動をひかえていた。顔を輝かせて、見事な腕前で「獲物」をやっつけたのはセシルだった。

確かに彼の興味は、学課の思想そのものに向けられていなかった。けれども劇に対する彼の関心が、全校の関心を彼に引きつけることになったのである。更に、ほかの子供たちは、思いやりということを学びとったのである。

五、劇は自信、独創性などを通して**人格を形成する**。だからこの種の劇において、教師は本来、指導者ではなく、援助者なのである。どこででも可能ならば、教師は自分の考えではなく、子供たちの提案を用いていくべきである。

教室における劇の技術

この方式について、頭に入れておかねばならない注意事項が幾つかある。それは、活動が思想を完全

に支配してしまうことである。けれども一番大きな問題は、教師自身から生じるのである。教師は一種の完全主義に固執して、興味という要素を破壊してしまう傾向を持っている。これと関連して、教師は「一番よくできる」子供の望みをかなえてしまうのである。劇によって授業をする場合、**じょうずか否かは問題でない**。私たちは演技の仕方を教えているのではない。彼らが自分の役割りを、こなすことができなくても構わない。彼らがその思考を捕えることに、私たちは関心を持っているのである。この方式を使う時、私たちはクラスの全員が参加できるように、注意しなくてはならない。もし全員が一度に、その物語の劇をすることができないなら、演技者を変えて、全員ができるように、二度行なえばよいのである。

一、物語をよく知ること。子供たちが物語を充分に知らなければ、その物語を劇にすることは不可能である。活動、会話、人物を皆、知らなくてはならない。それは子供たちの好きな物語でなければならない。子供たちに物語を選ばせれば、楽しんで行なうことが確実である。

二、必要な人物をきめ、配役を割り当てる。小学生ならば、黒板を用いて、必要な人物の一覧表を書き、それができ上がったら、配役を割り当てるべきである。未就学児ならば、生徒が人物の名前を言うごとに、その配役を割り当てたらよい。こうすれば、立案が復習にもなるのである。

私たちが「人物」と言う時、それは必ずしも人間ばかりを意味するのではない。「一匹の失われた

羊」には羊が必要である。「よいサマリヤ人」をする時に、子供たちは大抵、「ろば」になりたがる。「獅子の穴のダニエル」にはライオンが必要である、という具合である。

小学上級科では（私たちは小学上級科までしか、この方式を使用しない）全員に参加させる必要はない。なぜなら劇を見ることも楽しみだからである。けれども、見ている生徒もしばらくすると、自分たちも交代して行なうべきだ、と感じるようになるのが普通である。小さな子供たちは、全員が一緒に劇ができる時に、その物語を最も楽しむことができるのである。「一匹の失われた羊」が好評である理由の一つがここにある。本来は、まい子になる羊と、羊飼いという二人の人物しかいらないのであるが、ほかの全員が羊になれるのである。「獅子の穴のダニエル」も、幾らでもライオンを使うことができるので、やはりよい物語である。

時々子供たちは、劇にするのは無理に思える物語をしたいと言うことがある。少なくともそれをためしてみ、どんな解決方法を彼らが考えているかを見るべきである。

ある時、子供たちが「からすでエリヤを養う神」をやりたいと言い出した。教師は、からすをどのようにして飛ばせたらよいかわからないので、その物語を拒否しようとした。ところが子供たちは、その問題を解決したのである。彼らは紙の「鳥」を作って、エリヤのところに持ってくるのだと言う。そして実際の劇では、子供たちが自分たちで「鳥」を手に持って飛ばせるまねをした。教師には、それは全

然鳥のように見えなかったが、子供たちは、自分たちがそこにいるという事実を全く忘れてしまったようだった。彼らには鳥しか見えないようだった。そして自分たちはそこに全然姿を見せなかったかのように、全く満足していたのである。

三、必要な道具をきめる。この形の劇では、道具は最少限度に押え、衣装は全然使わないようにする。最も重要な「道具」の一つは、教室にある椅子である。「よいサマリヤ人」の話を劇にしていると考えてみよう。

部屋の片側に横倒しにした椅子がエルサレムになる。部屋の反対側に横倒しにした第二の椅子がエリコになる。二つの椅子の間のどこかに「宿屋」と紙を貼った第三の椅子を置く。もし適当な場所にピアノ（オルガン）がなければ、更に幾つかの椅子を横に倒して、強盗の「隠れ家」にする。

事実、この話は、子供と何脚かの椅子以外の参加者も道具もなしに、何回も演じられてきているのである。もしこの原始的な行動に限界があるならば、それは生徒でなく、教師の頭と目に感じられるものなのである。円形に置いた椅子は、羊のおりにもなる。

時には、場所をただ示すほかないことがある。あるグループが「らい病からいやされたナアマン」をやりたいと考えた。けれども「ヨルダン川」の問題があった。ここでも彼らは、自分たちで解決を出した。ただ手をひと振りすることによって、彼らは川のある所を示したのである。「ナアマン」が「川」

に来た時、彼はその場所に七回、うずくまったり、立ったりしたのだった。

「王様」を家来から区別したければ、紙の王冠をつけるだけで充分である。「エリコの陥落」のような話の時には、家具などを倒したくないから、積み木を使えばよいのである。王座にはおとな用の椅子を使い、家来には子供用の椅子を使うべきである。

四、物語の活動を計画する。このような劇は演じるよりも、計画する時に、はるかに多くの時間がかかることに気が付くだろう。けれども私たちは教えているのであって、劇を行なうことと同様に、計画することによっても教えているのである。事実、この略式の教室劇は、計画にあまり時間がかかるので、普通の日曜学校の授業時間の中では使うことができない。これは子供の教会（ジュニア・チャーチ）または夏期聖書学校に適しているのである。

さて、人物が選ばれ、道具がきまったら、それぞれの生徒が何をするかを、話し合うべきである。この話し合いは、演技者にだけ限定すべきでない。なぜなら、ほかの子供たちも間もなく、順番が回ってくれば行なうからである。次に物語の動きが何であるかをきめたらよい。

次のような話し合いが行なわれている教室を、想像してみよう。

「まず、この話では何が起こるのかな？」

「一人の人がエルサレムからエリコに行くんです。」

「ビリー、今度は君がその人になるんだよ。君はどこから出発する？」（彼はさし示す）「どっちへ向かって行く？　途中で何が起きる？」

「強盗が出てきてつかまえます。」（これは演技しない子供から）

「強盗さん、君たちはどこに隠れている？」（彼らは場所を示す）「この人が近づいて来たら、君たちはどうする？」（彼らは襲いかかる方法を計画する）「そこで、君たちはみんな、日曜日用のいい洋服を着ている。だから強盗はあまり、乱暴にしてはいけないよ。動き回るのは構わないけれど、ひとの洋服を裂いたり、よごしたりしてはいけない。」（これが夏期聖書学校などで、普通の遊び着で来ているならば、こんな事は言われない。）

「強盗がその人をそこに放って行ってしまうと、何が起こる？」

「レビ人が通り過ぎて行きます。」

「レビ人はだれかな？　ああ、アリスだ。あなたはどうする？」

「あたしは道を歩いて来て、この人を見て、それから向こうを見て歩き続けます。」（彼らは確かに顔をそむける。彼らは知らん顔をして、彼を無視したという自意識と共に、すまして歩き去るのである。）

ジョージが口をはさむ。「そこで僕が来て、通り過ぎるんだね。僕は祭司なんだ。」

「それからサマリヤ人が来る。ポーロ、君は何をするのかね？」

「介抱するんです。」

「ビリー、君はフィリップよりずっと大きいな。彼がろばなんだよ。どうやってろばに乗ろうか？」（普通は、子供たちが特に希望しない限り、ろばを使わない。けがをした人に、びっこをひきながら宿屋まで行かせるようにする。けれども大抵、子供たちはろばになりたがるのである。）

「僕は彼が四つんばいになって歩く時、かぶさるようにして立って、歩いていけるよ。」

「それはいい。ポーロ（よいサマリヤ人）は宿屋に着いたら何と言うのかな？」（これがこの物語の中での最初の話になる。小さな子供の場合、話すことは最少限度にとどめておくべきである。彼らは何よりも話すことをはずかしがるようである。）

「『ここにお金があります。私が帰ってくるまで免倒をみて下さい』って言うんだって。」

この見本の中には、注意すべき処理が幾つか含まれている。

㈠、必要だと思われるところで、教師が主導権をとっている。

㈡、できるだけ、生徒の提案を受け入れている。

㈢、配役や道具について、彼らが今計画している事を、すでにきめた事がらと関係づけている。

㈣、総体的に計画するだけでなく、それぞれの役者が、どこで始めて、何をするのかわかるようにさせている。

㈤、話す部分を限定している。

㈥、女の子も参加しており、配役も物語の中の実際の女性の役に限定されていない。

五、物語を演じる。これはある教師には、新しい方法かも知れないので、念を入れて、前述したほかの二つの物語の行動を、簡単に考えてみることにしよう。

『一匹の失われた羊』

(1)、「羊」は「おり」（横倒しにした椅子）の中で眠っている。それから「朝になって」「羊飼い」は「羊」を牧場に連れて行く。（これは大きな部屋でなくてもよい。子供たちは小さな部屋の中をぐるぐる回り歩くのを何とも思わない。あるグループは、部屋の中に日光が明るくさし込んでいたが、一人の子供に電灯を消させて夜にし、電灯をつければ朝になるという風にさせた。羊飼いも羊も忍耐深く、時間が来るまで待っていた。）

(2)、みんなが出ている間に、一匹の羊がまい子になる。（この羊はあらかじめきめておく。そうしないと多くのまい子の羊が出てくる。）彼は扉の陰、洋服掛けのコートのうしろ、部屋の中の戸棚の中、ピアノのうしろ、その他部屋の中で自分が選んだ所に隠れる。

(3)、羊飼いは羊をおりに連れ戻し、はいって行くところを「数える」。（もしこれが未就学児なら、数えるこの部分が一番でたらめだろう。口に出して数えさせたり、数えているしるしに羊の頭を一つずつさわらせても

よい。）

(4)、羊飼いは一匹の羊がいないことに気がつく。おりの戸を閉める（椅子でふさぐ）。それから羊を捜しに出かける。（小さな部屋で、隠れる場所が少なく、しかも何回も隠れ場所として使われている場合、捜すなどということは全然しなくてもすぐに見つかるように思える。けれども子供たちは捜すのである。小さなまい子の羊は、教師に、時々「メェー、メェー」と鳴くようにと言われている。こうして羊飼いに見つかるのである。）

(5)、羊飼いは彼を見つけて、おりに連れてくる。

(6)、羊はうずくまって眠る。

この話は単純すぎるので、小学上級科の生徒には向かない。けれども就学前の子供たちは何回やってもあきないようである。一日のうちに何回でもやりたがるのである。この劇は何も話をしなくてもできる、という点に注意すべきである。

『獅子の穴のダニエル』

これには幾つかの情景があり、話もするので、就学前の子供には適していない。小学下級科の子供たちは、大勢ライオンになれるので、特に好きなようである。小学上級科の生徒は、ライオンになることを気にするので、ライオンを使わないで行なう。

この物語は長いので、出発点を選ばなくてはならない。私たちは体験から、ダニエルが祈っているところ、あるいは人々が王に報告に行くところから始めるとよいことを発見した。

六、配役を変えて、もう一度行なう。

劇に関する提案

一、神が人々に現われた物語を選ばないこと。子供には、自分は神さまの役ができるなどと思わせてはいけない。もし子供たちが、イエスさまの現われる物語をやりたいと言う場合には、それを行なわない理由を、次のように率直に説明すべきである。

「神さまは偉大で、すばらしく、人間とは違っていて、だれよりもずっと立派な方だから、だれも神さまのまねさえしてはいけないのですよ。」

子供たちはこれを受け入れる。そしてこの過程の中で、私たちの主に対して、更に尊敬を払うようになっていくのである。

二、ある物語には超自然的な行為が必要である。たとえば「エリコの陥落」の話である。このような話を使うなら、子供たちは自分で城壁を押さなくてはならない。そして計画する際に注意深く説明し、約束をしておいて、イスラエルの民は実際の事件の時に、自分たちで奇跡を起こしたのでないことを、

理解させなくてはならない。このような物語はできるだけ避けた方が、ほんとうはよいのである。

三、話よりも活動に頼る物語を選ぶこと。

四、大勢が参加できる物語を選ぶこと。

五、年令の相違が少ない時に、劇は最も成功する。子供の教会には、四歳から十一歳までの子供がはいっている時がある。このようなグループにこの方式を使うのは困難である。なぜなら、就学前の子供たちに適切な、簡単な物語は、小学上級科の生徒には面白くないからである。この方式は、年令の差が、日曜学校の一つの科の範囲（普通は三年間）を越えない場合に有効である。

六、この劇は略式であるが、いつも秩序を守るべきである。子供たちに、勝手に走り回らせてはいけない。それは協力的冒険でなければならない。

人形による劇

私たちは関節についている糸を上からあやつるような人形（あやつり人形―マリオネット）を除外する。この形の人形は普通の教師が身につけていない、高度の技術を必要とするのである。私たちは「指人形」だけについて考えることにする。

これには、聖書の人物、動物、子供とか道化師のような現代の人物などがある。指人形をあやつる原

則は、人形の頭を人さし指で動かし、手は親指と中指で動かすということである。残りの二本の指は折って、手のひらにつけておくのである。大抵の指人形には足がないが、全身人形のようにある場合は、ただ力なく下がるようにしておき、あやつらないものもある。

指人形には、(イ)何かの形の頭と、(ロ)衣服　が必要である。

指人形の作り方は、多くの専門の本に出ている。

指人形の教室での使用法

(一)、**物語をする**ために用いる。教師が使う場合、同時に二つ以上の人物を使ってはならない。何人かの使い手がいるならば、必要なだけ人形を使ってもよい。何人かでやる場合には、彼らをテーブルの周囲のカーテンで隠すべきである。活動は全部、使い手に一番近い所で行ない、人形の衣服のすそがテーブルの線から離れないようにすべきである。人形の動きは前後でなく、横の動きでなくてはならない。なぜならテーブルのふちを越えて腕を突き出すと、人形が宙に浮いてしまうからである。

ある人々は、床にある穴や溝から人形をあやつることのできる、特別な舞台を使っている。

腹話術を使ってはいけない。人形の代わりに話をし、それに呼応した動きをさせるべきである。

(二)、ある幼稚科の教師は、人形を**しつけの補助教材**として使った。この教師は「ホーマー」という名

の大きな全身人形を持っていた。ホーマーはクラス全体を見渡せる棚にすわっていた。もし子供の行儀が悪いと、教師はホーマーに語りかけた。「あなたはジョイスのした事を見た?」(人形はうなずく)「ジョイスはほかの子たちの邪魔をしましたか?」(うなずく)「ジョイスがもう、しなければよいと思う?」(勢いよくうなずく)これはこのグループには、とても効果的だった。子供たちは普通の叱責よりも、ホーマーの方によく反応をしたようである。

㈢、人形は**遊戯の指導をする**のに使用されてきた。人形は指揮をしたり、自分をさしたり、子供たちをさしたり、うなずいたり、首を振ったり、手をたたいたりすることができる。

㈣、子供たちが教室にはいって来る時に、**入口であいさつをする**のに用いることにより、彼らの興味を引くことができる。ある教師は子犬の人形を自分の腕の中に抱くような形で使用した。子供たちがはいって来るのを見ながら教師は、「ビリーが元気になって、今日は来られてよかったわね」と言う。すると子犬はさかんにうなずくか、前足をたたくかするのだった。

㈤、ある教師は、**子供たちが暗唱聖句を言うのを聞く**のに、人形を使った。この人形は、生徒がよくできると手をたたき、よく聞こえないと、耳をそば立てるふりをするのだった。

第三部　映写される視覚教材

第十章　動画と静画の映写

動画の映写

動画はどのようにして「動く」のか

映画は単に、静画の錯覚に過ぎない。フィルム上の人物が実際に動くのでないことは、明らかである。動画は、**映像の持続**（残像）という原則を基礎にしているのである。そして光を実際以上に長く見ているように、感じさせるのである。しかしながら実際は、スライド（訳注―一コマずつわくに入れられた静画フィルム）やフィルム・ストリップ（訳注―一コマずつになっていない長い静画フィルム―共に後述）のように、あとの絵が前の絵に次々と、とって代わっているのである。アパーチュア（訳注―フィルムのコマののぞく穴）の近くにある機械のつめ（クロー）が、フィルムを一時に一コマ（一つの絵）ずつ、引きおろすのである。ゲートの上下に、フィルムを輪のように（訳注―ループと言う）ふくらませなくてはならない理由がここにある。それは、クロー（つめ）がフィルムを引きおろす時、ぴんと張ったフィルムでなくゆるいフィルムを引っ張ることになるからで、フィルムは裂けないのである。ところがこのループをな

くすとフィルムは裂けるのである。

どの絵もスクリーンの上には一秒の二四分の一しか出ないのである。機械の中のシャッターが、スクリーンに光が出るのを瞬間的に閉ざす間に、代わりの絵が出てくる。けれども映像の持続のために、目はそれを見ない。実際にスクリーンは、映写の半分の時間は暗くなっているはずである。昔の動画は、回転が遅く暗やみと光の間の変化が見ている者にわかるので、チカチカしたのである。映画が動くのは、スクリーンが暗くなっている時だけである。

フィルムのスピードは全世界共通である。だから、ある寸法のフィルムにとった写真は、その寸法のフィルムのためにできた映写機で、どこででも映写することができるのである。

絵はどのようにして映写されるのか

映写は、光が開口部を通る時に、透明な写真の上に集中し、幾つかのレンズを通して拡大され、映像がスクリーンに投げ出されることによって、できるのである。どの機械にも操作の手引き書がついているはずである。もしそのような手引き書がなければ、メーカーから手紙で取り寄せることができる。その際に映写機の型式番号（モデル・ナンバー）を書くことを、忘れてはならない。

映写に関係のある部品はランプハウス（電球の格納室）の中にあり、動く部分はランプハウスのすぐ

前にある。

反射鏡は電球のすぐうしろにある。

電球は投影のための光を提供する。球が切れた時のために、いつでも予備の電球を準備しておくべきである。

コンデンサー、または集光レンズは、電球のすぐ前にある。それは電球の光線を屈折させて、アパーチュアのところで集中するようにし、写真がそこを通過する際に、最も強力な光を当てるようになっている。

アパーチュアは集光レンズの前にある。実際には、これは三つあるのだが、ゲートを閉じて全部が正しい位置に来ると、一つの穴になるのである。アパーチュアは三つともきれいにし、スクリーン上の写真の周囲にけばけばが現われないようにすべきである。

映写レンズは、いろいろな寸法のレンズに取り代えることができる。この目的も光を屈折させることであるが、今度は光を拡散し、映像がスクリーンの上に拡大されるようにするのである。

映写の準備

機械をがっしりしたテーブルか台に乗せ、映像がスクリーンの上に正しく映るような位置に置く。機

械をあまり上向きに傾けなくてもすむように、適当な高さに置かねばならない。あまり傾けると映像がゆがみ、電球の寿命も短くする。

映写機は、映像がどちらの方向にもはみ出さないように、スクリーンから適当な距離の所に、置かなければならない。映写機とスクリーンの間のことを映写距離と言い、映写距離が長ければ長いほど映像は大きくなる。映像を大きくしたければ映写機をスクリーンから離し、小さくしたければ映写機を前に動かせばよい。映像の大きさを小さくする必要があるが、映写距離を調整できない時には、焦点距離の長い映写レンズを使うと、寸法を調整することができる。

スクリーンは映写機に対して、正しい角度に立っており、横を向いたり、曲がっていてはいけない。

スピーカー（拡声器）またはアンプ（増幅器）は、できるだけスクリーンのそばに置くべきである。もし必要なら、会衆の斜め前に置いてもよい。

電源コードとスピーカー・コードをつける場合、できるなら、両方を平行に並べてはいけない。そうすることによって音声が影響されることがある。コードは人々が踏まないように、通路の外に置くべきである。

座席の並べ方、換気、部屋の暗さなどを調べておく。

映写機の操作

どの機械にも、正しく組み立てたり、配置したりするための、説明書がついているはずである。

実際の映写の前に　あらかじめ準備を整え、会衆が集まったら映写できるようにフィルムの準備をしておく。

(1)、方向スイッチ（訳注―フィルムを送る装置についており、「前方」と「後退」があるが、「後退」のない機械もある。）を調べ、「前方」へ入れておく。

(2)、速度スイッチを調べ、「有声」または「無声」に入れておく。

(3)、映像をできるだけ鮮明に、焦点を合わせておく。焦点を一番鮮明な場所の前後に動かしてみれば、どこが一番鮮明か、はっきりわかる。

(4)、映像のわく取りをし、隣の映像が出ないようにする。

(5)、音量と音質をためし、音量つまみの位置を注意しておく。大抵はその位置を示す印がついている。部屋に人がはいると、幾らか音を吸収するから、テストの時の音量は実際の場合より幾分大き目がよい。

(6)、フィルムを映写機で逆回転させて最初のコマを出し、映写の準備を完了する。**直ちに方向スイッ**

チをまた「前方」に切り変えておくこと。

フィルム映写の時　アンプが暖まるのに少し時間がかかるから、映写機を操作する二、三分前に音声スイッチを入れる。けれども音量つまみはゼロのところに戻しておく。映写の際の順序は次のようである。

(イ)映写スイッチ　(ロ)電球スイッチ　(ハ)音量つまみをテストした時の場所まで回す。

フィルムは「終わり」という字の所まで映すが、何も写っていないフィルムの端まで映してはいけない。「終わり」の字が出た時にスイッチを切る順序は、始める時と逆である。

(イ)音　(ロ)電球　(ハ)映写機。電球と映写機のスイッチは同時に切ってもよい。

残りの何も写っていない部分のフィルムも全部通してしまい、会衆が帰ってからフィルムを巻き戻す。巻き取り用のリールは、フィルムのはいっているリールと同じ大きさか、もっと大きいものでなくてはならない。絶対に小さいものではいけない。手もとに何種類かの寸法のからのリールを持っているとよい。ある会社はフィルムを巻き戻さないで返すようにと言うので、交換できるような、同じ大きさのリールが必要になるからである。

フィルムの巻き戻し

説明書に従って行なうこと。フィルムは次の機会にすぐ映写できるように、正しく巻き戻すことが大切である。

もし巻き戻しギヤを使う機械なら、使用後はずしておくべきである。**巻き戻しには逆回転スイッチは使わない**。これはフィルムを、映写機を通してうしろに戻す時にだけ使うのである。巻き戻しは、映写の機構とは無関係に行なうことができるのである。巻き戻しの時にも、「前方」スイッチは、はいっているのである。

映写機の手入れ

映画の映写機は複雑な機械である。機械を良好な状態に保つために、映写技師がすべきことが幾つかある。けれども機械の修理や、機械的調整は**絶対に**してはいけない。このような修理は訓練を受けた修理工によってのみ行なわれるべきである。

掃　除

1、ゲートの中の**プレート**は、その上を通るフィルムからほこりを集めるので、ほこりがフィルムを傷つけないように、いつもきれいにしておかなければならない。掃除をする時に**金属類は絶対使っては**

いけない。プレートに傷ができると、それが今度はフィルムを傷つけるようになるからである。サウンド・トラック（音声部の通路）の下の溝や、プレートの高くなっている両端の近くに、たまったほこりを取り除くためには、楊子（ようじ）のような小さな棒を使うべきである。

2、**アパーチュア**は、このためにできている小さなブラシか、パイプ・クリーナを適当な形に曲げて掃除をする。必ずゲートの中の三つとも掃除すべきである。ふちについているけばけばは、写真と同じように拡大されて、映像の周囲に、糸のような形で現われてくるのである。

3、**映写レンズ**も時々、よごれたり、焦点の調整の時に指のあとがついたりする。これはレンズ用の布でふく。集光レンズも時々よごれていないか、調べてみるべきである。

給　油

機械についている説明書には、映写技師が油をさすべき場所が示されてある。ある部分は、ほかの部分よりも回数が少なくてよい。**控え目に給油すること**。

電　球

予備の映写電球は、いつも機械と一緒に、持っていなくてはならない。電球は予告なしに焼けたり、

フィラメントが切れたりするからである。

電球が熱い時には、すぐに冷たい空気の中に取り出してはいけない。急に冷却すると電球がふくれてしまう。そうなると電球をこわさないと取り出せなくなってしまう。そして細かなガラスが、ファンによって機械の中に吸い込まれるという、余計な問題が起きることになる。このようなガラスは機械を損傷するし、掃除のできるのは修理工だけである。機械が冷却する前に動かさなくてはならない場合、電球スイッチは入れずに映写スイッチを入れて、数分間、ファンを回すようにすればよい。熱いうちに機械を動かすと、フィラメントがたるんだり、切れたりするからである。

エキサイター・ランプと、巻き取りアーム（腕木）のバネの予備も、機械につけておくべきである。

映写上の一般的な問題

映写機を使用している際に起きてくる問題を全部、ここに挙げることは不可能である。よく起きる問題とその理由を、次にまとめておこう。

スクリーンに光が出ない。

1、コードがさし込んでない。

2、電球が焼けている。
3、レンズの前に障害物がある（小さなふたのようなもの）。
4、電球スイッチがはいっていない。

スクリーンの上で映像がチカチカしたり、とんだりする。
1、ループが小さすぎる。
2、フィルムがスプロケットをすべった。
3、スプロケットの穴が切れて、クローがフィルムをかんでいない。
4、瞬間的なチカチカは、フィルムのつなぎ目によって出るかもしれない。

映像が鮮明でない。
1、ゲートが閉じていない。
2、焦点が正しく調整されていない。
3、映像のふち取りが正しくされていない。

音量が不足。
1、有声フィルムが無声用のスピードでかけられている。
2、スピーカーの場所が悪い。

3、スピーカーのカバーが取り除かれていない。
4、スピーカーが変な方向を向いている。
5、スピーカーとの接触がゆるいか、修理が必要。
6、サウンド・ドラムの上で、フィルムがゆるんでいる。
7、サウンド・ドラムの上で、フィルムが中心からはずれている。
8、エキサイター・ランプの交換が必要。
9、下のループが大きすぎて、映像と音声が同調しない。
10、音量のつまみが正しく調整されていない。
11、音質つまみの調整が必要。

フィルムが機械の中にはいっていかない。
1、巻き取りアームのスプリングがはずれている。
2、巻き取りアームのスプリングがひどく伸びてしまっている。
3、クラッチがはずれている。
4、巻き戻しギヤがはいっている。
5、スプロケットの穴が裂けている。

6、フィルムがスプロケットに合っていない。
7、方向スイッチが「後退」にはいっている。

スクリーンに黒点やしみが出る。

1、ビーズでおおったスクリーンからビーズがはがれて、反射しなくなっている。
2、アパーチュアの掃除が必要。
3、フィルムがよごれている。
4、スクリーンがよごれている。
5、映写レンズがよごれている。

映写する静画

映写する静画は、暗室で見るので、邪魔な要素が除外されるという、動画の持つ利点を持っている。今は、スライドも、フィルム・ストリップも一つの機械で映写できる。静画は反射幻灯機、立体幻灯機、頭上映写機（タキストスコープ）でも映写される。けれども、あとの二つは主として一般教育で使用されているもので、教会学校の教育では使われていないので、本書では取りあげない。

幻灯の映写機は映画の映写機よりも、最初（購入時）の値段がずっと安いし、使い方も簡単である。

途中、どこででも止めて、討論することができる。材料もずっと安いので、一つの教会が恒久的なライブラリーを作ることも可能である。動画のフィルムは大抵、賃貸しで、一回ごとに返さなくてはならない。よいフィルム・ストリップのライブラリーは有益であるから、教会でも考えるべきものである。

フィルム・ストリップは知識と理解を与えるのに有益であるが、感情や意志に訴えるものとしては動画がまさっている。

幻灯の映写

映写機

兼用幻灯機は、取りはずしのできるスライド用キャリッジと、スライドを映写する時には脇にどけることのできる、フィルム・ストリップ用の部品を備えている。この幻灯機は今までのところ、教会での教育では一番有益である。スライドだけ、あるいはフィルム・ストリップだけしか映写できない機械は購入を勧められない。

幻灯機は電球の大きさで種々ある。ワット数が多ければ、映像がそれだけ明るい。教室での使用には三百ワットの電球で充分であるが、五百ワットを選んでおいた方がよい。なぜなら講堂でも使うことが

できるからである。

幻灯機には、フィルムに熱が行かないようにするファン（扇風機）のついているものと、ついていないものとがある。授業には、ファンのついているものの方が、ずっと好ましい。

スライド幻灯機には、自動的にスライドを交換できるものがある。これは講師が自分で映写しながら、講壇から聴衆に話しかけたい時に、特に便利である。スライドやフィルムを、レコードと同調させる附属機械がついている映写機もある。レコードの小さなブザー音がスライドを自動的に変えたり、操作をしている人に教えるサインになっている。このような映写機は手でいちいち変える必要がない。

スライド

標準的スライドは普通六センチ×六センチと言われている。これはスライドのわくの外側の寸法であるが、写真自体は三五ミリのフィルムのコマの大きさである。これとは違う寸法のスライドもあるが、ほとんどの教育用教材はこの標準寸法に作られている。

スライドは自分で作ったものでも、教室用に市販されているものでもよい。どちらの場合にも、厚紙のわくに貼るか、二枚のガラスの間にはさむようになっている。厚紙のわくに貼ったものの方が、安いが、フィルムがむき出しである。ガラスでおおったものは、よごれたり、傷がつかないように守られている。

フィルム・ストリップ

教育用フィルム・ストリップは普通、専門家によって製作されている。けれども自分でも写真を三五ミリ・フィルムにとって作ることができる。その際、現像所には、フィルムを幾つにも切らないように頼んでおくことが必要である。これは普通、ばらばらのスライドほどうまくできないものである。それはアマチュアの写真家は必ずしも、使いたいと思っているようなよい写真を、その通りの順序でとることができないからである。

フィルム・ストリップには個々のスライドよりも、幾つかの利点がある。

(イ)、個々にわくをつけたものと比べて、保管場所を取らない。フィルム・ストリップは二〇コマから八〇コマぐらいまで、いろいろな長さがある。そして一番長いものでも、巻いて、小さな器に入れておくことができる。

(ロ)、いつでも正しい順序になっている。

(ハ)、小さなかんにしまっておくので、ほこりや、よごれから守られる。

(ニ)、わくをつける必要がないから、別々に貼りつけられた同じ数のスライドに比べて、廉価である。

また、フィルム・ストリップを買って、あとでわくに貼ることも可能である。

フィルム・ストリップには賛美歌、聖書物語、教授法、生徒の研究、その他の教師訓練講座、世界の人々、比較宗教、科学と創造における神の知識などがある。これはあらゆる種類の教材の中でも、非常に融通のきく資料である。

フィルム・ストリップを扱う時は端を持って、表面を傷つけないようにすべきである。いつでもフィルムには、機械にさし込むように、短い先端部分（リード）がついている。

映写したあとでフィルム・ストリップを巻く時に、特別な注意が必要である。幻灯機に巻き戻し用のマガジンがついていない時には、見せ終わった時にフィルムが機械の前に垂れさがってしまう。**機械に最も近くにある端から巻き始めること**。何気なく、機械から遠くにあるフィルムの端を取って、巻き始めやすいが、こうすると初めの部分を、一番中に巻き込んでしまうことになる。

フィルム・ストリップは乾燥して、もろくならないような所に保存すべきである。また湿気を呼ばないようにもすべきである。

幻灯の映写準備

どの機械もメーカーによって違うから、メーカーの使用説明書に従うことが大切である。次にあげるのは一般的に応用できる、操作上の注意である。

1、九〇から一一〇センチの高さのテーブルを使う。しっかりしており、ぐらぐら揺れないものであること。このテーブルに横に、引き出す棚などがあれば、映写の時にスライドなどを置くのに便利である。

2、映像がスクリーンに合うように映写距離を調整する。幻灯機は動画の映写機よりも、スクリーンに近くなる。それは映写距離の長さが拡大の度合いをきめるからであって、スライドに使う三五ミリのフィルムは、一六ミリよりもずっと大きいのである。

3、アパーチュアがきれいであること。

4、メーカーの説明書に従ってフィルムをさしこむ。

5、焦点とわく取りを注意する。

6、スライドの場合、キャリッジが確実に固定されているか、フィルム・ストリップ用の器具が邪魔になっていないかを確かめる。

7、フィルム・ストリップを使う時には、ゲートがしっかりしまっていること。

8、写真を見せながら、別の人が講義をする場合には、サインの打ち合わせをすること。一番スムーズで、邪魔にならないサインは、ポケット用懐中電灯を使うことである。小さな電球は瞬間的に光り、しかも観衆の注意を引くほどのものでないからである。

9、台本を読む光源を手に入れること。これはかさのついた卓上スタンドか、懐中電灯がよい。懐中電灯の場合、光を下に向けるように注意すること。

10、映写している時にスライドの箱を置く場所と、映写ずみのスライドを入れる箱の置き場所を整えること。

11、スライドは正しい順序に並べておくだけでなく、正しい向きに並べておくことが必要である。スライドは機械の中に、絵を逆さにして入れなくてはならない。幻灯機に入れる時の正しい向きにして、右上の隅に、指をつける場所（小さな白いステッカーなど）のしるしをつけておくと、あらかじめ準備するのに楽である。

反射投影

反射幻灯機は光を通さない材料を用いるものであり、鏡と映写レンズの構成で作用するのである。

これは鏡を用いて映像を反射させるので、色のついた映写をすることができる。雑誌の絵、あらゆる種類の平面画、平らな物体、自作の教材、地図、図表など、不透明なものなら何でも使うことができる。寸法はいろいろで、大きなものは三〇センチ四方のものの映写ができ、小さなものでも一五センチ

四方のものの映写ができる。教室用には、大きいものの方が実際的である。

最も満足のいく幻灯機は、ファンつきの千ワットの型である。ファンは機械の中の写真を冷却するだけでなく、写真を幻灯機台にピッタリと固定する吸引力を提供するからである。

ある反射幻灯機には、ハンドルで回転する台がついていて、一連の絵を、いちいち手で取りかえずに、スムーズに巻き込んでいくようになっているものもある。ある幻灯機には矢印をつける特別な附属品があって、幻灯機から操作して、検討している絵のどの部分でも、スクリーンの上で指摘することができるようになっている。

この幻灯機の一つの利点は、最初購入（投資）したら、その後教材費はほとんどかからないということである。教材は本や雑誌から得るのだから、出費はほとんどないのである。しかしながら、動きと共に与えられる現実性と迫真力がないという、静画特有の限界を持っているのである。

この型の幻灯機は、ある種の授業には特に価値がある。

(1)、子供たちが書いた絵や、子供たちが自然の中から見つけた物で、ほかの人にも見せたいと思っている物を映写する時。それは、子供たちが読んだ物語を示す一連の絵や、自分たちで見て印象を受けた事の絵、自分たちの学んだことを示す地図やグラフや図であるかもしれない。

(2)、これは、全員に見せたいのに、教師が一つしか教材を持っていない場合に、非常に役に立つ。あ

まり厚くない本ならば、どのページでも見せることができるし、雑誌ならば、切りぬいたり、全員に回覧させる必要もない。一つの楽譜を全員で見ることもできるのである。

いろいろな寸法の幾つかの絵を使う場合、それらを同じ大きさの、ラシャ紙のような台紙にのりづけしておくと操作が容易である。もし子供たちが絵物語を書く場合、一人ずつ別に書かせて、それを細長い紙にのりづけし、台を回転させながら機械の中を通らせるとよい。ゴムのりを使えば、絵は平らにつくだろう。

この幻灯機のための材料は、教師によって創作されたり、整えられたりするので、専門家によって作られ、市販されている材料や台本はない。**プラスチック**（あるいはビニール）**の被膜加工をした材料は、使うことができない。**

この幻灯機はスクリーンにかなり近く置かなければならない。三〇センチ四方の大きさの絵と、一六ミリのコマの大きさを比較してみれば、あまり拡大しなくても、絵はスクリーンいっぱいになることがわかるだろう。

本のページを投影する場合、綴じている側がカーブしているので、同じように焦点を合わすことができないことがある。本を開いても開いた一方が厚く、他方が薄い場合、薄い方の側に別の本か雑誌を入れると、同じ高さになって焦点を合わせるのが容易になる。

映写のための附属品

一、フィルム

㈠、寸　法

フィルムの寸法はその幅で呼ぶ。キリスト教の教育では、三種類の寸法が一番よく使われている。

三五ミリ・フィルム　三五ミリのスライドとフィルム・ストリップに使用されている。

一六ミリ・フィルム　普通、教会や学校用として手に入れることのできる、専門家によって作られた映画に使われている。

八ミリ・フィルム　この寸法のものは、アマチュアによって家庭用映画に使用されている。これは一メートルぐらいまで、充分に拡大することができる。

㈡、有声または無声フィルム

有声フィルム　このフィルムはスプロケットの穴と平行にサウンド・トラックがあるので見分けがつく。一六ミリの有声フィルムは、フィルムの片側に一列だけスプロケットの穴があいている。三五ミリの場合は、両端にスプロケットの穴があいている。八ミリのフィルムは幅が狭いので、無声フィルムで

も、スプロケットの穴は一列しかない。

有声フィルムは、無声フィルム用に作られた機械に、絶対に使用してはいけない。映写機のサウンド・ドラムは必ずゲートの下にあるから、フィルムの下のループはかなり正確でなくてはならない。一六ミリ・フィルムでは、映像と音声は二五コマ離れており、音が映像より二二・五センチ先についているのである。

有声フィルムは、一秒間に二四コマ進む。これより速くても、遅くても、音声に影響が出てくる。

無声フィルム　今日、教会用の無声フィルムは比較的少ない。けれどもなお、教育機関のために無声フィルムは幾らか作られている。**無声フィルムは有声の映写機に使っても無害である。**

㈢、フィルムの手入れ

フィルムは高価であって、しかも破損しやすい。映写技師はできる限り、フィルムを正しく取り扱うように注意すべきである。

シンチング（すじがつく）　フィルムの巻き方がゆるかったり、大きすぎる場合、フィルムを強く引っ張って、締めてはいけない。これは「シンチ（腹帯）・マーク」と言う（訳注―映写して「雨が降る」という状態）縦の傷をフィルムにつけることになる。たとえフィルムがゆるくても、普通のように機械にさ

しこめばよい。問題なく動いていくはずである。フィルム・ストリップが大き過ぎて、かんにはいらない場合は、手で巻き直したらよい。

取り扱い　フィルムについた指紋は、スクリーンに映写されてしまう。初めと終わりのリーダー部分を除いて、フィルムはいつも、ふちを持たなくてはならない。

スプロケットの穴　フィルムを機械に等分に入れる働きをするスプロケットの穴を裂かないように、注意をしなくてはならない。穴が裂けると、ループがきつくなる。そしてスクリーンの上の映像がゆがむ。そして穴がもっと裂けることになる。

映写技師の問題は、どのようにしてこの穴を直すかではなく、どのようにして穴が破れないようにするかなのである。機械にフィルムを正しく入れること、機械を回す前に手で送ってためすこと、フィルムがパタパタと音を出し始めたらすぐに映写機を止めるということが、スプロケットの穴が裂けないようにするよい方法である。

ある機械は、機械を回しながらでもフィルムの調整ができるが、あるものはできない。いつでも映写スイッチを急いで止めるのが安全である。そうすれば、機械の全部分が動きを止めるからである。調整装置がついているかどうかわからなければ、いちいち機械を止めるのは免倒であるが、フィルムを破損するよりはましである。

焦げ穴　フィルムは熱に対して敏感である。フィルムを調整するためにクラッチをはずすと、アパーチュアの上に一つのコマがやってくる。集光レンズが光を集中する。だからそのコマを、あまり長い間同じ所に置いておくと、フィルムに焦げ穴を作ってしまう。フィルム・ストリップの場合には、討論をして、コマを長くそのままの位置にしておく危険性がある。特にファンのない場合、危険である。

ある動画の映写機には、フィルムを守る自動シャッターがついているが、どの機械にもついているわけではない。電灯をつけたまま、フィルムの回転を止めるようなことは、避けなければならない。

切断　フィルムを映写している際に切れた場合、二つの方法が考えられる。

(1)、フィルムが巻き取りリールに届くほど長く出てくるまで、機械を回転させる。手でフィルムをおさえて回転させ、リールにしっかり巻いて動かなくなったら、映写機をスタートさせる。映像は一部とんでしまうことになる。

(2)、非常に小さな紙クリップで二つの部分をつないでおく。針やホッチキスを使ってはいけない。フィルムは返還された時、調べるのである。その時検査技師が針や、ホッチキスでけがをするかもしれない。また、フィルムの他の部分が傷つくかもしれない。だから第一の方法が安全である。セロ・テープを使ってはいけない。セロ・テープが触れた部分は全部、切り取らなくてはならないのである。

フィルムはスプロケット、またはローラーを通ったあとで、臨時につないでおくようにすべきである。切れた所を一緒にして、リールに少し巻きつけ、引っ張っても抜けてこないようにしておくのが最善である。

時々フィルムは、前に接着した所から離れることがある。その場合、切れた所はぎざぎざでなく、平らである。フィルムはほかの原因で切れた時と同じように、取り扱うべきである。

接着　取り扱い者は貸し出し用のフィルムを返す前に接着してはいけない。正しく接着するには、接着機を使うのである。そうすればフィルムを適切に切り、適切な分量だけ重なるようにすることができる。接着機（スプライサー）は高価なものでないから、自分でフィルムを持っているなら、当然器具の一つとして備えておくべきである。コマを切る時は音声に関係するから、できるだけ少なく切り取るべきである。どの機械にも、接着に関する説明がついているはずである。

傷　フィルムは、前述したシンチングや、きたないゲートの溝で傷つくことがある。

保存　フィルムは長持ちするものであるが、手入れを必要とする。フィルムは熱のために乾燥し、もろくなる。また、湿気にも悩まされる。大抵は一階の戸棚や、棚で充分に保存できる。取り扱い中に、フィルムの表面がよごれたり、しみがついた場合、それをふき取るものが市販されている。よごれたフィルムは、しまう前に、きれいにしておくべきである。

二、スクリーン

スクリーンを購入する際には、材質、寸法、形、携帯性などを検討すべきである。

(一)、材　質

ビーズ・スクリーン　これはどのスクリーンよりも、よく反射する。ビーズでおおってあるスクリーンは、光を光源の方に直接反射させるので、適当な角度以外には、映像をゆがめて見せるようになる。観客は、**スクリーンの中心から**二六―三六度の範囲にいなくてはならない（見える全角度は五二―六〇度。）

このスクリーンは、ビーズがはがれて、反射しない部分ができるから、取り扱いに注意しなくてはならない。ビーズを再びつけることは不可能である。もしビーズがあまり沢山とれて、充分に見ることができなくなったら、新しいスクリーンを、スクリーン・ケースに入れ直さなくてはならない。

銀加工したスクリーン　これは昼間でも見えるように、特別な被膜をつけたものである。また、他の光線をさえぎるために、折りたたみ式の「日よけ」が横にある。

白ペンキ塗りのスクリーン　これは最も耐久性のあるもので、幅の広い部屋に最適である。これは壁の上にでも作ることができる。表面をなめらかにし、三回白ペンキを塗り、黒でふち取りをするのである。これには光沢のないペンキ（訳注―日本では水溶性の壁塗料）が必要である。

他のスクリーン　教室用の、安くて、効率のよいスクリーンの代用品として、巻き上げ式の白い布のブラインドを使うことができる。もし必要なら、幾つかの教室にとめ金をつけておいて、必要に応じてブラインドを移動させたらよい。紙のブラインドは表面がなめらかでないので、あまり反射せず、よくない。

(二)、スクリーンの寸法

スクリーンの大きさは、部屋の大きさによってきまる。購入する際には、大きな講堂での使用を除いた、あらゆる種類の使用法に合うものを選ぶべきである。

一般的には、**スクリーンの幅は、スクリーンから一番うしろの観客までの距離の、六分の一であるべきである。**観客がスクリーンから七メートルも離れてすわっている場合、小さな一メートル二〇センチの幅のスクリーンは使うべきではない。

どんな時にも、映像がスクリーンの周囲の天井や壁に映るようではいけない。映写距離の長さはある程度、スクリーンの大きさできまるのである。

観客の最前列とスクリーンとの間の距離は、スクリーンの幅の二倍で、二メートル以下ではいけない。スクリーンの高さは、底辺が最前列の観客の目の高さに来るようにすべきである。

㈢、スクリーンの形

スクリーンは矩形か正方形である。スライドを使う場合、縦、横、どちらにも映写できるように、正方形のスクリーンが必要になる。だから、いつでも正方形のスクリーンを購入するのが一番よいのである。

㈣、スクリーンの携帯性

普通の教会では、どのクラスでも使えるから、携帯用スクリーンが最もよい。携帯用スクリーンでも、大きいものも、小さいものもある。非常に大きなものは、折りたたんでケースに入れ、組み立て用のわくに広げてつけ、取りはずしのできる台に乗せるか、壁についているフック（かぎ）に掛けるようになっている。小さな携帯用スクリーンは、折りたたみのできる三脚台についたケースにはいっている。

三、コード

アンプ用のコードも、電源用のコードも、椅子の脚や、テーブルの脚のまわりに、二、三回ゆるく巻いておくべきである。そうすればだれかがつまずいて、急に引っ張られても、椅子の周囲の輪がきつくなるだけで、器具そのものを引っ張ることがない。

もし電源コードにつぎたしコード（エクステンション・コード）をつけたなら、つなげる前に両方を一

緒に結んでおくべきである。このように結んでおけば、コードに力が加わっても結び目がきつくなるだけで、コードがはずれることがない。

四、部屋

よい映写をするためには、部屋をできるだけ暗くすべきである。ブラインドやカーテンの周囲から、幾らかの光線がはいるのを防ぐことができないならば、光線が直接スクリーンにさし込まないように、スクリーンの位置を変えるべきである。特に、ビーズ・スクリーンには、光線が当たらないようにすることが大切である。

千ワットの電球のついた映写機は、薄暗い部屋の中でも、小さな映写機に比べて、思い通りに使うことができる。薄暗い部屋で鮮明な、明るい映像を得るには、映写機をスクリーンに近づけて、映像を小さくすればよい。

映写中は適切な**換気**があるようにしなくてはならない。空気がはいらないよりは、少しぐらい明るくても構わない。

操作がスムーズにいくように、スイッチや、コンセントの場所を、注意深く覚えておくべきである。もしできるなら、電灯を部屋の前からでも、うしろからでも操作できるようなスイッチにしておくと

よい。

映写する補助教材による授業

映写する補助教材には、他の視覚授業の方式よりもすぐれた利点がある。

一、暗室という**心理的利点**がある。暗やみの中で一か所に集中している明るい光は、人々の注意をそこにある一つの思考に引き寄せ、普通ならその教室にある、数多くの邪魔物を排除してしまうのである。生徒は自分の周囲の人々や、その部屋にある物のことを気にしなくなるのである。

二、**全員が同時に、同じ絵を見ている**という事にも価値がある。普通の絵を使うなら、全員に見えるような大きなものか（そのような大きなものが必ずしも手にはいるものではない）、全員に回覧するかしなくてはならない。回覧している間に注意を引きつけることは困難であり、時間も注意力も失われてしまうのである。

三、これが**動画**であるなら、動きという、もう一つの価値がある。現実性と興味が、ともに高められるのである。はるか遠くの人や、場所の、特徴ある現実の生活が、共通の体験となるのである。

しかしながら、映写器具を使用することは、準備を不用にするとか、実習を保証すると考えてはならない。映画を使って適切な授業をする場合にも、確実な準備がなくてはならない。

映写器具を使ってする授業の準備には、**試写**が必要である。これは絶対に省いてはいけない。試写は、できるなら、実際に映写する直前でなく、しばらく前にすべきである。試写により、選択がきまるのである。試写の際には、次の事を注意すべきである。

(イ)、フィルムの長さ　(ロ)、フィルムの品質　(ハ)、学課の目的に対する、フィルムの要点の関係

品質の中には、報道の正確性も含まれる。フィルムは時代遅れのものではいけない。アングル・ショットは面白い写真になるが、均衡をゆがめたり、現実性を奪うので、教育にはよくない。

試写の間に、鉛筆と紙を使って、授業の時に強調すべき思考を書きとっておくとよい。また何か特別な準備を必要とする事があれば、それも書きとめておく。

授業の準備として、必要な器具を整えることもしなくてはならない。多くのグループが、同じ器具を使っているような組織では、あらかじめ、使用するスケジュールを立てておくことが大切である。

生徒をフィルムに対して備えさせる。子供たちが教室にはいって、映写の準備のできている器具を見て、「わぁー、今日は映画だ！」と叫ぶのは珍しいことではない。事実、生徒にとっては、それだけの事なのである。事前の準備なしに、事後の意見発表もなしに、映写がなされる。それはただ映写されるだけで、生徒はそれが**授業**の一部分であることは全く感じないのである。

フィルムは、

(イ)、クラスですでに討論されている思考を発展させるため、

(ロ)、新しい討論を導入するため、

(ハ)、討論を要約するため、

に使用すべきである。

フィルムの映写の結果、生じる**討論の計画を立てること**。これには、いとぐちになる質問を、幾つか作ったり、一連の特別な紹介事項を準備することが必要かもしれない。

器具の使用法と学課の提示の両方を、完全に把握するまで、**練習をすべきである。**

訳者あとがき

本書の著者、マキシン・ウィリアムズ女史は、私が今から十年以上も前に留学した、米国ワシントン州カークランドにある、ノースウエスト大学のキリスト教教育学の主任教授である。アメリカ人としても大柄な先生が、度の強い眼鏡を光らせて生徒の前に立つ時、私たちは楽しみながらも、実に多くの事を学びとったものである。最初、はからずも単位の関係で、先生の授業に出席した私は、その後も原理的なものや実際的なものを合わせて、幾つも単位を取ることになり、キリスト教教育というものに大いに開眼させられたのである。そして、先生はただに新しい知識を示すだけでなく、自分で研究をする方法、資料を集める方法を実際に示して下さった。当時私が集めた資料は、帰国後、今日まで、非常に役立ってきた。帰国以来、私が十年以上にわたって日曜学校部の委員とし、部長として奉仕ができたのは、実にウィリアムズ先生のお陰であると言わねばならない。

本書を読む人は、理論的なものが、実際的なものと織りなされて出てくることに、気付かれたであろうが、これが先生の本当の姿であると言うことができよう。また、海外宣教がしばしば強調されているが、先生自身スペイン語が堪能で、今までに三回も大学の夏期休暇を利用して、中南米の聖書学校において教鞭をとるほどに、海外宣教に熱心なのである。

このたび、これを翻訳しながら、私はひと昔前の先生の教室にいるような錯覚に、しばしば落ち入ったのである。

本書は、視覚教材による教育を取り扱ったものであるが、今更ながら、日本のキリスト教会がいかに遅れているかを、痛感させられるものである。特に訳出に当たって困難を感じたのは、適当な日本名がないということであった。英語がそのまま日本語になっている場合もあるし、間違って使われている場合もあるようである。そこで訳者としては、精いっぱいの努力をしたつもりであるが、あるいは違った用語を使ったり、正しくそのものを示していない場合があるかもしれない。そのため、特に第十章の用語は、キリスト教視聴覚センター発行「映画伝道」に準拠したことを感謝をもって、申し添えておきたい。

また、アメリカと日本の事情の相違ということもある。日本で視覚教材を手に入れる最も確実な方法は、自分で作ることなのである。視覚教材を製作して、教会向きに売り出しているという商社は、ごく限られているのではないだろうか。日本語になった映画を日曜学校で使うことなどは、ほんとうにまれな事のように思える。だから自然、説明にも無理なところが出てくるのである。

けれども訳者は、努めて日本の状態に適応させず、原文を忠実に訳出するように心がけた。それは、その事によって、読者に、恵まれた米国の教会の事情を少しでも知ってもらい、それを目標に励んでもらいたいと思ったからである。

そのために、例話も人名も、原文の通りにしたので了承していただきたい。どうしても必要と思われる所には、(訳注—)として最少限度の説明を入れておいたので、参考にしていただければ幸いである。

なお本書は、米国アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団の、日曜学校教師訓練講座の教科書の一つである。今回、日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団日曜学校部においても、教師教養講座の教科書として出版されることになったのであるが、教団を越えて広く、各教会で用いられ、日曜学校の質的向上に役立てば幸いである。

引照聖句はもとより、聖書に関係ある事項は努めて、新改訳聖書に依拠したことを最後に申し添えて、筆をおくことにする。

一九七一年八月

目はつかむ
© 1971

1971年9月1日　初版発行

定価 550 円

著　者　マキシン・ウィリアムズ
訳　者　伊　藤　顕　栄
印　刷　村松印刷株式会社

発行所　日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団
日　曜　学　校　部
〒170　東京都豊島区駒込3の15の20
振替東京10877番　電話03-918-0497